

2017 年度

William Faulkner の *Sanctuary* と *Sanctuary: The Original Text* の

比較研究

指導教授：並木信明

研究科：文学研究科

専攻：英語英米文学専攻

氏名：岡田大樹

## 目 次

序論：二種類の <i>Sanctuary</i> の比較研究と <i>Sanctuary</i> 序文の関係	1
1 節： <i>Sanctuary</i> 出版の経緯	2
2 節：Modern Library 版序文の <i>Sanctuary</i> 批評への影響	4
3 節：本論における二種類の <i>Sanctuary</i> の比較研究の方法	11
第 1 章：語りの順序の再配置——相対化される登場人物たち	15
1 節：語り手と登場人物の関係の変化	16
2 節：読者に遅延する Horace Benbow	23
3 節：信用できない語り手たち	30
第 2 章：作中の出来事の再配置——Horace の物語の変貌	35
1 節：離婚の決意とヨーロッパへの脱出願望	36
2 節：Horace の嘔吐と Belle への手紙	39
3 節：早められた Goodwin のリンチ	46
第 3 章：削除される Horace の観察——露わになる語り手の観察	52
1 節：迫害者 Narcissa と被害者 Ruby の対立	53
2 節：Christ の属性を喪失する Tommy	66
3 節：“the man” でなくなる Popeye	70
第 4 章：Horace と Ruby の約束の意味の変質	75
1 節：Ruby の息子と newspaper gift の約束	75
2 節：Ruby の手と orange stick の約束	80
3 節：Horace の滞在先と Ruby を保護する約束	85
第 5 章：後景化する Sartoris 家	92
1 節：Benbow Sartoris の板挟み	93
2 節：自立する Miss Jenny	97

3 節: 脱 Sartoris 化する Narcissa.....	105
結論: <i>Sanctuary</i> 改稿の際に見出されたものと見捨てられたもの.....	112
1 節: テクストの順序入れ替えによる改稿.....	112
2 節: Horace の対象化と登場人物たちの相対化.....	116
3 節: SO の構成の対象化と挿話同士の相対化.....	119
表 A: SO と SR における語りの順序の異同.....	122
表 B: SO と SR における作中の出来事の順序の異同.....	123
付論: <i>Sanctuary</i> 改稿に関する二種類の表について.....	124
表 A について.....	124
表 B について.....	125
時系列の指標 (1)——5/3 (金)~5/18 (土).....	127
時系列の指標 (2)——6/17 (月)~夏.....	129
時系列の指標 (3)——5/19 (日)~6/16 (日).....	132
時系列の指標 (4)——Memphis の出来事.....	137
注.....	140
引用文献.....	155
参考文献.....	161

## 序 論

### 二種類の *Sanctuary* の比較研究と *Sanctuary* 序文の関係

本論では William Faulkner の第六長篇 *Sanctuary* の Original Text (以下 SO と呼称) と Revised Text (以下 SR と呼称) という二種類のテキストの比較研究を行なう。二種類の *Sanctuary* の比較研究には Linton Massey、Michael Millgate、Gerald Langford、菊池昭を代表とする先例があるものの、こうした研究は SO と SR のいずれか片方を中心的に扱う姿勢をとり、ふたつのテキストの優劣を判断することを目的として、方法的にはテキストの加筆・削除を中心に比較研究を行っている。本論は改稿が決意されたまさにその瞬間における、Faulkner という作者と *Sanctuary* というテキストの関係に対する関心から、ふたつのテキストを等しい距離感で扱う姿勢をとり、その優劣を定める前の段階に留まって比較を行ない、方法的には改稿におけるテキストの順序の入れ替えを中心に考察することによって、SO と SR が本質的に異なる構成に基づいたテキストであると明らかにすることを目的とする。

本作に二種類のテキストが存在することになった経緯、またその二種類が受けてきた毀誉褒貶は、本作が出版されるまでの経緯と絡んで複雑な様相を呈しており、またこの二種類のテキストに対する本論の立場を定位するためにも非常に重要である。そのため、本論における SO と SR の比較研究の方法について述べる本章では、まず *Sanctuary* という作品の成立史を確認し、次に Modern Library 版に付された “Introduction” (以下 ML 序文と呼称) が、従来の SO と SR の比較研究へ与えた影響について考察する。



## 1 節: *Sanctuary* 出版の経緯

Faulkner の長篇小説 *Sanctuary* は、まず *Flags in the Dust* が Harcourt, Brace から第三長篇 *Sartoris* として出版された 1929 年 1 月に手稿の形で書き始められ、タイプ稿が 5 月に完成した (Millgate 114; Polk, “Afterword” 294, “Introduction” viii)。この原稿は Harcourt, Brace から独立した Harrison Smith が Jonathan Cape と立ち上げた Cape & Smith へ送られたものの、このとき *Sanctuary* が同年 10 月に同社から出版される *The Sound and the Fury* に続く第五長篇として、直ちに出版されることはなかった。Cape & Smith の女性社員三人のうち、ひとりには本作を “a great book” であると評したものの、ふたりが本作をあまりに “shocking” であると評したために、出版すべきでないと判断されたのだという (Blotner 239)。

また ML 序文は Smith が Faulkner へ宛てた手紙で “Good God, I can’t publish this. We’d both be in jail.” (vi)<sup>1</sup> と述べた旨を記しており、*Sanctuary* が出版を拒否された理由として、当時の Faulkner にとって「想像できるかぎり最も恐ろしい (horrific) 物語<sup>2</sup>」であった本作が、そのあまりに不道徳な内容のために、警察の介入を招くおそれがあったためだと説明している<sup>3</sup>。後年の Faulkner は、当時はまだ時代が血生臭い暴力的な小説を受け入れていなかったためだと説明しているが<sup>4</sup>、結局このとき出版されることのなかったタイプ稿が、1981 年に Polk の編集によって *Sanctuary: The Original Text* として出版されており、本論はこれを SO のテキストとして使用する。

Massey は、このとき *Sanctuary* 出版は拒否というより実質的には保留されたのだと主張しており、ゲラ稿に記された日付から、Smith が 1930 年 5 月に *Sanctuary* の活版を組み始めていたことを指摘している。しか

しおそらくそれを知らされていなかった Faulkner は、1929 年の 10 月に着手した *As I Lay Dying* を 12 月に書き上げており、翌年 1 月にタイプ稿を完成させている。その原稿を受理した Smith はこちらの活版を組むために *Sanctuary* の作業を一時中断し、*As I Lay Dying* が 1930 年 10 月に出版されたあとで再び *Sanctuary* の作業に戻り、結局 *Sanctuary* のゲラ稿は、作者によるタイプ稿の完成から約十七ヶ月が経った頃、すなわち 1930 年の 11 月に Faulkner の元へ届くことになったのだという (Massey 197; Blotner 268; Polk, “Introduction” viii)。

ML 序文によれば、Faulkner はこのゲラ稿が届くまで *Sanctuary* のことを忘れており<sup>5</sup>、読み直した結果その内容をあまりに「酷い (terrible)<sup>6</sup>」と考え、すでに完成している活版を組み直すために決して安価とはいえない費用を折半し<sup>7</sup>、徹底的な改稿を施すことに決めた (Blotner 268, 270)。こうして Faulkner 自身が SO のテキストに加筆・削除・編集を施すことで生まれた SR は、12 月に Cape & Smith へ送られて、最終的に翌 1931 年の 2 月 9 日、彼の第六長篇として出版されることとなったのである (Polk, “Introduction” viii)。本作は Faulkner の最初のベストセラーとなり、五ヶ月で六刷に達した (Hamblin 56)。雑誌やラジオで賛否両論に様々な評が発信されたが、肯定的な評の多くは本作の恐ろしさを随一のものとして語り、Faulkner の有望な才能を讃えるものであった (Blotner 275-6)<sup>8</sup>。

Blotner によれば同年 4 月の段階で、Random House の Bennet Cerf は Faulkner に *Sanctuary* を同社の Modern Library 叢書へ収録したいと打診していた (275)。Faulkner は New York 滞在中、11 月にこの叢書のための “Introduction” を書き<sup>9</sup>、その手稿は Faulkner の literary agent であった Ben Wasson の事務所でタイプ稿化されて Cerf の元へ送られ、Modern Library 版 *Sanctuary* は翌年、1932 年 3 月に刊行されることとなった

(Blotner 294; Meriwether 475; Wasson 115-16)。以降、この版の冒頭に置かれた ML 序文は、Faulkner の書いた文章の中で最も有名なものとまで言われ (Millgate 113)、*Sanctuary* という作品に対する正当な評価を阻害させる要因として、長らく影響力を持つことになるのである。

## 2 節: Modern Library 版序文の *Sanctuary* 批評への影響

Millgate によれば、ML 序文冒頭の「私にとって、この本は安っぽい着想 (cheap idea) によるものである、なぜならこれは金を得るため計画的に構成された本だからだ<sup>10</sup>」という文章が、*Sanctuary* という作品に対する研究の先入観を形成した。初期の *Sanctuary* 批評は本作が Faulkner の他作品に比べて劣っているという主張と共に、それを作者自身が認めているとも受け取れるこの部分を援用したのだという。本作は “cheap idea” で書かれた小説であるから、重視するに値しないというわけである (113)。

しかしその後、Cowley の編集による 1946 年出版の *The Portable Faulkner* の “Introduction” を筆頭に *Sanctuary* を評価する流れが形成されるようになると<sup>11</sup>、ML 序文に対する解釈も変化することになった。SO のゲラを読み直した Faulkner がその内容を “terrible” と考え、大幅な改稿を施したことで SR を「*The Sound and the Fury* や *As I Lay Dying* にも恥じないもの<sup>12</sup>」に仕上げたという箇所が重視されるようになったのだと Millgate は述べている (113)。

しかし *Sanctuary* が評価されるようになったからといって、*Sanctuary* 批評に対する ML 序文の影響力がここで途切れたわけではない。*Sanctuary* を Faulkner の他作品に劣ったものとする傍証に用いられた ML 序文は、Moulinoux が指摘するように、今度は SO を SR に劣ったものと

して語るために使われるようになるのである (13)。1956年の Massey の研究以降、SO と SR のテキストの比較研究がたびたび行なわれてきたが、そうした研究は当初、ML 序文の記述に基づいて SO の “cheap” で “terrible” な性質を特定し、それが改稿によってどのように克服されたのか検証するという、SR 本位の姿勢で行なわれていた。

SO と SR を比較した最初期にあたる Massey の論考から、その傾向は強く表れている。Massey は SO の語りを時空や視点の混乱した未整理で粗雑なものとして、緩慢な Horace Benbow の物語と動的な Temple Drake の物語が噛み合っておらず、どちらの物語が本作にとって主眼なのか理解できないこと、また Horace とその妹 Narcissa Sartoris の手紙のやりとりで終わる SO の結末が消化不良であることを批判し、Horace の物語を大幅に削減して簡潔な語りに改稿し、結末を新たに書き加えた SR を評価している (202-04)。Massey は ML 序文の記述を「金のために小説を書くことで自身の芸術の質を下げた」ことへの弁解と解釈し<sup>13</sup>、改稿の際に Faulkner は「信じられないほど短い時間で書き上げた<sup>14</sup>」SO のテキストの「問題 (problems)」を修正したのだと述べており (202)、ここから彼が SO を、細かい推敲なく一気呵成に書かれたために、作者にも全体像が見えておらず、入り組んでバランスが悪くなったテキストだと見做していることが伺える。

しかし SO のゲラ稿を用いた Massey の研究は、1961年に Virginia 大学の Alderman 図書館に SO の手稿やタイプ稿が収蔵されるより以前のものであり<sup>15</sup>、SO の執筆期間が「三週間<sup>16</sup>」であるという ML 序文の言説に大きく影響を受けた内容となっている。後の研究は Alderman 図書館の原稿を調査することによって、Faulkner が SO の原稿を実際には約四ヶ月かけて執筆していたということや、また手稿の着手からタイプ稿の

完成までの段階において、Faulkner が SO のテキストの構成に腐心して章番号や頁番号を何度も書き換え、テキストの順序を物理的に入れ替えることによって、意図的に入り組んだテキストを構成していたことを発見してきた<sup>17</sup>。こうした知見に基づくならば、資料研究の不足した状態で行なわれた Massey の SO 評価には、SO の構成を Faulkner の意図したものとして扱っていない点で問題があるだろう。

後の SO と SR の比較研究を追ってゆくと、手稿やタイプ稿の存在もやはり、SO への ML 版序文の影響力を払拭できていないことが伺える。1966 年に SO と SR の比較研究を発表した Millgate は、SO の手稿やタイプ稿を参照し、SO が完成するまでの段階において、すでにテキストの細部の書き換えや順序の入れ替えが多く行なわれていたことに触れ (114-15)、SO が Massey の考えるような荒書きの原稿でないことを確認している。しかし SO の構成が 1929 年当時の Faulkner の意図によるものであることを踏まえながらも、Millgate は読者にとって理解しづらいテキストであるという点から、SO を否定的に論じている (116)。Millgate が SO の“cheap”で“terrible”な部分であるとするものは、SO のテキストを読みづらいものになっている原因でもある Horace の物語の散漫さであり、彼はそうした冗長な部分が削除された SR を Temple の物語に焦点を絞った作品と見做し、積極的に評価している (117)。

Millgate の主張の問題点は、Massey から一步進んで SO の複雑な構成を Faulkner の意図したものと認めているにも拘らず、SO のテキストが敢えてそのような形に組み上げられている理由について考察を加えずに、それをただ読者にとって読みづらいものだという点から批判していることである。しかし、前節にも引いた Blotner の記述に依拠するならば、SR と SO を比較する術を持たない 1929 年当時の SO の読者であった Cape

& Smith の関係者たちは、その構成に難があるためではなく、本作の内容が “horrible” であるために本作の出版を断念したのであった (239)。こうした経緯を踏まえるならば、Millgate もやはり ML 序文の影響を受け、SR から振り返る形で SO を把握しており、SO に見られる SR との差異をすなわち SO の欠陥と読み替えることで、いわば無いものねだりをするように SO の “terrible” で “cheap” な箇所を、遡及的に創出してしまっていることが伺える。

SR に見出される要素が SO に含まれていないことをすなわち SO の欠陥と見做すこうした批評は、SO のテキストを低く評価しようとする Faulkner が、あくまで ML 序文を書いた 1931 年 11 月時点の Faulkner であって、SO を執筆していた 1929 年 1 月から 5 月までの Faulkner でないことを軽視しているように思われる。1955 年の長野における Faulkner の、SO は「とても酷い書き方、安易な取り組み方<sup>18</sup>」で書かれた「劣った安っぽい作品<sup>19</sup>」であるという発言、また 1957 年の Virginia 大学における Faulkner の、SO は「劣った発想<sup>20</sup>」による「劣った構想の作品、粗末な作品<sup>21</sup>」であるという発言も、やはり同様に 1929 年時点の Faulkner の意見ではない。これら ML 序文や後年の Faulkner の発言から指摘することができるのは、SO 執筆時の Faulkner は、SR 執筆時の Faulkner とは異なる発想・関心に基づいて SO のテキストを構成していたという点に留まるはずである。

こうした研究に対し、たとえば小山や諏訪部の研究は、SO と SR 二種類のテキストから *Sanctuary* 改稿の前後における Faulkner の文学的発想・関心の変化を捉えようとし、単に SO を否定するのではない形で SO と SR の主題を比較検討している。小山の研究によれば、SO と SR の主題には「個から全体、社会性への変化」がある (61)。SO では基本的に Horace

個人の内面や過去へと向かいがちであった語りの視点が、改稿によって SR では現在の描写に終始する全知の視点に変更されたことによって、SR は「人物の陰影がフラットになって、作品の深み、壮大さを欠く犠牲」を払いながらも、社会性を強く打ち出して Yoknapatawpha の時空を明確にした長篇になったのだという (63-64)。また諏訪部の研究は、SO について母性を巡る物語であると規定し、SR は父性を巡る物語であるとする (『詩学』111-13)。Horace を中心的に描く SO は Horace が不在の母親の代理を探し求める物語であるのに対し、Horace を後退させて Temple の物語と併置した SR では、母性の庇護を求める Horace が相対化されるために、父性の欠如こそが物語の焦点になるのだという。諏訪部はこうした改稿によって SR は南部という具体的な社会のイデオロギーを相対化して表現することを可能にし、強度を持った小説たりえているのだと述べる (『詩学』182)。SO と SR を比較する際、このように両テキストのあいだで Faulkner の発想ないし関心が変わったのだという前提を踏まえたうえで、それぞれのテキストを精査することが重要であるように思われる。

Langford は 1972 年の段階で「*Sanctuary* が改稿を経て尊敬すべき本に変化した不注意な粗悪品 (potboiler) だったのか否か、完全に判断できるようになるためには、ふたつのテキストを詳細に検証する必要がある<sup>22)</sup>」と主張している。Langford の研究は SO の精査の必要性を強調する点で意義深いだが、SO には Horace の妹 Narcissa や義娘 Little Belle に対する「近親相姦の欲望 (incestuous desire)」が表現されているのに比べ、SR はそうした記述が削除されたために Horace の人物描写が深みを失い、SO に劣ったテキストになったと主張しており (11, 20, 23)、SR を評価するために SO に無いものねだりをする批評と同様のレトリックに陥ってし

まっている。Langford の問題点もやはり、無いものねだりによって SR の欠点を創出していることであり、それはつまり、ゲラ稿を読み返した時点の Faulkner が SO を “terrible” であると判断し、敢えて Langford の批判するような形に SR のテキストを改稿した意図について検証していないことである。

また一方で、SO を肯定的に評価することを試みる批評の多くは、ほとんど表面的な描写に徹する SR からは読み取りづらくなった物事の因果関係や Horace の内面を補完するために、SR に比べて情報量が多い SO の記述を SR に適応しようとする方法もとってきた。ふたつのテキストの一方には記述があるが、もう一方には記述がないという出来事の場合、その出来事は語られていないが、しかし語りの外側で起こっていたと考えることが可能だというわけである。1984 年の Matthews の研究が、こうした批評の筆頭に挙げられるだろう。SO と SR を同じ物語の異本として扱い、SO に描かれる Horace の「近親相姦の欲望」が Temple の物語をも統御しているとして、二種類の異本を統合した *Sanctuary* を理解しようとするものである (247)。

Matthews のような手法は極端だが、こうした方針は彼に限ったものではない。SO の手稿とタイプ稿を詳細に研究した菊池は、SO こそが Horace の「邪悪 (evil)」に対する姿勢について、Faulkner の意図の十全に表れたテキストであると主張し (「未改訂」6-7)、SR の Horace の態度についても、SO の記述を適用しようとする (「未改訂」12, 20)。また Madden は改稿によって削減された Little Belle の写真を巡る SO の記述を取り上げ、SR においても重要な箇所では写真的な静止画のイメージが SO から引き継がれていることを指摘し、SO を高く評価しているのだが (98, 106)<sup>23</sup>、彼の研究にも改稿によって削減された Little Belle の写真に関す



る主題について、SO の記述によって SR を補完する意図が見られるのである (96-98)。

SR に情報を提供することによって SO の価値を確保することを目指すこうした研究は、その方法がむしろ SR と SO 双方の理解を阻害する可能性を持つために問題がある。SO と SR は同じ出来事を異なる文体、異なる場面の選択、異なるプロット構成によって語っているようでありながら、実際にはそれぞれのテキストにおいて異なる出来事が発生し、また同じ出来事も異なる時系列で展開している。このため二作を同一世界の出来事を別様に記述したものと考えることは出来ないのであり、片方の内容をもう片方に適応することには、慎重になる必要があるのである。多く指摘されている最も大きな違いは、終盤の Lee Goodwin のリンチが Horace の Kinston 帰宅の後から前の時期に変更されたために、SO ではリンチについて Narcissa からの手紙で知ることになる Horace が、SR においてそのリンチを自ら目撃することになるという変化だろう。しかし両作の作中世界には、他にも噛みあわない点がいくつも見出せる。ふたつのテキストが異なる出来事の起こる別々の世界を語っている以上、両作において同じ出来事が展開する箇所に関しても、その出来事が物語全体に対して有する意味を、改めて捉え直す必要が生じることになるだろう。改稿された箇所が保持された箇所に影響を及ぼし、テキスト全体のコンテキストが変化してしまうことを考慮する必要があるからである。

以上述べたように、従来の SO と SR の比較研究の多くは、ML 序文の影響を受けた形でふたつのテキストを取り扱っているため、最終的には SO と SR いずれかの優位を主張することを目的に置くことが多かった。しかし 1929 年の Faulkner が原稿として完成させた SO と、1931 年の Faulkner によって改稿された SR は、同じ題名を持ち、同じ名前の登場

人物たちを描いた物語でありながら、あくまで異なる発想や関心に則って異なる内容に構成された作品と考えるべきテキストである。そのため本論では SO と SR いずれの優劣についてもその相対的価値を定める前の段階に踏みとどまり、また SR を解釈するために削除された SO の記述を適用するといった方法も取ることはせず、あくまで SO と SR との差異を重視することによって、改稿の効果やその意図を考察してゆく姿勢をとる。

### 3 節：本論における二種類の *Sanctuary* の比較研究の方法

具体的な SO と SR の比較において本論は、改稿における作中世界の出来事の時系列の入れ替えと、テキスト上の語りの順序の入れ替えを重視する。SO と SR の比較研究において、これまで多く検討されてきたのは、これら編集的な入れ替え作業ではなく、テキストの加筆や削除であった。挿話単位のものから比喩表現など単語レベルのものまで様々なものがあるが<sup>24</sup>、加筆された主な箇所には、たとえば Goodwin のリンチや Popeye の来歴といった場面が挙げられ<sup>25</sup>、大幅に削除された箇所としては、主に Horace の内面描写や彼が Kinston の自宅から家出する以前の出来事、それと地続きになった Sartoris 家に関する挿話が挙げられるだろう<sup>26</sup>。比較研究の多くが中心的に言及している Horace の内面描写や彼に関する過去の出来事の削除によって、読者に対して常に内面の葛藤を開示する人物であった SO の Horace の人物像は SR において単純化され、また SO において物語の中心に位置していた Horace は、SR では Temple との対位法によって相対化される状態にまで役割を後退させているとまとめることができる<sup>27</sup>。

しかし前節でも強調したように、SO と SR では出来事の時系列が異な

っており、加筆・削除といった側面からだけでは、作中の出来事の差異を正確に捉えることにはならない。そのため SR の時系列について考察した Cleanth Brooks の研究や *Reading Faulkner: Sanctuary* (以下 *Reading Faulkner* と呼称) では検証されていない SO の時系列について、改めて検証する必要性が生じてくるのである<sup>28</sup>。SO 全体の時系列については SR の時系列と比較する形で本論末尾に表を付し、特に改稿の著しい Horace Benbow の周囲の出来事の異同について、本論の 2 章において中心的に取り上げ、彼が Belle へ離婚を提起する手紙を書く挿話を中心的に扱い、ふたつの作品における Horace の外的・内的経験の差異を検討する。時系列の入れ替えに限らない出来事の相違については、各登場人物のいちいちの言動などを含めれば膨大な数になるが、そうした細かい箇所については本論のなかで随時、論旨に適うものを取り上げてゆく。

出来事自体の順序以上に *Sanctuary* 改稿の大部分を占めているのが、テキスト上で出来事を語る順序の入れ替えである。これまでこうしたテキストの再配置は、そうした作業が行なわれてきたことだけはたびたび指摘されながらも、Horace の回想を用いた場面転換を削除したこと付随する周辺的な作業と解釈され、時系列の把握しづらい SO の複雑なプロットを整理するための改稿として扱われることが多かった<sup>29</sup>。たしかにテキストの順序を入れ換えられた結果、SR のプロットは時系列の把握し難さを抑制した構成になったといえる。しかしだからといって、SR は必ずしも出来事の時系列に沿ったテキストになったわけでもなければ、物語の焦点を直線的に単純化したテキストになったわけでもない。むしろ SR のテキストにおいても、SO と同じかそれ以上に、出来事を提示する順序は、語り手がテキストを構成するための重要な戦略として用いられているのである。

)

Langford が主張するように、*Sanctuary* 改稿におけるテキストの再配置は、決して加筆や削除といった作業に付随するものではなく、改稿の大きな特徴のひとつとなっている (29)。また SO の手稿からタイプ稿にかけて行なわれたテキスト推敲に関する Polk の説明は、そのまま SO から SR への改稿における、テキストの順序の再配置が生み出す効果の説明として用いることができるだろう。

)

Faulkner experimented with the novel's structure, shifting large and small bodies of material into new positions in the text, new relationships with other elements of the text, and so creating new significances, new resonances, for each block of material.  
(“Introduction” vii)

)

テキストの情報がまずは読者によって直線的に把握される以上、情報の配置される順序は情報同士の変化する関係を変化させ、読者がそれらの情報から物語の総体を形成してゆく過程に大きな影響力を与えることになる。SO の構成はそれ自体としてひとつのコンテクストを有しており、また SR の構成もそれ自体として、SO とは別のコンテクストを持つのである。SO において出来事が語られる順序についても、SR と比較する形で本論末尾に表を付し、また特に 1 章において、Temple の Old Frenchman Place での経験や、彼女の Memphis での経験を描く章の再配置について中心的に論じる。また SO と SR で物語の冒頭の場面に採用された部分が異なることについても、本論の 1 章、2 章を踏まえて 3 章と 4 章で、いくつかの観点から論じることになる。

)

以上が本論における *Sanctuary* 比較研究の方法である。これより各章

)

において、語りの順序の入れ替えや作中の出来事の時系列の入れ替えといった編集的ともいえる作業の効果を中心的に考察し、加筆や削除といった改稿に関する従来の研究の成果と突き合わせて解釈することによって、SOとSRの構成の差異を具体的に検討してゆく。この作業によって、*Sanctuary* 改稿時の Faulkner の本作への関心の在り方もまた、自ずと見えてくることになるはずである。

## 第 1 章

### 語りの順序の再配置——相対化される登場人物たち

SO と SR で作品冒頭に選ばれた場面が異なっていることは良く知られている。SR の 1 章は Old Frenchman Place 近くの茂みで泉を挟んだ Horace と Popeye が出会う場面から始まるが、この部分は SO において 2 章の半ばに位置している。一方で SO の 1 章に描かれているのは Horace が監獄の Goodwin を訪問する場面だが、この部分は SR では物語の中盤、16 章に置かれている。このように SO は Tommy 殺害の容疑で Goodwin が逮捕された後から語り起こされるために、2 章から Horace の家出に遡り、5 章で Tommy の遺体が Jefferson に運ばれてくるまでの経緯を遡及的に描いてゆく構成をとることになる。Millgate はこのように幕を開ける SO について、すでに重要な出来事がほとんど済んでしまった場面から始まるために内容が理解し難いと批判しており、改稿におけるテキスト順序の再配置を、こうした箇所の時系列を整理するためのものとして扱っている (116-17)。

しかし SO と SR の冒頭に採用されている場面の違いは、後の研究ですらに重要な意味を見出されてきた。Polk は SO 冒頭の場面の選択について、監獄のイメージは SO の「到達できない欲望」という主題を効果的に象徴しており、Horace と Popeye の対照的イメージを強く印象付ける SR の冒頭と同じように、適切な配置であると述べている<sup>30</sup>。こうした指摘は、テキストの順序の入れ替えが単純に物語の時系列を整理するだけでなく、テキストの前後関係を繋ぎ変え、物語全体のコンテクストに影響を与えるものであることを示している。しかし、これまで *Sanctuary* 改

稿の研究では、冒頭以外の場面について、テキストの再配置の影響は、あまり精査されてこなかった。

本章はまず1節において、これまで時系列の整理として扱われてきたテキストの再配置について、SOとSRの語りの方法の差異から再検討を図る。続いて2節と3節では、Old Frenchman PlaceやMemphisにおけるTempleの経験を描いた章について論じる。これらの部分は加筆や削除が少ないため、従来の比較研究においても、SOからSRへ書き換えられずに保持されたという面を強調されがちであった<sup>31</sup>。たしかにSOとSRを比較したとき、Templeの経験自体には、あまり加筆や削除は見られない<sup>32</sup>。しかしTemple主体の章は、Horace主体の章と交互に配置される順序を大きく組み換えられたことによって、物語全体のコンテクストをまったく別様のものに変えてしまう役割を担うものになっている。まず2節において、この再配置がHoraceの描き方に大きく関わっていることを述べ、3節では再配置の議論を踏まえたうえで、Temple主体の章に例外的に加筆された部分がHoraceだけでなくTempleやRubyの人物像を変貌させていることを論じる。

### 1節：語り手と登場人物の関係の変化

SOの時系列が把握の難しいものになっていると指摘される最大の要因は、本作が物語の外の語り手によって語られる三人称の形を取っているにも拘らず、Horaceの意識を通して認識された世界を描いたものとして、さらにはHoraceの「意識の流れ」を描いたものとして解釈されるように<sup>33</sup>、外部の語り手による語りがHoraceの意識と頻繁に曖昧に結びつき、Horaceが回想していると思しい過去の出来事に沿って、目まぐるしく飛びまわるためである。こうした語りのために、読者は物語の語り手

が舵取りをしているのか、それとも Horace が語り手から舵を奪っているのか、しばしば混乱することを余儀なくされる。

SO の語りのこのような傾向は、Kinston を出た Horace が Jefferson の Sartoris 家に到着してから、長らく閉鎖されていた生家 Benbow 家を開けて掃除をするまでの出来事が語られる箇所において、特に顕著である。この箇所は SO の 3 章と 5 章に当たり、SR では 3 章と 15 章に当たる。SO ではまず 3 章の冒頭で Horace が Benbow 家を掃除する場面が語られ、掃除中の彼の意識を辿るようにして語りが過去へ飛び、Kinston から Jefferson へ到着した日に Horace が Sartoris 家の庭を散歩する Narcissa と Gowan Stevens を眺めていた様子が描かれ、さらにそこから、その前年に Horace が初めて Gowan と会った場面が回想される。Horace が Kinston から Jefferson へ到着した日に場面が戻ると、Gowan が大学のダンス・パーティへ去った後の Narcissa、Miss Jenny、Horace の会話が描かれ、それから記述は Horace が Benbow 家を掃除する場面に戻る。ここからふたたび場面は Horace が Jefferson へ到着した日に飛び、夕食後の Sartoris 家の居間の様子が語られ、Horace が Narcissa と Miss Jenny に対し、Old Frenchman Place 滞在の話を繰り返しはじめる。この後 4 章で Horace の Old Frenchman Place 滞在が語られたのち、5 章の冒頭になってようやく、Horace が Jefferson の Sartoris 家に到着する場面が描かれ、その二日後に彼が Narcissa に対して Benbow 家を開けたいと切り出すことで、叙述はやっと 3 章の冒頭の時点、Horace が Benbow 家を掃除する場面に回帰するのである。

SO では Horace が Benbow 家を掃除するいちいちの挙動が彼の記憶を刺激し、誘発された彼の回想に沿って語りが過去へ遡り、SO のなかで最も複雑な入れ子構造を形成している。これに対し SR において、Horace



の Benbow 家の掃除は 15 章で短く言及されるのみであり、SR では 3 章で語られる Narcissa と Gowan の庭の散歩の場面や、15 章で語られる Horace が Jefferson の Sartoris 家に到着する場面と関連付けられることもない。SO において Horace の回想を経由して語られていた箇所は、SR において、Narcissa と Gowan の庭の散歩から前年の同じ出来事を語り始める部分を除き、出来事を即時的に描写する語りに改められており、また語りが Benbow 家の掃除をする Horace の内面に立ち入ることはまったくなくなり、“He opened the house, drawing the nails from the windows. The furniture had not been moved. In a pair of new overalls, with mops and pails, he scoured the floors.” (SR 114) という記述に縮小されてしまうのである。

SO ではこうした Horace が Benbow 家をひとりで黙々と掃除する場面のような、展開と展開の合間の風のような時間が重視されている。そうした瞬間の登場人物の意識を物語の語り手が辿ってゆく手法は、Horace に対してだけでなく、Temple が Old Frenchman Place に滞在する場面でも用いられている。SO における Temple の Old Frenchman Place での経験は、回想だけで構成された入れ子ではなく、Jefferson のホテルにおける Ruby の Horace への語りという外枠が追加された入れ子構造によって語られているため、やはり把握しづらいものになっている。まず SO の 7 章から 9 章において、Gowan の事故によって Temple が Old Frenchman Place に到着し、盲目の老人と出会い、懲りずに飲酒する Gowan と言い合いをし、台所で Ruby に出会うまでが語られたのち、場面は 10 章の冒頭で、Ruby が Horace に Temple の話をしている場面に戻る。Ruby は Temple と Gowan の到着した日の晩の出来事を語り、彼女が Temple を納屋へ匿おうと寝室から連れ出す場面になると、語りは再び Temple を描写する三人称の記述に戻り、翌朝の Temple が台所と納屋を往復し、Ruby

と Goodwin が口論し、Popeye と Ruby が泉の縁で会話をし、Popeye と Goodwin が茂みのなかで会話する場面を描写する。11 章に入ると、男たちから逃げた Temple が納屋のなかで息をひそめながら昨晚の出来事を回想しはじめる。その回想を語り手が辿ることで、彼女が Old Frenchman Place に到着した夕食の後から、Temple が Ruby に納屋へ連れ出されるまでの一連の騒動が描かれてゆくのである。そして翌朝の納屋の場面に語り手が戻ってくると、Popeye が Tommy を射殺して Temple に迫るまでが描かれ、Temple の Old Frenchman Place における経験の記述は終わる。SR ではこの部分が Ruby の語りの中に内包された挿話ではなくなり、そのため Ruby の語りのなかで語り手が Temple の意識を覗いて彼女の回想を辿る、という複雑な構成も放棄されているのである<sup>34</sup>。

改稿におけるこれらの箇所の再配置は、ただ物語を時系列に沿って展開させるだけでなく、同時に語り手と Horace や Temple のあいだの距離を変化させている。Horace や Temple の回想を介しながら物語を語っていた SO の語り手は、そうした記述を放棄した結果、語りの舵取りを彼らから取り戻すことになる。同時に、物語の語り手に意識の内側を覗かれながら中途半端に語りの舵を預けられていた SO の Horace や Temple は、SR では物語の語り手に外側から描写される対象として強く定位されることになるのである。また Horace と Temple の関係について付言すれば、改稿によって Temple の Old Frenchman Place における経験の記述が Ruby の語りから独立したことは、諏訪部が指摘するように、SR において Horace の物語と Temple の物語を並置し、彼らを相対化する効果に結びついている（『詩学』111）。

語り手と結びついていた Horace を登場人物のひとりへと格下げすること、つまり Horace の対象化／相対化を促す改稿のひとつとして、ここ

では物語の語り手と Horace の距離感を確認するため、地の文における彼の呼称の変化を見ておきたい。SO と SR のいずれも Horace の呼称は、Goodwin の収容された監獄を訪れた Horace が、そこから Sartoris 家に移って Narcissa や Miss Jenny と会話をする場面において、苗字の “Benbow” から名前の “Horace” に変化し、以後 “Horace” に固定される (SO 5; SR 121)。この場面は先述のとおり、SR では 16 章に置かれているのに対し、SO では作品の冒頭、1 章に置かれている。そのため SO では作品の冒頭から語り手と Horace の距離が近づくのに対し、SR では語り手が物語の中盤まで Horace に対して一定の距離を保ち続けることになる。

また Temple に関しては、物語の語り手が Temple の内面に踏み込まずにいることが指摘されてきた<sup>35</sup>。しかし先述したように、SO には語り手が Temple の回想を介して語る場面が確かに存在していた。改稿においてそうした部分は注意深く取り除かれ、SR で Temple の対象化は促進されたのだということが、Temple に関わる数少ない改稿のひとつからも伺える。SO の 19 章の冒頭と対応する SR の 24 章において、Temple は Memphis の娼館の自室から廊下を歩く Miss Reba に聞き耳を立てるのだが、SO には Temple の様子として “Trembling with fury” と書かれているのに対し、SR からは彼女の内面を捉えるこの一節だけが削除されている (SO 221; SR 236)。SR の語り手は Temple の怒りを直接に語ることを止め、彼女が音を立てず、扉に少し頭を傾けている様子をただ観察するのである。

また、時系列の整理のための再配置と考えられている部分として、SO の 16 章、SR の 21 章に位置する Virgil と Fonzo の Memphis 滞在を語る章についても触れておきたい。Miss Reba の娼館を舞台とするこの章はコミカルな一幕であると指摘されるが (Millgate 122; Fiedler 89)、SO で

は同じ娼館の一室で Temple が Popeye に迫られる場面の直後にこの章が配置されており、このすぐ隣の切迫した状況にふたりが無知を貫き通すために、鋭い対比を伴って極めてアイロニカルな効果を生む重要な場面となっている<sup>36</sup>。しかし同時に、SOにおける Virgil と Fonzo の挿話の位置は、Clarence Snopes の行動の軌跡に関して読者の状況把握に混乱を招く可能性があることも否定できない。Clarence は SO の 16 章に登場し、Memphis で Virgil と Fonzo に遭遇する様子が描かれているが、彼はまた続く 17 章の冒頭にも登場し、今度は Jefferson で Horace に出会い、彼に対して自分は Memphis へ行く途中なのだと発言している。Clarence が Memphis で Virgil と Fonzo と会ってから Jefferson で Horace に会い、またすぐに Memphis へ向かったのか、それとも彼は Jefferson で Horace に会ってから Memphis へ向かって Virgil と Fonzo に会ったのか、SO の構成はあまり描写されない Clarence の行動の軌跡をさらに判りづらくしている。これに対し、SR では 20 章の末尾で Horace が Memphis へ向かう途上の Clarence と立ち話をする場面のあとに Virgil と Fonzo の Memphis 滞在を描く 21 章が配置されており、Clarence の行動は一見すると理解しやすいものになっている。菊池もこの箇所の改稿について、SR の「20 章で Snopes が Horace に「(自分は) Memphis に行って来るが何か用事はないか」と訊ね、21 章になって、その Memphis で ... 従弟の Virgil Snopes に会おう話が出てくるという順序になり、物語の流れが時間的に無理のないものになったので、それだけ読み易くなった」と述べている(「手稿本 (VII)」57)。

ところが SR の時系列を確認すると、実は 20 章で Horace と遭遇して Memphis へ向かった Clarence は、この段階では Virgil と Fonzo と出会うことなく、Temple の所在を確認してから一度 Jefferson に戻り、22 章で

Horace と取引をしていることが分かる。Clarence は Horace に情報を売り、続く 23 章で Temple に話を聞きに Memphis を訪れた Horace とふたたび出会い、さらに 26 章の冒頭で Memphis から帰宅した翌朝の Horace ともう一度 Jefferson で出会い、そこで Horace に今度は Jackson へ行くと言ったのち、ようやく 21 章に描かれたように Memphis で Virgil と Fonzo に出会うのである。26 章の末尾において Clarence が Jefferson の床屋で “Memphis jew lawyer” (SO 259; SR 280) のことを語るのは、この後のことになる。Clarence の行動にはほかにも腑に落ちない箇所があるのだが<sup>37</sup>、菊池による SR の Clarence の行動の把握が誤っていることは確実である。Clarence の行動はそれだけ把握しづらいのである。

ただし、Temple の境遇との対照を捨ててまで敢行された Virgil と Fonzo の章の再配置は明らかに、Horace に Memphis へ行くと言った Clarence がその言葉通りに Memphis に現出したという文脈を強調する働きを持っている。Clarence の Jefferson と Memphis 往復の軌跡は神出鬼没と行って良いほど複雑であり、またほとんど明確に描写されないこともあり、もしかしたら改稿時の作者も完全には把握していなかった可能性まで考えられる。ただ Clarence は SO と SR 両作の物語展開において、Memphis と Jefferson の物語を結びつけるために登場し、行動しているといつて過言でない存在である。Faulkner は SO から SR への改稿において、Clarence の複雑な行動を正しく時系列的に整える労を払うよりも<sup>38</sup>、Memphis と Jefferson を結びつけるという Clarence が物語に果たす役割を優先的に印象付けるべく、Virgil と Fonzo の章の再配置を行なったと考えることが妥当であるように思われる。

このように改稿によって Virgil と Fonzo の章が移動したために、Temple の悲惨な境遇と彼らふたりの無知の対照を強調する構成は SR から消え

去ることになった。しかし対照的な場面を並置することで、直接に語ることなく読者のなかに強烈なアイロニーの感覚を喚起するこの手法は、改稿によって並置されることになった Temple を描く章と Horace を描く章の配置順序を入れ替える際、物語全体に適用される形で復活することになるのである。

## 2 節：読者に遅延する Horace Benbow

Temple の Old Frenchman Place 滞在は、SO では 7 章から 12 章の冒頭までにおいて語られており、SR では 4 章から 14 章までとなっている。また彼女の Memphis 滞在は SO において 13 章から 15 章で語られ、SR では 18 章にまとめられている。これら Temple 主体のパートは、SO では Horace が Tommy 殺害の事件を調査してゆく過程と同期するように配置されているのに対し、SR では Horace 主体のパートとの連続性を、むしろ乱すように配置し直されているのである。

大橋が指摘するように、SO では Temple の存在が Horace の調査の鍵となってから Temple が登場する構成が取られている (354)。SO の 6 章の末尾において、Horace が Jefferson のホテルで Ruby から Tommy 殺害の現場に “a young girl” (SO 79) がいたという事実を聞かされた後、SO の 7 章において彼女の Old Frenchman Place 滞在が語られはじめるのである。SO における Temple は、Horace が Tommy 殺害事件を調査する文脈のなかから立ち現われてくる存在として登場するために、SO の読者は Ruby の話を聞く Horace と同期するように、Temple という人物が Tommy 殺害事件とどのように関わるのかという興味を起点にして、Temple が強姦される直前までの物語を読んでゆくことになる。SO の語りは Old Frenchman Place に端を発する事件について、Horace が調査によって得て

ゆく情報をその順に積み重ねて語る推理小説的なプロットによって組み立てられていることが判る。こうした構成によって、読者は Horace と同一化した視点から Temple の物語を追いかけるように誘導されることになる。

Temple が Popeye によって車で Old Frenchman Place から Memphis まで誘拐されるという出来事の開示される流れに関しても、やはり同じことが言える。SO において、Temple の誘拐が最初に言及されるのは 12 章、ホテルで Ruby が Old Frenchman Place の Temple について Horace に語り終えようとする箇所である。この時、Ruby は Horace に対して “The car passed me about halfway back to the house,” と言い、その状況については “She was in it. I dont know what time it was. It was about half way back to the house.” (SO 141) としか説明しない。この時点では Horace も読者も、Old Frenchman Place を発った車に乗っていた人物について、Temple ひとりしか知らされないのである。この後 “Of course she’s all right . . . . She’s down there at school now.” (SO 142) と考える Horace に対し、SO の読者は明確に反論できる理由を持たない。続けて SR では 10 章に移動する Old Frenchman Place から逃げ出した Gowan の行動が語られ、そのなかで彼が Temple のために見知らぬ車上の者に金を払ったことが描かれるため (SO 144)、読者はこの Gowan に雇われた車に乗って Temple は Old Frenchman Place を脱出したのではないか、という期待を持たされることになる。

この後、読者は Oxford で Horace と共に Temple が大学に戻っていないことを知り、続いて Jefferson に帰る列車で Clarence と遭遇する場面に挟まれた Ruby の語りの回想のなかで、Temple が匿名の “he” が運転する車に乗っていたことを知らされる。

)

She was in the car. It passed me about halfway back to the house. I dont know what time it was. He was going fast, rough road and all, and I thought then about how he was going to get around that tree. She looked at me when they passed. Just looked at me. She didn't wave or anything. She just looked at where I was standing when they passed. Her hat was on crooked, like it was last night, and I thought then that when she put it on that morning in the kitchen it was on straight, but I just thought that..... (SO 156)

)

倒木への言及が Popeye を暗示しているものの、しかしここでもまだ、この “he” が Popeye であるとは明言されない。Ruby からこのことを聞いた Horace が先述したように “Of course she's all right . . . . She's down there at school now.” (SO 142) と述べていたこと、また Old Frenchman Place から逃げ出した Gowan が Temple のために車を雇っていたことを勘案する読者は、ここに書かれた “he” が Gowan に雇われた男である可能性を捨てることができないのである。この回想の直後、Horace は Clarence から Temple が自宅にも戻っていないという情報を聞いて、初めて “she's all right” と言える状況ではなくなっていることを悟る。こうした情報の積み重ねによって、SO の読者は Temple の安否について、曖昧な緊張状態を Horace と共有することになる。

)

Temple の乗っていた車が Popeye の運転するものだったと読者が知るのは、次の章、SO の 13 章冒頭である。SO の読者はここから 15 章まで続く Temple の Memphis 滞在を描いたパートを読むことで、Horace よりも先に Temple の居場所を知ることになる。そのため後になって Horace

)



が Clarence との取引で Temple の居場所を掴む場面を、読者は Horace とは異なった状況認識によって読むことになる。

SR では、Horace と読者の状況認識に差異を生み出す構成が、意識的に多用されている。SR において Temple の Old Frenchman Place 滞在は 4 章から 14 章に描かれているが、Horace が Jefferson のホテルで Ruby からこの時のことを聞かされる場面はこれより後、17 章の末尾に位置している。そのため SR の読者はすでに語られた Old Frenchman Place での出来事を念頭に置きながら、Horace に対する Ruby の語りを読むことになる。

また SR において Temple が Popeye に誘拐されたという情報は、改稿の際にほとんど新しく書かれた 14 章において、“Temple and Popeye were in it [Popeye’s car].” (SR 108) と明確に示されている。さらに SR では Temple の Memphis 滞在が描かれるのは 18 章だが、Horace が Ruby から Temple の話を聞き、大学と Clarence の話で Temple の不在を確認する場面は、やはりこの章よりも後の 19 章に移動している。読者は Temple の居場所を知ったうえで、Horace が大学で Temple の不在を知る場面を読むことになるのである。このようにテキストの再配置によって、SR の読者と Horace の状況認識は、SO にあったような同期を切断されてしまっている。SR の Horace の認識は読者に対して決定的に遅延し続けるのであり、SR の読者は Horace が調査によって得る情報を、常に彼よりも先に得ながら彼の行動を観察し、彼の無知を意識し続けることになるのである<sup>39</sup>。

序論 3 節や本章 1 節で述べたように、改稿による Horace の内面の大幅な削除や、Horace の回想を排したテキストの再配置は、Horace を語り手から引き離して対象化すべく機能している。しかし以上のように検討

すると、Temple の章と Horace の章の再配置もまた、読者と Horace の状況認識に差を作ることによって、Horace の対象化を読者に対して強く促す効果を持っていることが判る。SO の推理小説的プロットは、読者にとっての謎が明かされてゆく物語形式の要請上、必然的に Horace を中心人物に据え、彼と読者の認識を近づける形を取っていたが、Horace を対象化し、Temple と相対化させることを選択した SR では、推理小説的プロットは破棄されることとなったのである<sup>40</sup>。

SO と SR における Horace のパートと Temple のパートの配置順序の違いは、Temple の足跡以外の点においても読者と Horace の状況認識に差を作り、両者の距離を広げている。その好例として、まず Gowan から Sartoris 家の Narcissa へ届く手紙を巡る、Horace と読者の認識の差が挙げられるだろう。以下は Gowan の手紙の引用である。

Narcissa my dear

This has no heading. I wish it could have no date. But if my heart were as blank as this page, this would not be necessary at all. I will not see you again. I cannot write it, for I have gone through with an experience which I cannot face. I have but one rift in the darkness, that is that I have injured no one save myself by my folly, and that the extent of that folly you will never learn. I need not say that the hope that you never learn it is the sole reason why I will not see you again. Think as well of me as you can. I wish I had the right to say, if you learn of my folly think not the less of me.

G.

(SO 73-74; SR 135-36, 原文は斜字体)

この手紙で Gowan は「二度も酔い潰れ<sup>41</sup>」、自動車事故を起こし、Old Frenchman Place で騒動を起こし、Temple を置き去りにしたことには一切触れずに、ただ「愚行 (folly)」とだけ書いて Narcissa との絶交を主張しているが、この手紙を書かなければ Gowan が Narcissa へ自身の「愚行」について説明する必要も生じなかつただろうと考えると、この手紙は Narcissa との関係を断ち切るためにこそ書かれたことが伺える。SO の 12 章、SR の 19 章で Gowan が Narcissa から結婚を断られていたことが判明すると (SO 147-48; SR 172-74)、この推測はいよいよ真実味を帯びることになるのだが、この手紙の最大の問題点は、Gowan が「自身の愚行によって自身の他には誰も傷つけなかった」ことを誇らしげに語る部分にある。Gowan が逃亡した後で Old Frenchman Place に取り残された Temple の身に起きたことを勘案すると、読者は強烈なアイロニーを感じるようになる。そして、SO と SR ではまさしく Old Frenchman Place に取り残された Temple の身に起きたことが判明する位置が移動しているために、Gowan の手紙を読んだ SO と SR の読者の反応は大きく変化するのである。

Gowan の手紙が登場する場面は、SO と SR いずれのテキストにおいても、Horace が Jefferson のホテルで Ruby から Old Frenchman Place に Temple が居たということを聞く章に含まれている。SO において、Gowan が Temple を乗せた車を倒木にぶつけ大破させてから Temple を置いて Old Frenchman Place を逃げ出すまでの出来事は 7 章以降に書かれており、この手紙が登場する 6 章の時点では、Horace も読者も、3 章で登場した Gowan が大学のダンス・パーティに赴いてからどのような経緯の結

果こんな手紙を書くことになったのか判らずに、先へ進むことになる。SOの読者は Horace と同様、Gowan の手紙を読んだ段階ではその内容のアイロニーを看取することが出来ず、Gowan の Old Frenchman Place 滞在が語られた後、SO の 12 章において Horace が Gowan を “Damn him, damn him” と罵り (SO 144-45)、Miss Jenny に Gowan のことを話す場面において、登場人物たちと同時に Gowan の手紙の滑稽な痛々しさを知ることになるのである (SO 147-48)。SO の構成はここでもやはり、読者と Horace の同期を求めている。一方 SR では、この手紙の登場する 17 章より前、4 章から 10 章までの段階で、すでに Gowan が事故を起こしてから Old Frenchman Place を逃げ出すまでの経緯が語られている。このため SR の Horace は SO と同様に Gowan の手紙がどのような経緯で書かれたのか知らずにいるのに対し、SR の読者は手紙を書くに至った Gowan の行動を知った状態で、その手紙に困惑する Horace の姿を観察することになるのである。SR の読者は Horace や SO の読者とは異なり、Gowan の手紙のアイロニーを、その手紙が登場したその瞬間にはっきりと読み取ることになる。このように、改稿で Temple パートの位置を移動したことによって、Gowan の手紙を巡るコンテクストにおいても、やはり SR では Horace と読者の状況認識に差が生まれているのである。

またこの再配置は、ホテルでの Old Frenchman Place の Temple に関する Ruby の語りに対して Horace が言う “But that girl . . . She was all right.” (SO 141; SR 168,172) という台詞にも、SO と SR とで異なった意味を与えることになる。SO でも SR でも、Horace が自らに言い聞かせるように繰り返すこの言葉は、直接的には Old Frenchman Place の納屋において Temple が Popeye に強姦された可能性を否定したいという意図で発せられている<sup>42</sup>。SO において Horace がこの台詞を言う 12 章冒頭の直前、11

章の末尾には、Old Frenchman Place の納屋において Popeye が Temple に迫る場面が配置されている。このため、11 章末尾の場面と 12 章冒頭の Horace の言葉とで語りの文脈は一貫しており、また読者と Horace の関心も同期するようにテキストが配置されていることが判る。しかし SR において、Horace がこの台詞を言う場面は 19 章の冒頭に移動しており、直前の 18 章には Temple が Popeye によって Memphis へ誘拐されるパートが置かれている。読者は 19 章で Horace の言葉を読む前に、この 18 章の前半において、Popeye の暴行を受けた Temple が出血によるコートの汚れを Popeye に訴える場面を読んでいる。ここでも読者と Horace の状況認識には差が生じているため、19 章冒頭の Horace の “But that girl . . . She was all right.” という言葉は、SR の読者にとって極めて虚ろに響くのである。また SR で Horace がこの台詞を言う 19 章冒頭の直前、18 章の末尾には、娼館の一室で Popeye が Temple へ迫る場面が置かれている。SO ではこの場面が直後に描かれる Virgil と Fonzo の Memphis 滞在と対比されていたが、SR においてこの配置は、いまだ Old Frenchman Place の納屋での出来事を案じている Horace の遅延をさらに強調し、アイロニーを増幅させる構成になっているのである。

### 3 節：信用できない語り手たち

このように Horace のパートと Temple のパートの配置順序の入れ替えは、SR における Horace の対象化／相対化と深く関わっているが、このテキストの再配置に伴うテキストの加筆によって、Ruby が Horace に Old Frenchman Place での出来事を語る場面にも重要な変化が生じている。この改稿によって Horace と Temple だけでなく、Horace に Temple のことを語っていた Ruby もまた、Temple と相対化されることになるのである。

先述したように SO と SR では、Ruby が Horace に Old Frenchman Place での出来事を語る場面と、Temple を主体にして Old Frenchman Place での出来事を描く場面の配置順序が入れ替えられている。SO では 6 章で Ruby が Old Frenchman Place に Temple の居たことを Horace へ告げてから、7 章から 12 章冒頭まで続く Temple のパートが始まるのだが、こうした場面の切り替えは、あたかも Horace への Ruby の語り が Temple のパートにフェードインするような効果を与えている。この Temple のパートの途中、10 章の冒頭にも Ruby が Horace に語る姿を描く場面が挿入されており、この効果は強調されている。Ruby が母屋の寝台に横たわる Temple を訪れる男たちを観察し、それから Temple を密かに納屋へ連れ出す様子を Horace に語るこの 10 章冒頭では、6 章と 7 章の切り替えのように章をまたぐことすらなく、Horace のパートと Temple のパートとが、Ruby のまるで地の文のような語りを介して溶け合うかのように入れ替わっている。

“When she got up she couldn’t stand up, for shaking and trembling. I had to hold her up, telling her to be quiet. She got quiet. She wanted to stop and get her clothes, but I wouldn’t let her. ‘Do you want your clothes’ I says ‘or do you want to get out of here?’

“‘Yes’ she says ‘Anything, if you’ll just get me out of here.’”

On their shoeless feet they moved like ghosts. They crossed the porch and went on toward the barn. When they were about fifty yards from the house the woman stopped and turned and jerked Temple up to her, and gripping her by the shoulders, their faces close together, she cursed Temple in a whisper, a sound no louder than a sigh and

filled with fury. Then she flung her away and they went on. (SO 113-14)

ここで用いられている、登場人物の語りが地の文の語りに移り変わることによる場面の転換は、Masseyによって乱雑・混乱を生むためだけのものだと批難され、Millgateによって恣意的であると批判されている(Massey 202; Millgate 116)<sup>43</sup>。しかし、この場面における Ruby の語りと三人称の語りの交替は、Ruby の話を信頼して聞く Horace に読者を同期させ、彼女の語りを読者もとりあえずは額面通り受け入れざるを得ない状態にするという、重要な意味を持つものである。地の文と曖昧に融合した Ruby の語りを受け入れて読み進めるしかない SO の読者は、18 章において娼館の Temple が Horace に対して同じ場面を語るのを読み、それが Ruby の語りと矛盾することに驚くのである。

SO の 10 章における Ruby の語りにおいて、寝室に横たわる Temple の元に Popeye と Tommy が入って出てゆくまでは「玉蜀黍の殻から聞こえる微かな音<sup>44</sup>」が聞こえていたことが描かれており、それほど場が静まりかえっていたことが語りによって強調されている。続く 11 章において Popeye を付け回す Tommy の行動が三人称で描写される場面においても、やはり「Ruby には Temple のそばで Gowan が呼吸をしているのを聞くことができた<sup>45</sup>」とあり、この場面の静寂が強調されている。しかし SO の 18 章における Temple の語りによれば、彼女は自分に近寄ってきた Popeye に向かって、「触りなさい、臆病者<sup>46</sup>」と言い続けていたというのである。同じ場面を捉える Ruby の語りが三人称の語りと溶け合っているために、SO の読者はここで Ruby の語りに立脚して考えるよう誘導されており、Temple の語りに嘘が含まれていると判断するよう強いら

れることになる。このように、SOにおける Old Frenchman Place の出来事を巡る語りの構成は、Ruby の語りに信憑性を与え、読者が Ruby や Temple に抱く印象を操作するよう機能しているのである。

一方 SR では、Horace がホテルで Ruby の語りを聞くよりも先に、三人称の語りで Temple パートが配置される構成になっている。SR は一度描写したことを登場人物が語り直すという流れを徹底することによって、登場人物たちの語りの恣意性を際立たせているのである<sup>47</sup>。SR において、Ruby が寝室に横たわる Temple の元にやって来る男たちを観察する場面は、まず SO の 11 章から再配置された 8 章において Tommy の行動を追う三人称で描写された後、改稿時に前半を加筆された 9 章で再び Ruby の行動を捉える三人称で描写される。この時点ですでに二度語られているこの場面が、SR の 19 章と 23 章において、今度は Ruby と Temple によって語り直されるのである。ここで重要なのは、SR の 9 章に Temple の横たわる寝室に佇む Ruby の行動を捉えた三人称の描写が加筆されているにも拘らず、SO の 10 章にあった Ruby の語りは、形を変えずに SR の 19 章に保存されていることである。菊池は SR の 9 章の加筆を Old Frenchman Place の事件のクライマックスに向けてサスペンスを高めるための改稿と考えているが（「手稿本 (V)」5）、しかしそれだけのためならば、同じ場面を Ruby が Horace に語る箇所を保存しておく必要はない。ここでは明らかに、出来事とその語り直しによる登場人物の相対化が意識されている。SO において 18 章の Temple の語りが 10 章の Ruby の語りや 11 章の三人称描写と合致しなかったように、SR では加筆された三人称の 9 章と、19 章の Ruby の語りが合致しなくなるのである。SO の 10 章に対応する SR の 19 章において、Ruby は寝台に横たわる Temple に対して “What fault is it of mine if you’re not married? I dont want you here a



bit more than you want to be here.”、また “I’ve lived my life without any help from people of your sort; what right have you got to look to me for help?” と話したことを Horace に語っている (SO 112; SR 171)。しかし加筆された SR の 9 章を見ると “Then she could hear nothing at all save Gowan as he choked and snored and moaned through his battered nose and face.” とあるように、やはりこの場面の Ruby は無言でいることを印象づける語りになっていることが確認できる (SR 84)。このために、SR では Ruby の語りの信憑性も、23 章における SO と同様の内容である Temple の語りと同じ程度に下げられることになるのである。

SR の読者は、テキストの再配置によって Horace との状況認識の同期を解かれ、さらに 9 章の加筆によって Ruby の言動もまた、Temple の言動と同じように相対化して読むようテキストに促される。登場人物たちの語りには、状況に対する彼らの感情が影響しており、その感情は SR において、語られる出来事の印象を変えるだけに留まらず、互いに矛盾を呼び起こしはじめるのである。このように SR の Old Frenchman Place は、登場人物たちの状況認識がせめぎあい、互いに互いを相対化しあう場となっている。SO から SR への改稿において用いられたテキストの順序の入れ替えは、ただ時系列や文脈の連続性を整理するだけではなく、語り手や読者から登場人物を切り離して対象化し、また登場人物たちを相対化することによって、物語に新たな対照を与えているのである。

## 第 2 章

### 作中の出来事の再配置——Horace の物語の変貌

前章では、語りの順序の入れ替えが SO と SR にもたらした差異を基盤に据えて、改稿の諸相を検討した。本章では作中に描かれる出来事の書き換えが、SO と SR の物語にもたらした差異を検討する。SO に描き込まれていた Horace の内面や、過去の描写が改稿の際に大幅に削除されたために、SR から読み取れる彼の内的経験は単純化されたと説明されることが多い点は、すでに述べた<sup>48</sup>。SO を擁護する研究は、そのために情報量で勝る SO の記述を SR に適用してきたのである<sup>49</sup>。しかし実際には、SO と SR において Horace は異なる外的経験をしており、そのため両作において異なる内的経験を辿ることになる。本論ではこうした Horace の経験の差異を辿ることによって、SO と SR において彼の演じる、ふたつの異なる物語を定位することを目的とする。

序論の 2 節でも挙げたように、SO と SR では、終盤の Lee Goodwin のリンチに関して大きな改稿が施されている。SO の Horace はこのリンチを Narcissa からの手紙で知るのに対し、SR の Horace はそのリンチを自ら目撃するのである。この変化は、作中の時系列に即して述べるならば、Goodwin のリンチという出来事が、Horace の Kinston 帰宅の後から前の時期に変更されたために起きたものとして捉えられる。またこれに加え、SO から SR への改稿では、他にもいくつかの出来事を巡る状況が書き換えられている。本章では特に、物語の発端となる Horace の Kinston からの家出という行為が、SO から SR において数度目の行為から初めての行為に変更されている点、また Horace が Belle へ手紙を書く時期が、Horace

の Memphis 行きの前から後に変更されている点について、Horace が Belle との離婚を決意するまでの流れに関する記述の変化との関連から検討し、SO と SR における Horace の物語の相違を跡付ける。

### 1 節：離婚の決意とヨーロッパへの脱出願望

SO から SR への改稿において、Horace が Belle との離婚を決意し、そのことを彼女に伝える手紙を書くという挿話に手が加えられていることを指摘する研究はほとんど見当たらない。その原因には、SO と SR いずれのテキストにおいても、Belle に離婚を提起するこの手紙の存在感が極端に希薄であることが挙げられるだろう。どちらのテキストにもこの手紙の本文は登場せず、またこの手紙に対する Belle の反応が描かれることもなく、Horace 自身もこの手紙を投函した後はそのことに言及しようとしな。Goodwin の裁判で検察側に立つ Eustace Graham から、弁護側が勝つ見込みはないということを聞き出した Narcissa は、いずれのテキストにおいても Belle に Horace は 24 日には帰るという主旨の手紙を出している (SO 258; SR 279)。彼女の手紙の本文もテキストに登場することはないが、Belle の元へ帰ることを拒否する Horace の手紙は、彼が帰宅することを告げるこの Narcissa の手紙によって打ち消され、表舞台から姿を消してしまうのである。

菊池は SO の手稿とタイプ稿を通覧して比較検証する研究のなかで、Horace を中心的に描く SO においてすら、彼が Belle との離婚を決意して手紙を書くという挿話が唐突なものであることを指摘している。菊池はこの唐突さを解消しようと試み、Ruby を町から排除しようと働きかける Narcissa に対する Horace の幻滅が、Belle との離婚の決意を促したのだと解釈している (「手稿本 (VIII)」1-2)。しかし菊池の SO の手紙に関

する検証は 17 章の内容に限られており、6 章で Horace が最初に Belle に手紙を書こうと考える箇所と言及しておらず、不十分なものに留まっている（「手稿本 (IV)」66）。

しかし、たしかに物語の傍流に留まるとはいえ、菊池が一部を取り上げたように、SO には Jefferson に逗留する Horace が Belle と離婚することを決意し、それを手紙で伝えようと考え、実際に手紙を書き出すまでの過程が段階的に描き込まれていた。改稿の際にこうした箇所はすべて削除されてしまったために、SR では Belle との離婚という話題自体が、Horace が実際に手紙を書き出すまでテキストに表出することがなくなっている。しかしこの改稿は、決して不要になった挿話をテキストから切り取って後退させるといった類の消極的なものではない。ふたつのテキストにおける Horace の内的経験の差異を明確にし、物語の後半においてその差異を外的経験の差異にまで展開してゆく際の、重要な前提として機能しているのである。

SO において、Horace は Belle に手紙を書くことに言及しはじめると同時に、ヨーロッパに行きたいという願望を表明し始める。この挿話は、投獄された Goodwin や彼と正式な婚姻関係にない元娼婦 Ruby を冷遇する Jefferson の住人たちを目の当たりにした Horace が、Miss Jenny に対して Jefferson の偏狭さについて不満を漏らす場面の後に位置しているため (SO 71)、Horace が Kinston や Jefferson からの脱出願望を募らせた結果、吐露された内面であることが伺える。

脱出先としてヨーロッパという土地が選ばれていることは、Polk が列挙するように SO にも SR にもフランスに関する言及が頻発することと関係するように思われる（“Faulkner” 29-30）。Polk は同時に Faulkner が幼少時からフランス文学に親しんでおり、1925 年に渡仏する以前からフ

ランスに興味を抱いていたことを指摘しており (“Faulkner” 30)、また Morell は本作の結末に描かれるリュクサンブール公園がフランス革命時に監獄であったこと、またその後フランスの元老院として「立法の主要部」であったことについて、渡仏した Faulkner が認識していた可能性を指摘する (353)。弁護士である Horace がヨーロッパを Jefferson と対照的な、理想の土地の象徴として語る背景には、こうした事情があると考えられる。

菊池の言及しない SO の 6 章において、Horace はまず Miss Jenny に対して “When this is over, I think I’ll go to Europe. I need a change. Either I or Mississippi does, one.” とヨーロッパへの希求を述べた後、寝室で “By God I will go” と独白し、付け加えて “I’ll write Belle in the morning.” と言って、Belle に手紙を書くことを考えはじめる (SO 77)。この 6 章の段階ではまだ離婚ということが明示されないが、Miss Jenny に対して「これが終わったらヨーロッパへ行く」と発言していることを勘案すれば、手紙を書く Horace の意図は決して Kinston へ戻るというものではない。彼は Belle のもとへ戻らないという決意を伝えるために手紙を書いたのだと考えるのが適当である<sup>50</sup>。

Belle に手紙を書く目的がテキストに明示されるのは、SO の 17 章である。寝室にやって来た Narcissa から Ruby を Memphis へ追いやって Kinston へ帰るよう諭された後、彼は “I’m going to Europe . . . . Soon as this business is finished. This damned country. I’ll write Belle for a divorce and---” (SO 199) と独白し、手紙の目的が Belle に離婚を提起することであると明言する。この直後、彼は横になっていた寝台から飛び起きて一度は机に向かおうとするのだが、直前の Narcissa との口論のために今は冷静な手紙など書けないと考え、明日に延期してしまう。

注目すべきは、先に見た 6 章と同様、SO では 17 章においても「Belle に手紙を書く」ことが「ヨーロッパへ行く」と結びつけられている点である。改稿の際にこれら「Belle に手紙を書く」までの経緯は完全に削除されるのだが、SO で「Belle に手紙を書く」と結びつけられていたヨーロッパへの希求だけは削除されず、SR にも保持されているのである。

SO の 6 章に対応する SR の 17 章において、Horace は SO での展開とは異なり、Miss Jenny に Jefferson に幻滅したことを述べた後、「ヨーロッパへ行く」ことについては言及せず、代わりに続く自室の場面で“*When this is over, I think I'll go to Europe,*”と独白し、続けて“*I need a change. Either I, or Mississippi, one.*”と言う (SR 140)。わざわざ SO とは異なる展開に書き直されていることから、SR に描き込まれたこのヨーロッパへの希求は、改稿の際に Faulkner の不注意で偶然に削除を免れた Horace の内面吐露といった性質のものでないことが判る。Faulkner は改稿の際、Horace が Belle との離婚を決意する文脈は注意深く取り除く一方で、彼がヨーロッパを希求する文脈については生かそうと考え、意図的に保存したのである。Horace が独白する形に書き直されたことによって、SR においてこの台詞は SO 以上に彼の脱出願望を強調している。こうした Horace の内的経験の差異は、彼が実際に Belle に手紙を書く時期、また Goodwin の裁判の後の彼の行動という Horace の外的経験を、ふたつのテキストで変化させてゆくことになるのである。

## 2 節: Horace の嘔吐と Belle への手紙

SO の手紙の挿話の唐突さに言及する菊池も、ふたつのテキストで Horace が Belle に手紙を書く時期が異なることには触れていない（「手

稿本 (VIII) 6, 「手稿本 (IX) 77)。SO の Horace が Belle に手紙を書くのは 17 章の末尾、彼が Clarence Snopes と取引をして、Temple の居場所を聞いた後のことである (SO 205)<sup>51</sup>。これは 18 章で Horace が Temple を訪ねて Memphis の娼館を訪れる直前に位置する。一方 SR では、22 章で Clarence から Temple の居場所を聞いた後、Horace は手紙を書くことなく 23 章で彼女と会うために Memphis へ発ってしまう。SR の 22 章からは、SO で Horace が手紙を書いていた段落が完全に削除されているのである (SR 216)。SR の Horace が Belle に手紙を書くのは 26 章の冒頭、彼が Memphis から Jefferson に戻って嘔吐した翌朝のことであり、Horace は書いた直後にこの手紙を投函している (SR 274)。SO においても手紙の投函は Horace が Memphis から Jefferson に戻って嘔吐した翌朝、22 章の冒頭で行われる (SO 254)。整理すれば、いずれのテキストでも手紙の投函は Horace が Memphis から帰宅した翌朝に行なわれるが、SO と SR では手紙を書く時期だけが、Temple の語りを聞くために Memphis へ赴く前から、Jefferson の Benbow 家に戻って嘔吐した後に書き換えられたのである。

改稿における Horace の外的経験の差異は、前節で詳述した彼の内的経験の差異と堅く結びついている。SO の Horace は一度すでに手紙を書く寸前まで辿り着いているため、いつ実際に手紙を書き始めても不自然でない状態にある。このため彼は現状から脱出する希望を込めて Belle へ離婚を提起する手紙を書き、それから Temple の語りを聞いて衝撃を受けるという流れを経験する。一方 SR では、Belle との離婚の決意はテキストに表出していないため、なにか Horace に対して行動を促すと、少なくとも読者に納得させうるだけの転機が必要となる。こうした要請から手紙を書く場面が Memphis 行きの前から後に書き換えられ、SR の Horace

は Temple の語りに衝撃を受けることで、Belle と離婚を決意するという経験の流れが生じたのではないかという推測が成り立つ。このように相違が生じている以上、Temple の語りの内容から Horace が受けた嘔吐するほどの衝撃の意味合いもまた、SO と SR では異なってくることは必然である。

代名詞 “she” で示される女性が蹂躪される幻覚的な描写を含む Horace の嘔吐は、SO から SR への改稿において変更されていない。

But he had not time to find it and he gave over and plunged forward and struck the lavatory and leaned upon his braced arms while the shucks set up a terrific uproar beneath her thighs. Lying with her head lifted slightly, her chin depressed like a figure lifted down from a crucifix, she watched something black and furious go roaring out of her pale body. (SO 220; SR 234)

この場面はいずれのテキストにおいても物語の極点のひとつとして重視され、様々に捉えられてきた。しかし、この場面とふたつのテキストにおける Horace の外的経験の相違との影響関係について触れる考察は見当たらない。この場面に対する複数の解釈は主に、ここに描かれている匿名の女性が蹂躪される幻覚的光景に対して、嘔吐する Horace がどのような立場にあるのかを巡って展開されている。Horace 自身がこの女性を蹂躪しており、彼の嘔吐は自身の罪を認めたためだという主張 (Langford 20)、Horace がこの女性に重なって蹂躪されており、嘔吐はその苦痛のためだという主張 (Madden 107)、また Horace は客観的な位置から蹂躪者を憎悪と共に見ており、彼の嘔吐はその憎悪からくるもので



あるという主張（菊池、「未改訂」10）、解釈は他にもあるが、いずれの理解もここで幻視される女性について、Temple と Little Belle、またさらに多くの女性たちが入り混じったイメージであると前提する点では共通している。Old Frenchman Place で Popeye に強姦されて Memphis の娼館に幽閉された Temple の語りを聞き、Horace は Jefferson に戻ると Little Belle の写真を見つめ、そのうちに吐き気を覚えて嘔吐する。両作品ともに 2 章で描かれる、Little Belle が行きずりの男を家に連れ込むことを Horace が止めさせようとする会話からも明らかなおり（SO 14-15; SR 15-16）、SO と SR いずれのテキストにおいても、Horace は彼女の処女性に不可逆的に侵犯されること、というより彼女が処女性というものに価値を感じていないように見えることに危機感を抱いている。嘔吐する Horace は Little Belle もまた Temple と同じように、いずれは蹂躪される運命にあると考えるのである。

このような形をとる Horace の物語と Temple の物語の交錯点は、もともと SO では、Belle に離婚を提起する手紙を書くことによって Kinston や Jefferson からヨーロッパへと脱出する願望を実現させようとしていた Horace が、Temple の語りを聞くことによって、手紙に託した甘い理想を信じるが出来なくなってしまう、失望のために嘔吐するという、彼の諦念を描くためのものだったことが判る。先にも述べたように、この場面と SO と SR で異なる Horace の手紙の執筆時期の関係について、先行研究は触れていない。しかし、ふたつのテキストにおける嘔吐後の展開の違いから、このことを確認することができる。SO において、こうした Horace の動揺が描かれるのは 18 章、Memphis から Jefferson へ戻った彼が Little Belle の写真を見つめる前に、自身の書いた Belle 宛ての手紙が暖炉に立てかけられているのを見つける場面である。この手紙の描

写は、Belle との離婚に託していたヨーロッパへの脱出の決意が、Temple の語りによって崩れ去ったことを強く示している。

He found the light and turned it on. Belle's letter was propped on the mantel. He took it up and looked at the superscription, at the small disfigurations which held a name, a juxtaposition of letters which did not move him at all, scrawled there by a hand that had no actual relation to his life . . . . (SO 219-20)

Temple の語りを聞いた後の Horace にとって、Memphis に行く前に自身の手で書いた手紙は「彼の人生とは実際的な関わりを持たない手によって書かれた」「彼にまったく感情を喚起させない文字の並び」に成り果てている。ヨーロッパへと脱出できるという希望はいまの彼にとって、まったく現実感のない夢になってしまったのである。SO ではここに示される Horace の失望が、続けて描かれる Little Belle の写真の翳り、そして Horace の嘔吐に繋がる流れを形成するのだが、SR のテキストでは Horace がこの時点でまだ手紙を書いていないため、当然この箇所は削除されている (SR 234)。

SO の 22 章の冒頭において、失意の Horace はそれでも Belle の手紙を投函している (SO 254)。前節の冒頭に記したように、この手紙に対する Belle の反応はテキストにまったく記されない。SO においてこの Belle の無反応は、Horace が彼女と離婚する希望を失った以上、この手紙も効果を発揮することなく舞台から退場しなければならないことを示すようでもある。手紙の投函後、Horace はこれから挑む Goodwin の裁判に対して、ほとんど投げやりになったような独白をしている。“I'll go to

Europe . . . . I'm sick. I'm sick to death. . . . What did it matter who killed the man? what became of Goodwin, of her, of a fool little girl, of himself?" (SO 254) これまで離婚について考えると同時に繰り返していた「ヨーロッパへ行く」という言葉には、“When this is over, I think I'll go to Europe.” (SO 77) また “I'm going to Europe . . . . Soon as this business is finished.” (SO 199) というように、必ず「この事件を終わらせる」という意志が併記されていたが、そうした意力は、この時点の Horace からは消え失せてしまっていることが判る。SO の Horace は裁判が始まる前のこの時点ですでに、離婚の成立や事件の解決によって Kinston や Jefferson から逃れようとする意志を放棄しているのである。

一方、Memphis から戻った後で Belle に手紙を書くという順序に改稿された SR において、Temple の語りは SO とは反対に、Horace にヨーロッパへの脱出を堅く決意させ、離婚を提起する手紙を書くよう促す役割を担っている。手紙を書く時期の違いを受けた Horace の態度の相違がよく表れているのは、SO の 22 章に対応する SR の 26 章において、書き上げたばかりの手紙を投函したあとの彼の独白である。“I'll finish this business and then I'll go to Europe. I am sick. I am too old for this. I was born too old for it, and so I am sick to death for quiet.” (SR 274) なかば投げやりな点は SO の手紙の投函後の独白にも似ているが、SR の Horace はこの時点でも「この仕事を終わらせる」という意志に支え続けられており、SO の Horace の満身創痕といった精神状態とはまったく異なった態度でいることが伺える。SR の Horace は Temple の語りから受けた衝撃によってヨーロッパに脱出するという願望を急速に切実なものにして、文字通りの嘔吐と共に吐き出すように、Belle に離婚の意志を伝えるという具体的な行動を起こすのである。SO とは異なり、Belle に手紙を出すこ

とで自身の脱出願望を明確に行動へと移した SR の Horace は、Goodwin の裁判においてその希望を打ち砕かれることになるのである。

このように、嘔吐の前後の Horace の行動からは、Temple の語りの内容が彼の Belle との離婚の決意に対し、なんらかの影響を及ぼしていることが伺える。SO においても SR においても、Horace のなかで Temple の語りが Belle との離婚とどのように結びついているのか、直接に語られることはないが、しかし Horace の家出やヨーロッパへの脱出願望が、粘着質なもので汚れることから逃避しようとする行動として統一的なイメージを用いて描かれていることを勘案すれば、ふたつは Horace のなかで、根本的には同じ観念に根付いていることが判る。いずれのテキストにおいても Horace の家出という行為は、Kinston という「肥沃 (rich)」で「汚れ (foul)」、「金を生みだす (engender money)」と表現されるように物欲的な性質をもった、「原住民たちが洪水時に避難するため作った盛土の他に丘などない<sup>52)</sup>」低地から (SO 15-16; SR 16)、そうした低地の水害の及ばない「丘 (hill)」へ避難しようとする行為として語られている (SO 20; SR 16-17)<sup>53)</sup>。Kinston の泥にまみれた性質は、ハンカチにべっとりと付着した口紅や臭い汁を垂らす海老といった挿話によって Belle の好色な性質と結びついており (SO 18, 56; SR 16, 18-19)、Horace の家出の動機を湿った粘着性のイメージに集約させて示しているのである<sup>54)</sup>。Jefferson の住人たちが Goodwin や Ruby に排他的な姿勢を取り、Horace がヨーロッパへの脱出願望を語りはじめると、これに対応する SR の 17 章においても、監獄付近の街路樹 “heaven-tree” (和名にわうるし) から散った花が「粘着性 (viscid)」の「過剰 (surfeitive)」な「瀕死 (moribund)」の甘さといった香りを放ちながら路上を汚す場面によって、この粘着性のイメージは繰り返されている (SO 71; SR 131)。Horace が

Jefferson への幻滅を表明すると同時に、“heaven” を名に冠した木から彼の嫌悪する粘着質な汚れが生み出されるアイロニーは強烈である。

どんな丘もいつかは浸食によって崩れ去るものであることを考えれば、こうした Horace の「丘」への脱出願望とその挫折は、Faulkner の中心的主題である時間への抵抗の一派生であり、徒勞に終わることを運命づけられた行動様式であるといえるだろう。Horace は Kinston からの家出にも Little Belle の写真を持ち歩き、事あるごとに見つめているが、Madden の指摘するとおり、彼は撮影された瞬間に固定された彼女の姿に時の浸食への不安、つまり彼女が不可逆的に処女性を失うことへの不安の解消を求めながら (106)、しかし写真の彼女の姿にすら時の浸食による翳りを見出して動揺し (SO 146, 220; SR 174-75, 234)、最終的には嘔吐するのである。Horace の家出してきた Kinston と Belle が粘着性のイメージで表されている以上、そこからの家出という行為は Horace のなかで、泥にまみれた低地と「丘」の対立から時の浸食という観念を経由して、Little Belle や Temple が不可逆的に処女性を失うことへの強迫観念的な不安に結びついているはずである。SO の Horace はすでに手紙を書くという具体的な行動に出た後で、Temple の語りによって時の浸食の影響をまざまざと見せつけられ、離婚という逃避行動にリアリティを感じられなくなったのだと解することができ、一方 SR の Horace は Temple の語りによって時の浸食の影響を見せつけられた結果、切迫感に押されて手紙を書くという具体的な行動に出たのだと考えることができる。

### 3 節：早められた Goodwin のリンチ

SO から SR への改稿において、裁判後の展開が大幅に書き換えられたことは良く知られている。賛否両論を招いた Popeye の来歴が加筆され

ると共に、Horace と Narcissa の交わす手紙の全文引用が削除され、そこに記されていた Horace の Kinston 帰還に関する挿話、また Jefferson での Goodwin のリンチに関する記述が、Horace の行動を捉える描写によって加筆されたのである。本章の冒頭でも述べたように、本論ではこの Goodwin のリンチに関する改稿についても、SO と SR ふたつのテキストにおける Horace の経験の差異のひとつと見做し、それが Goodwin の裁判に失望した Horace が Kinston へ去った後に起こる出来事から、彼が Kinston に去る前に起こった出来事に書き換えられた点を重視する。SO の Horace は Narcissa の手紙を Kinston で受け取って初めて Goodwin のリンチを知ることになるのに対し、SR の Horace は身をもってこのリンチを経験し、それから Kinston へ去ってゆく。この Horace の外的経験の差は、SO と SR における彼の物語に異なる結末を与えることになるのである。

SO において Goodwin のリンチは、26 章の Narcissa の手紙のなかで幾分か遠まわしに示される。

They took the man away the day after you left. They were getting ready to lynch him, Isom said. So Jefferson is spared that at least. Why they should want to I cant see, since they are going to hang him anyway. So you can save hiring another lawyer. (SO 284)

SO の Horace はこの手紙を読むまで Goodwin がリンチのために連行されたことを知らずにいるため、25 章の Narcissa へ宛てた手紙のなかで、自分の代わりに弁護士を探しているから心配するなど Ruby に伝えてくれ、と書くのである (SO 283)。SO において作中の出来事に対する Horace の

反応が何らかの形で記述されるのは、この 25 章の手紙で最後となっているため、26 章の Narcissa の手紙を Kinston で受け取って読んだ彼が Goodwin のリンチを知って何を思うのか、作中で示されることは一切ない。SO は Horace が自身の行動が引き起こした結果を知る前に、幕を閉じるのである。

このような SO の結末はたびたびアンチ・クライマックスであると指摘されるが (Massey 201; Millgate 116)、むしろ SO の Horace に相応しいものとして構想されていたはずである。Reading Faulkner において指摘されているように、SR の Horace が作中で描かれる時点で初めて家出という人生の決断をしたことになっているのに対し、SO の Horace は Miss Jenny の言葉から判るように、それまでに何度か Kinston から家出を繰り返しており、もともと惰性的な生き方をしていることが示されているからである (Arnold and Trouard 36)。SO において、彼女は家出を繰り返す Horace に対して、それが本気で家を捨てようとする行為になっていないことを揶揄して以下のように言う。“I’ve been trying all afternoon to find out myself if he [Horace] has run away again . . . . You [Horace] haven’t quit Belle in three or four years now, have you?” (SO 37-38) 一方 Horace が初めて家出をする SR では、Miss Jenny の台詞は以下のように変化している。“If you [Narcissa] keep on expecting him [Horace] to run off from Belle, he will do it . . . .” (SR 26)

家出に関わるこうした差異は、SO と SR で特に Old Frenchman Place で酔い語りをする Horace の言動に大きな相違を生み出している。SO の Horace は Old Frenchman Place の荒くれた男たちに釣り合おうとして、“You see, I’ve just left my wife” (SO 50) というように、家出を繰り返している自身の実情とはかけ離れたことを言い、妻に未練を持たない男を

演じようとするのだが、後にこの台詞を何度も繰り返し想起しながら (SO 30, 66)、自身の行ないが見栄を張って背伸びする子供じみた行為だったと反省する (SO 65)。一方 SR の Horace は、妻を捨てたと言って強がるよりも、“I would be all right if I just had a hill to lie on for a while” や “I thought it was just a hill I wanted” (SR 16)、また “I just wanted a hill to lie on”, “I just wanted a hill to lie on for a while” (SR 17) と「丘」への脱出願望を繰り返し口にするのである。

SO の Horace が Memphis 訪問よりも前に Belle との離婚を決意する手紙を書き始める展開には、このように序盤で説明されている、彼の家出を巡る状況が影響していることは間違いない。まだ裁判の終結していない状況から Ruby を置いて逃げ、別の弁護士を送ることで埋め合わせようとする SO の Horace は、諏訪部の指摘するように Old Frenchman Place に Temple を置いて逃げ去り、他人の車を送ることで埋め合わせようとする Gowan に重ねられている (『詩学』119-21)。Gowan がその後 Temple の経験したことを何も知らないまま、Narcissa へ宛てた手紙に「自身の愚行によって自身の他には誰も傷つけなかった<sup>55</sup>」と書いたように、Jefferson から逃げ去った Horace もまた、自身の行動が招いた取り返しのつかない結果を知らないまま、物事がまだ可逆的な状況にあると信じている。もし Narcissa から Goodwin のリンチを伝える手紙が来なかったならば、SO の Horace が再び家出を繰り返し、また Kinston に戻ってくるだろうことは眼に見えている。今度の家出が招いた不可逆的な事態に Horace が気付くのは、Narcissa からの手紙を読んだ後のことなのである。しかし家出という物語の発端から、惰性の円環に囚われる Horace を描いてきた SO において、その瞬間は描かれることなく、永遠に引き延ばされる。Horace の意識を半ば共有していた SO の語り手は、SO の Horace



が決定的な認識の外に出る瞬間を、描かないことに決めたのである。

一方 SR において、初めての家出を敢行している Horace は、SO のように惰性に引きずられて Kinston へ帰るのでなく、ヨーロッパに脱出する決意を決定的に折られて Kinston へ戻ったのだということが、改稿によって描き込まれている。Goodwin に死刑の判決が下された後、SR の 29 章において Horace は Narcissa に連れられて一度 Sartoris 家に寄って夕食を摂ってから外へ出る。Jefferson の駅まで 1 マイルほど歩いたところで一台の車が通りかかり、彼に乗るよう勧めるのだが、Horace は “I’m just walking before supper . . . . I’ll turn back soon.” と断って歩き続ける (SR 307)。SO には存在しなかったこの小さな場面は、しかし物語が Horace のヒッチハイクによる家出から始まったことを勘案すれば (SR 17)、SR において重要な意味を持つことになる。車に乗るよう勧めた相手に対して、Horace は明確に嘘をついている。彼が Sartoris 家で夕食を摂ったことは作中に明記されており、乗車を断る彼の台詞に「夕食前の散歩」という言葉が書き込まれていることは、この嘘を浮き彫りにするのである。SR における裁判後の Horace は、ここで明らかに、ヒッチハイクで見知らぬ者と関わり合いになることを避けようとしている。作品の冒頭でヒッチハイクの末に Old Frenchman Place に辿り着き、Tommy 殺害事件を巡って Goodwin や Ruby を助けようとし、結局失敗して Goodwin を死に至らしめたことの二の舞になるのを恐れるためである。こうした精神状態の彼が、裁判の前には確かに持っていた「ヨーロッパへ行く」という願望をこの後も保持できるはずはない。

Jefferson の駅前に着いた Horace が Goodwin のリンチを自身の眼で目撃するという SR の展開は、彼のこうした恐れに追い討ちをかける役割をもっている。この場面でさらに重要なのは、リンチの参加者が Horace

を Goodwin の弁護をした人物だと気づき、彼の元へ向かってくる描写でこの章が終わる点である (SR 311)。まるで凄惨な場面が暗転によって省略されたかの如く、このあと 30 章で Kinston の駅で列車から降りてくる Horace の姿が描かれるまで、彼の動向はまったく記述されない。Jefferson の駅前で命を脅かされていた Horace がどのように Kinston の駅まで辿り着いたのか、一切の説明が為されないのである。この演出は Horace がリンチを受けて象徴的に殺害され、Kinston に埋葬されたかのような含みをもつ<sup>56</sup>。そのとおり、Horace は今後一切 Yoknapatawpha の物語に姿を現さなくなるのである。Goodwin の焼死によって弁護すべき対象を失った SR の Horace は、当然 SO の Horace のように上訴すべく新たな弁護士を探すことはないし、Ruby を慰めるための言葉をもつこともない。自身の行動が招いた結果を目前で見せつけられた SR の Horace は、彼を登場人物として対象化した語り手によって、決定的に挫折するその瞬間を描かれてしまったからである。SR の Horace が SO の Horace のように家出を繰り返すことはないだろう。彼の物語はここで終わるのである。

### 第 3 章

#### 削除される Horace の観察——露わになる語り手の観察

本章は本論の 1 章を補完する形で、主に SO と SR の冒頭の入替えが両作の登場人物の描写に与えた差異を論じると共に、この文脈から *Sanctuary* 改稿における加筆や削除についても検討する。その際、本論 2 章で扱った箇所も前提として用いるために、本章は 1 章からは離れたこの位置に置かれることになった。

1 章の 1 節で論じたように、SO と SR では、物語の語り手と登場人物、特に Horace のあいだの距離が大きく変化している。SO の語りは頻繁に Horace の意識を介して出来事を語ろうとするために、語りの舵取りが匿名の語り手によって為されているのか、それとも意識の持ち主である Horace によって為されているのか曖昧になる部分が生じている。結果として、SO は Horace の視点や意識から彼の認識や観察を描いたものとして解釈されるまでに至っているのである<sup>57</sup>。

一方で SR の文体は、Horace の内面や過去の削除、また登場人物の回想を介さずに場面転換を行なう改稿によって、語り手と共に語りに影響を及ぼしていた Horace が登場人物として対象化／相対化され、テキストの大部分は物語の語り手の認識に帰されるものとなった<sup>58</sup>。そしてこれと同時に、SO では Horace の価値観や認識の影響を受けて描かれていたさまざまな登場人物が、SR では彼の観察から解放されることとなったのである。Horace を軸に Narcissa と Ruby に付与された相反する性質、また殺人事件の犠牲者でありながら作品の後半ではほとんど顧みられることのない Tommy の描き方において、SO と SR の文体の違いから生じる

こうした差異を確認することができる。

しかし SR において Horace の観察が排除されたということは、たとえば Moore の主張するように、SR の語りがどの登場人物からも完全に中立な立場を打ち立てることで、剥き出しの現実そのものを描こうとしているということを意味するのではない (21)。Brooks の指摘するように、*Sanctuary* の語りには、語り手の解釈が反映されている (119-21)。それはたとえば、地の文において常に固有名詞でなく “the woman” と呼称される Ruby の扱いに強く表れている。本章では改稿によって “the man” から固有名詞で呼ばれるように書き換えられた Popeye に関して、こうした観点から論じることになる。

#### 1 節：迫害者 Narcissa と被害者 Ruby の対立

SO では概して、Ruby は肯定的に描写され、反対に Narcissa は否定的に描写されている。SR においても、異なる階級に属するふたりは依然として相容れない存在として描かれてはいるが、SO で Horace の認識に沿ってふたりの善性や悪性を固定的に強調していた表現は、テキストの入れ替えと共に大半が削除され、また書き換えられているのである。

*Sanctuary* 改稿においては Horace の内面や過去の出来事だけでなく、風景描写の多くが削除されていることが指摘されてきた。そのなかで Old Frenchman Place に歴史性を伴った荒涼を印象付ける SO の 4 章の記述が削除されたことは、たとえば本作を *American Gothic* として読む Sundquist によって重視されている (52)。この Old Frenchman Place を巡る描写には、しかしまた、Ruby と Narcissa の固定的イメージを考えるうえでも興味深い箇所が存在する。

Three men were sitting on the porch. The woman wasn't there. It never occurred to Horace that there would be a woman there; there was that about the bleak ruin which precluded femininity. . . . As though whatever women had ever dwelled there had been no more than a part of the vanished pageantry of a dream . . . . (SO 51 以下、引用部の下線はすべて筆者による)

SR で対応する箇所は 1 章の “Three men were sitting in chairs on one end of the porch.” (SR 8) という箇所になるだろうが、しかし SR では Old Frenchman Place そのものの細かい描写は続いておらず、また下線を引いた箇所にあるように、Old Frenchman Place が「女性性を排除した荒涼たる廃墟」として表現されることもない。SO においては、こうした場所に Ruby という “the woman” が暮らしていることを知って Horace が驚くのであり、同時に読者も Ruby の存在を意外性の伴ったものとして受け止めるよう促されるのである。Sanctuary という作品の表面的な筋書きにおいては、この荒涼とした廃墟のなかで Popeye という悪漢から蹂躪される Templeこそが Gothic 小説における迫害される乙女にあたるのだろうが、この廃墟で生活する Ruby もまた、SO の Old Frenchman Place の描写によって、Gothic 小説的な環境に迫害されながら抵抗する女性としての役割を与えられている。

一方、SO の 5 章で Sartoris 家に到着した Horace が Narcissa に抱く印象を語った以下の場面において、Gothic 小説的な状況に迫害される Ruby に対応するかのよう、迫害者としての Narcissa のイメージが描き込まれていることは注目に値する。

He stayed at his sister's two days. After that first evening she did not mention Belle, Kinston, made no reference to any future, yet as he watched the familiar motions of her hands and body and listened to the familiar sound of her voice as they talked of trivial things, of their childhood, their surroundings, it seemed to him that they had never been so far asunder. He was watching a stranger, a usurper wearing the garments of someone that had died. There was no strife, antagonism, conflict. There was nothing. The gestures she made, the words she spoke, had no significance. They were not spoken to him, had no relation to his past or present. (SO 58)

対応する SR の 15 章では、上の記述は以下のように改稿されている。

He stayed at his sister's two days. She had never been given to talking, living a life of serene vegetation like perpetual corn or wheat in a sheltered garden den instead of a field, and during those two days she came and went about the house with an air of tranquil and faintly ludicrous tragic disapproval. (SR 111)

菊池がまとめるように、改稿の際に Horace が過去の Narcissa と現在の彼女の相違を思ふ箇所が削除されていることが伺えるが（「未改訂」6）、そのなかには下線を引いたように、かつてとは異なりよそよそしい態度を取る Narcissa が「篡奪者 (a usurper)」と表現される部分が含まれている。この表現は、SO において Ruby が被害者としての姿を強調されているのに対し、Narcissa が迫害者として振るまうイメージを固定的に強調

するだろう。細かい表現をあげつらうようだが、SO から SR への改稿においてはこれらの箇所だけではなく、加筆や削除、またテキストの順序を入れ替えることによって、こうした忍耐する Ruby の被害者としての姿を強調し、排斥する Narcissa の迫害者としての姿を強調する記述が削減されているのである。

菊池が述べるように、SO と SR における彼女たちの印象は、本論 1 章の冒頭でも触れた作品冒頭の場面の入れ替えによって、大きく変化している（「手稿本 (I)」170）。SO の 1 章に選ばれた Tommy 殺害の後から始まる場面は、逮捕された Goodwin の監獄、Sartoris 家、Benbow 家を順に巡る Horace が Ruby と Narcissa を交互に訪れ、彼女たちと会話する様子が語られる。そのため SO は作品の冒頭から、Ruby と Narcissa ふたりの対照的な性質や、対立の構図を読者に強く印象付ける効果を持っている。Narcissa は「殺人者の情婦 (a murderer's woman)」を追い出すよう Horace を責めたて、Horace は病身の息子を抱え続ける Ruby を気遣うのである (SO 5-6)。SR においてこの場面は 16 章に移動してしまうため (SR 120-21)、迫害する Narcissa と忍耐する Ruby という構図は、物語の中盤まで表立って示されなくなるのである。

また、Horace の Old Frenchman Place 滞在がテキスト配置の入れ替えを受けて SO の 4 章から SR では 2 章に移動し、さらにこの場面が全面的に書き換えられたことも、Narcissa と Ruby の対照構造を和らげるよう機能する改稿として考えられる。SR では 1 章の末尾で Horace が Popeye と Old Frenchman Place まで歩く場面に引き続き、2 章で Horace の Old Frenchman Place 滞在中の出来事が語られ、続けて Horace が Tommy に密造酒を運ぶトラックまで案内される場面が描かれる。これに対し SO では、2 章で Horace が Popeye と Old Frenchman Place まで歩く場面の後、

すぐに Horace の Old Frenchman Place 滞在中の出来事が語られることはない。Horace が Popeye と Old Frenchman Place まで歩く場面が続いて描写されるのは、Old Frenchman Place を辞した Horace が Tommy にトラックまで案内される場面なのである。SO において Horace の Old Frenchman Place 滞在中の出来事は 4 章に描かれており、これは 3 章で Jefferson に着いた Horace が、Sartoris 家で Narcissa と Miss Jenny に対して Old Frenchman Place での出来事を語り始める場面の直後に位置している。

菊池はこの Horace の Old Frenchman Place 滞在の場面について、SO のタイプ稿が完成するまでに、4 章と 3 章のいずれに配置すべきか何度も順序の入れ替えを検討されている箇所だと述べている（「手稿本 (II)」73-74, 84）。菊池はその理由について「構成の立体感」のためだと解釈しているが、この順序の検討も、やはり Horace の意識を通して Narcissa と Ruby を対照的に描こうとする SO の語りの意図が影響しているように思われる。Old Frenchman Place を描く章が Horace の Ruby に対する印象を描き、Sartoris 家を描く章が Horace の Narcissa に対する印象を描いていることは間違いなく、SO 執筆時の Faulkner がこの 3 章と 4 章の順序を試行錯誤していた理由は、Ruby と Narcissa どちらの描写を先に読者へ提示すべきか検討していたためだと考えられるのである。

SO から SR への改稿の際にもこの順序は再検討され、SR は結果的に、SO の 3 章と 4 章の内容が順序を入れ替えた配置で語られることとなった。SO の 3 章に対応する Sartoris 家の場面は SR において 3 章に、そして SO の 4 章に対応する Horace の Old Frenchman Place 滞在の場面は 2 章に移動したのである。そしてこの再配置において、Narcissa と Ruby の対立構造を和らげる点で重要なのは、SO では 3 章に含まれていた Narcissa が Horace の家出について反応する場面だけが、SR の 3 章から



15章に移されていることである。この場面において Narcissa は Horace に “But to walk out just like a nigger . . . . And to mix yourself up with moonshiners and street-walkers.” (SR 112) と述べて彼を責めており<sup>59</sup>、Ruby や Old Frenchman Place の住人たちに対する彼女の侮蔑的な態度が伺える箇所となっているのだが、この場面が改稿の際に SR の 3 章から隔離されて 15 章に組み込まれたことによって、SR の読者は Narcissa が Ruby に抱いた敵意を 15 章まで知ることが出来なくなる。SR においても 2 章と 3 章から Ruby と Narcissa 個々人は描写されるものの、テキストの順序が入れ替えられていることによって、Narcissa の Ruby に対する敵愾心そのものを読者が知ることになる時点もまた、SR では物語の中盤まで持ち越されているのである。

また Horace の Old Frenchman Place 滞在が描かれる章は、再配置されると共に全面的に書き改められたために、Ruby の人物造形にも大きく影響することとなった。SO では Horace の Old Frenchman Place 滞在中の出来事が、Horace の回想を介する形で語られるため、彼が Ruby に抱いた印象が中心的に提示される。これに対し SR では、Horace の Old Frenchman Place 滞在を、彼の意識を経由せず行動描写に徹して語っているため、Horace が Ruby に抱いた印象そのものが描かれることはほとんどなく、それらは Horace の言動で示されるようになったのである。

SO の 4 章において、Old Frenchman Place で Ruby と出会った Horace は、最初こそ彼女をただの田舎の女だと思いが、かつて娼館の人間に見た「落ちぶれた尊大さ (abject arrogance)」を感じ (SO 48)、Old Frenchman Place に暮らす男たちとの「たくましい対等関係 (muscular co-ordination)」を感じ (SO 48)、彼女を元娼婦であると確信し、また Old Frenchman Place の人間のなかで彼女を唯一、いかなる状況においても人間らしい会話の

できる相手であると考え<sup>60</sup>。このように SO において、Horace は Ruby が娼婦だったということから Narcissa のように否定的な印象を抱くのではなく、むしろ自分と話の通じる相手として肯定的に捉え、彼女に接近してゆく。

一方 SR において、Horace が Ruby に抱く親近感の内実はまったく描かれず、ただ Ruby に接近する Horace の行動が描かれることになる。そもそも SR の読者は Ruby が元娼婦であったということ、Horace の直感を経由してではなく、改稿の際に加筆された Popeye と Ruby の会話のなかで、彼女が事実 Memphis の Manuel 通りで娼婦として働いていた過去を言及されて知るのである (SR 8-11)<sup>61</sup>。この場面には Horace が登場しないため、SR の読者は Horace の抱く親近感を経由することなしに、Ruby が Popeye から男たちに食事を用意する彼女の使用人のような現状を揶揄され、Popeye に “You bastered.” と罵る姿を見ることになる。SR は Horace の Ruby に対する肩入れを読者へ無批判的に受け入れさせることを回避しながら、彼女の陥っている状況を読者に示そうと意図していることが伺える。

この後に展開される Old Frenchman Place の台所での Horace と Ruby の会話が描かれる場面では、改稿を経てもふたりの会話の内容は維持されているのに対し、SO では始終 Horace の視点に寄り添って Ruby を描写していた語りが、SR では Ruby の視点に寄り添った形で始まり、次第に両者から等しく距離を取った語りに移るよう書き換えられており、注目に値する (SO 55-57; SR 17-20)。たとえばふたりの会話が始まる部分は、SO と SR ではそれぞれ Horace と Ruby の視点から、以下のように書かれている。

SO: 4 章

So when they told him to wait and went to see about the truck, when he entered the door he could feel the shock of antagonism, awareness, coming from her in waves. He could see the still blur of her face, motionless, like a swordsman on guard, her back touching the wall lightly for balance, her hands on either side, against the wall. He said:

“Do you like living like this? Why do you do it? You are young yet; you could go back to the cities and better yourself without lifting more than an eyelid.” (SO 56)

SR: 2 章

“Come on,” he said. “Let’s get it loaded.” She heard the three of them go away. She stood there. Then she heard the stranger get unsteadily out of his chair and cross the porch. Then she saw him, in faint silhouette against the sky, the lesser darkness: a thin man in shapeless clothes; a head of thinning and ill-kempt hair; and quite drunk. “They don’t make him eat right,” the woman said.

She was motionless, leaning lightly against the wall, he facing her. “Do you like living like this?” he said. “Why do you do it? You are young yet; you could go back to the cities and better yourself without lifting more than an eyelid.” (SR 17-18)

下線を引いた会話の直接引用部の内容は SO も SR も同じだが、地の文に関しては SO では Horace の動きや意識が Ruby に向かっている様子を捉

えているのに対し、SR では反対に Ruby の側から Horace の接近する様子を捉えており、Horace は名前でなく “the stranger” と Ruby の側の認識に則って描写されるまでに至っている。続く箇所では Horace は Ruby に話しかけながら彼女の頬に触れるのだが、ここでも語りの視点は Ruby に触れる Horace に寄り添ったものから、Horace に触れられる Ruby の側に立ったものに書き換えられている。

SO: 4 章

“You are young yet” and he put his hand on her face. Still she didn't move, and he touching her face, learning the firm flesh. (SO 56)

SR: 2 章

His hand fumbled across her cheek. “You are young yet.” She didn't move, feeling his hand upon her face, touching her flesh as though he were trying to learn the shape and position of her bones and the texture of the flesh. (SR 18)

また SR における Ruby の人物像は Old Frenchman Place の夕食後、Horace の酔った語りを陰で聞きながら彼を罵り続ける場面においても、SO での Horace の視点に限定された固定的な印象から大きく脱している。SO の当該場面には、酔い語りをする Horace に対する Ruby の反応は描写されていない (SO 54-55)。菊池は “Then he [Horace] realised that it was not to be near Goodwin, but it was to listen to Horace talking about love” (SO 55) という描写から SO の Ruby は Horace の語りに真剣に聞き入っていたと解釈しているが<sup>62</sup>、この場面が含まれる SO の 4 章全体が Horace

)

の回想であることを考えれば、この時 Horace の視界に入っていない Ruby の態度まで早急に決定すべきではないだろう。本論の 2 章 3 節で述べたように、SO の Horace は 5 章の段階で、Old Frenchman Place で「妻を捨ててきた」ことについて饒舌に語った自身を恥じている。SO の 4 章で聴き手の注目を浴びていると考える Horace の自意識は、5 章の Horace 自身によって反省されているのである。したがって、SO の当該箇所における Ruby の態度は、あくまで決定できないものと考えべきである。

)

これに代わって SR では、Old Frenchman Place で酔い語りをする Horace を陰から観察している Ruby に寄り添った視点から描写が行なわれており、さらに彼女が Horace の語りに対して悪態をつく様子が加筆されている。

“That fool,” the woman said. “What does he want……” She listened to the stranger’s voice; a quick, faintly outlandish voice, the voice of a man given to much talk and not much else. “Not to drinking, anyway,” the woman said, quiet inside the door. “He better get on to where he’s going, where his women folks can take care of him.”

)

She listened to him. (SR 14)

また Horace の語りに紛れるようにして、彼女の悪態は以下のように繰り返されている。

)

“He’s crazy,” the woman said, motionless inside the door. The stranger’s voice went on, tumbling over itself, rapid and diffuse. (SR 15)

“He’s crazy,” the woman said inside the door, listening. (SR 16)

“The fool,” the woman said. “The poor fool.” She stood inside the door. (SR 17)

SOではHoraceに対して従順な姿ばかりを見せるRubyが、SRではHoraceから離れた語りの視点によって、多面的に捉え直されていることが伺える。またこの場面におけるRubyの罵りは、Ruby本人だけでなくHorace自身の語る内容も同時に対象化する点で、大きな意味をもつ改稿になっている。Horaceの酔い語りはSOでは5章において、Horace自身が後悔する形で対象化されていたのに対し、彼の内面描写が削除されたSRでは、そのような形でHorace自身の後悔が描かれることはない。その代わりにRubyの悪態が加筆されたことによって、SRのテキストはHoraceの言葉が紡がれる端から、Horaceの事後的反省を経由することなく、その内容を対象化するのである。

このようにRubyに関する記述はSOとSRで大きく異なるのだが、NarcissaについてもSOに描写されていた性質の一部が改稿の際に削除されたことにより、SRにおける彼女の人物造形は固定的でなくなっている。SOの3章の後半に位置しているSartoris家の夕食後を描いた場面は改稿の際に完全に削除されているが、このなかにはMiss Jennyに対してNarcissaが新聞の「放火、姦通、殺人についての毒々しい記事<sup>63</sup>」を音読するエピソードが含まれている。同じ段落にMiss Jennyの夫はかつて二度目の結婚記念日に殺害されたという情報が併記され、また続けてHoraceのNarcissaへの幻滅が描かれているために、SOのNarcissaの新聞音読は、彼女を単なるゴシップ趣味の持ち主という以上に、配慮に欠けた人物であると印象付けることになる<sup>64</sup>。Narcissaがこのように描か

れる SO では、彼女が後に Goodwin や Ruby に対して示す排他性もまた、未亡人の前で嬉々として他人の不幸を音読する彼女の性情から生じた行為として読まれることを許し、Horace の彼女に対する幻滅について、読者の共感を喚起する要因となっている。一方 SR において、Narcissa の新聞音読に関する記述は “Narcissa would read the Memphis paper before taking the boy off to bed.” (SR 111) と大幅に削減されてしまい、彼女の印象を固定する記述は残されていない。SR において Narcissa の新聞朗読に対する否定的な意味合いが削除された結果、彼女が Jefferson の町から Goodwin や Ruby を排除しようとする試みは、彼女にとって切実な理由による行為であるというニュアンスが強められることになる。SO の 17 章でも SR の 20 章でも、寝室を訪れた Narcissa は Horace に “I dont care where you live. The question is, where I live I live here, in this town. I’ll have to stay here.” (SO 197; SR 192) と訴えるが、SR では SO 以上にこの台詞が前景化し、重みを増すことになるのである。

SR では Narcissa がゴシップ記事を音読する場面が削除されると同時に、彼女が雑誌を読む描写もまた、慎重に取り除かれている。SO の 17 章、Ruby が Jefferson のホテルから追放されたことを知った Horace が Sartoris 家で Narcissa に対して Ruby を匿うことを主張して拒絶される場面では、Narcissa は雑誌を読んでおり、膝に乗せた紙面から顔も上げず Horace に向かって “Not in my house.” と繰り返す様子が描かれている。

When he reached home on his return from Oxford he said: “Well, I guess I’ll have to take her to the house, now. . . .” Then he became aware that his sister was speaking. She had not looked up from the magazine on her lap.

“Not in my house.” (SO 195)

一方で、これに対応する SR の 20 章では、上の引用の下線部にある Narcissa が Horace に対応しながら雑誌を読んでいるという記述が完全に削除されている。

On the next afternoon Horace went out to his sister’s, again in a hired car. He told her what had happened. “I’ll have to take her home now.”

“Not into my house,” Narcissa said. (SR 190)

また同じ場面で後続する描写においても、SO では “‘Not in my house,’ Narcissa said, turning the magazine.” (SO 196) と書かれていた箇所が SR では “‘Not in my house,’ Narcissa said.” (SR 191) と改稿されており、同じ処理が意識的に徹底されていることが判る。SR の Narcissa は切実な理由から Goodwin や Ruby を共同体から排除しようとするために、その是非を巡る口論を Horace と行ないながら、まるでその議論が片手間であるかのように雑誌を読むという態度を取らないのである。この改稿は、SR の Narcissa が新聞のゴシップを音読しなくなったことと連動している。Narcissa を単に俗悪な人物として印象付けかねない箇所は、改稿の際に慎重に取り除かれているのである。

このように、SO では Horace の認識に沿って被害者と迫害者としての姿を強調されていた Ruby と Narcissa は、改稿を経た結果、そうした固定的な印象を与える描写を削減されている。本論の 1 章で述べたように、SO の語り手が Horace の意識と半ば溶け合うように物語を語っていたのに対し、SR の語り手は Horace と登場人物として対象化したことによっ



て、彼の認識とも距離を取るようになった。SRにおいて Ruby や Narcissa は、語り手と Horace の関係が変化したことによって、構造的に Horace の観察から自由になり、SR の語り手に捉え直された形で描写されているのである。

## 2 節: Christ の属性を喪失する Tommy

Ruby や Narcissa だけでなく、Tommy もまた、改稿によって描写が削減され、SO と SR とで人物像が大きく変化した登場人物に含まれる。SO においても SR においても、彼は Popeye に撃ち殺されて以降は物語の前景から退き、一般的な推理小説であればその死が焦点化される殺人事件の被害者という立場でありながら、物語の後半では裁判の場面を除き、言及されることすらなくなってしまふ。物語の半ばで退場する Tommy が描かれる場面はテキストの前半に限られているものの、SO から SR への改稿では特に前半のテキストが手を加えられているために、Tommy に関する記述は両作で大きく変化することとなった。Horace の認識が反映された SO の語りにおいて、Tommy の存在は彼が死んでから初めて像を結び始めるのに対し、Horace の認識を排した SR では、彼は登場と同時に個人として存在しはじめるのである。

SO で Horace の Old Frenchman Place 滞在を描く 4 章において、Tommy の容姿は以下のように記述されている。

He [Horace] hadn't actually seen any of them until then. He knew about what Goodwin would look like from his voice, and he had seen the second one, the halfwit, when he came up the hall with the jug just before supper. He had a beautiful face, with pale eyes and a soft

)

young beard like dirty gold. Like Christ he looked: a sort of rapt, furious face. (SO 52-53)

菊池は下線を引いた “Like Christ he looked” の主語を Goodwin と解釈しているが（「手稿本 (III)」109, 112）、この箇所で容姿の描出されている人物は “the second one” である “the halfwit” と考えるべきだろう<sup>65</sup>。このように、SO において Tommy という人物は Jesus Christ に例えられているのだが、この記述は彼の「美しい顔」、「青白い眼」、「柔らかく若い汚れた金色の鬚」といった容姿の描写と共に、SR からは削除されてしまっている。

)

Tommy (や Goodwin) は犠牲として殺害されるという面を強調されて描かれる登場人物であるため、「まるで Christ のように見える」という比喩はアイロニカルな表現として理解しやすい。一方 SR において Tommy が「まるで Christ のように見え」なくなってしまった理由には、SO に豊富だったこの種の比喩表現が改稿の際に削減されたことが挙げられるだろうが、同時に改稿の際、テキストの順序入れ替えが行なわれたことも関係しているかもしれない。Temple の Old Frenchman Place 滞在は SO において、7 章から 12 章冒頭までに記述されていたが、改稿によって SR の 4 章から 14 章までに再配置されたことによって、Tommy の登場する場面の並ぶ順序もまた、大きく変化することになった。SO の Tommy はまず 2 章において Old Frenchman Place からトラックまで Horace を案内する “the guide” として登場し、SO の 4 章において Horace の Old Frenchman Place 滞在が語られる際、今度は “halfwit” として登場し、ここで「まるで Christ のように見える」と表現される。そして次に登場する SO の 5 章において、Tommy は Jefferson の町に運ばれてくる遺体とし

)

て姿を現すのである。SOにおいて、TempleのOld Frenchman Place滞在はこの後、7章から12章冒頭で語られるために、5章で遺体となったTommyは「まるでChristのように」復活し、改めてPopeyeに射殺され、出番を終えることになる。一方、出来事の語られる順序が入れ替えられたSRにおいて、Tommyは2章でHoraceを案内し、4章から14章でTempleに出会ってPopeyeに射殺され、最後に15章で遺体となってJeffersonに運ばれてくることで出番を終える。SRのTommyはSOのように、一度殺されたのちに再び生前の姿を描かれることがなくなり、「まるでChristのよう」ではなくなってしまう。

SOとSRにおいてこのようにTommyの登場する場面の配置順序が著しく異なっていることを考える際、SOにおいてTommyが遺体となって登場するまで、彼の名前が地の文に記述されない点は注目に値する。JeffersonにTommyの遺体が運ばれてくる場面のテキストは、SOの5章と対応するSRの15章で以下のように一致している。

All day long a knot of them stood about the door to the undertaker's parlor, and boys and youths with and without schoolbooks leaned with flattened noses against the glass, and the bolder ones and the younger men of the town entered in two's and three's to look at the man called Tommy. (SO 68-69, SR 115-17)

SRではこれ以前の箇所においても、Tommyは地の文でTommyと名前で示される。しかしSOにおいて、Tommyの名が地の文で書かれるのは引用の下線部が最初なのである。

SOのこれ以前の場面において、Tommyの名は登場人物の台詞に二回

だけ表れる。まず SO の 2 章において、Old Frenchman Place から Horace を案内した Tommy がトラックに着いたところで彼に自己紹介をした際、Tommy の名は “My name’s Tawmmy,” (SO 29) と彼の発音に合わせて崩された形で一度登場する。また SO の 4 章において、Goodwin が Tommy に Horace をトラックまで案内させることを述べる際に “All right . . . . Tommy’ll show you the way if you’re ready.” (SO 57) と彼の名前が示されるのである。SO の地の文において、Tommy はまず 2 章において基本的に “the guide” と記され、その後 4 章では “halfwit” と記されており、その名前が地の文に表れることはない。一方、Tommy が当初から名前で示される SR からは “the guide” という表現が削除されており、また “halfwit” という表現も SR の 15 章において Horace が Sartoris 家で Old Frenchman Place の出来事を語る中に一度だけ使われるが (SR 113)、その他には登場しない。SR において、SO の Tommy の呼称に関する変化は削除されているのである。

Horace の意識を多分に反映する SO の表現は、Tommy が当初 “the guide” や “halfwit” といった役割以上ではない存在として Horace の前に表れ、死ぬことによって初めて、彼の意識の前景に表れてくる登場人物として存在していることを示している。一貫して Tommy が名前で呼ばれ、「まるで Christ のように見える」こともない SR の表現は、彼が殺されることで初めて Horace にとって重要な人物になったという Horace の認識に則った記述を拒絶している。SO から SR における Tommy の呼称の変化は、改稿における Horace の内面からの脱却と連動しており、Tommy を Horace の印象に依存しない登場人物として捉え直しているのである。

SR において Tommy は Horace からの意味付けに依存せず、ただ Tommy として生き、死んでゆくのだが、SO において Tommy は、こういって良

ければ推理小説的に、死ぬことで初めて Horace の、また彼と同期している読者の興味を引き、死んだ経緯が明かされることで意味を全うし、Horace や読者から忘れられ、退場する人物として描かれている。Tommy が「まるで Christ のように見える」という SO の記述は、ただ犠牲としての Tommy を象徴するだけでなく、こうしたテキストの構成と連動している彼の描かれ方を示しているといえる<sup>66</sup>。

### 3 節：“the man” でなくなる Popeye

Popeye に関する改稿については多くの論者が、彼の時計が祖父から継いだものであり、そのなかに母親の髪がひと房しまわれているという SO の記述が改稿の際に削除されたことや、彼の両親や幼年期を描いた挿話が SR の終盤に加筆されたことについて論じている<sup>67</sup>。しかし Popeye という人物の描き方については、特徴的な挿話の有無とは違う点についても、SO と SR では大きく書き換えられた部分が存在する。

SO の 18 章、対応する SR の 23 章において、Horace が Memphis で Temple に会い、彼女の Old Frenchman Place での経験を聞く場面のなかに、改稿の際に一ヶ所だけ、単語が置き換えられている部分が存在する。

SO: 18 章

She [Temple] told about lying in the darkness with Gowan snoring beside her, listening to the shucks and hearing the darkness full of movement, feeling the man approaching. (SO 215)

SR: 23 章

She [Temple] told about lying in the darkness with Gowan snoring

beside her, listening to the shucks and hearing the darkness full of movement, feeling Popeye approaching. (SR 229)

下線を引いたように、SO では “the man” と書かれていた箇所が SR では “Popeye” に修正されているが、この書き換えは他の箇所に見られるような、SR で新たな章の区切りを設定したために代名詞を固有名詞に置き換えた修正や<sup>68</sup>、指示対象の分かりづらい代名詞を他の名詞に置き換える修正とは<sup>69</sup>、大きく意味が異なっている。この書き換えに代表される修正によって、SR では地の文において Popeye を “the man” と表現しないことが徹底されているのである<sup>70</sup>。

例外的に Gowan が Temple を乗せた車で起こした事故の現場に Tommy と Popeye が現れる場面において、SO でも SR でも Popeye は Tommy と区別されて “the other man” と表現されているが (SO 81; SR 49)、改稿を経た SR には、他に Popeye が “the man” と示される箇所は存在しない。一方で SO には、先に引用した一ヶ所の他にも、Horace の Old Frenchman Place 滞在を語る SO の 4 章において、Horace の意識を經由している語りのためか、Popeye は繰り返し “the man” と表現されており、また SO の 5 章で Horace が Old Frenchman Place での酔い語りを反省する際にも、Horace の内面を描いた彼の一人称的な語りのなかで、Popeye は “another man” と表現されている (SO 65)。

ただし、Horace の Old Frenchman Place 滞在が語られる箇所は、改稿の際に全面的な書き直しを受けているし、また彼が酔い語りを後悔する場面も SR からは削除されているため、これらの箇所が地の文において Popeye を “the man” と呼称することを避けるための改稿であると指摘することは、説得力を欠くかもしれない。語り手が Popeye を固有名詞で

呼称しようとする意図が最も決定的にテキストに表れているのは、Old Frenchman Place 近くの茂みのなかで、Horace と Popeye が泉を挟んで相対する場面である。SO の 2 章にあたるこの場面において、Popeye は途中まで “the man” と表記されているが、SR では作品の冒頭に移されると同時に Popeye の側から描かれるよう書き換えられたことによって、彼は “the man” ではなくなっているのである。

SO においてここで Popeye が “the man” と呼称されている理由は、まずはこの場面が Horace の視点から描かれているためだろう。しかしまたテキストの再配置の観点からいえば、SO では 1 章においてすでに Tommy 殺害事件より後の場面が語られており、“Popeye’s black presence” が「マッチより小さなものがそれより二十倍も大きいはずの見慣れたものの上に奇怪で不吉な影を落とす<sup>71)</sup>」ように Old Frenchman Place の屋敷を覆っているというイメージが描かれているため (SO 9)、2 章で泉を訪れた Horace の前に姿を現す “the man” の正体が少し遅れて Popeye であると示されることによって (SO 23)、匿名の “the man” が不吉な Popeye へと劇的に転身する展開になっているのである<sup>72)</sup>。

一方 SR において、この場面は作品の冒頭に移されると同時に、Popeye の側から Horace を観察するように書き換えられている。この改稿は多くの場合、SR の物語を Horace の意識から距離をとった形で語りなおすために行なわれたのだということが強調されてきたが<sup>73)</sup>、しかし同時にこの改稿は、場面を Popeye の側から描き直すことによって、SO の対応する場面で Popeye に多用されていた “the man” という表現を SR から一掃する機能を持っているのである。

SR の地の文において、Popeye は “the man” と呼ばれなくなったが、一方 Ruby は SO においても SR においても、地の文では “the woman” と

呼ばれている。このように一貫して “the woman” と表記され続ける Ruby は本作において、女性の代表的存在として、しかも多くの批評が指摘するように理想化された女性像として描かれていることが伺える<sup>74</sup>。そのこと自体の是非はここでは問わないが、改稿によって SO と SR とで Ruby を “the woman” として捉える主体が変化していることに注目したい。SO の語りは半ば Horace の意識と混ざり合っているために、SO において Ruby を “the woman” と捉える認識は、いずれのテクストにおいても Ruby を忍耐強い被害者として肯定的に考えている Horace のものであるようにも見える。しかし改稿によって Horace の意識を介する SO の語り が排されたために、SR において Ruby を “the woman” として捉える認識は、語り手ひとりのものに変化するのである。同様に、SR において Popeye を “the man” と呼称することを避けている主体もまた、本作の語り手のものであることが伺える。改稿によって Horace の意識を切り離れたために、SR において Ruby や Popeye はふたりとも、語り手の認識が色濃く反映した呼称で表現される登場人物となったのである。

Ruby が女性の代表として “the woman” と呼ばれるのであれば、“the man” と呼ばれなくなった Popeye は男性性を否定されており、この呼称が彼の不能と関わっていることが伺える。Popeye の不能は、これまでほとんど暗黙のうちに自明のものとして扱われてきた。たしかに SO においても SR においても、Popeye の不能は Temple や Miss Reba から揶揄されている (SO 227, 250; SR 244, 269-70)。しかし SR において幼少の Popeye を診た医者 に “he will never be a man” と宣告された事実が加筆され (SR 323)、またこうした登場人物たちのそれ自体は事実か否か確定することのできない言及が、Popeye を “the man” と表記しない語り手によって追認されたことで、Popeye の不能は SR において、はじめて高い



蓋然性を持つに至ったのだと考えることも可能である<sup>75</sup>。

このように SO から SR への改稿において、冒頭やそれに続く場面のテキストの順序の入れ替えは、菊池の指摘する Ruby と Narcissa の対照だけに留まらず、Tommy や Popeye の描き方に大きく変化を及ぼしている。登場人物たちは SO において Horace の意識を介して表現されていたが、SR では Horace が語り手から切り離されたことによって、語り手によって表現されるようになり、概して固定的な印象を脱するようになった。しかしだからといって登場人物たちは、決して中立公平な語りによって描写されるようになったわけではない。Ruby や Popeye の呼称に見られるように、むしろ Horace の干渉を受けず、物語に対する語り手自身のもつ立場を明確に示すよう、再定位されたのである。

## 第 4 章

### Horace と Ruby の約束の意味の変質

本章では 1 章で扱った話りの順序の入れ替え、また 2 章で扱った出来事の順序の入れ替えという改稿の側面を踏まえ、Horace と Ruby の関係を描く際の SO と SR における差異を考察する。本章において話りの順序の観点から注目するのは、3 章と同様に、SO と SR の冒頭部分の再配置となる。前章でも Ruby や Narcissa の対立、殺人事件の犠牲者としての Tommy の役割、Popeye の “black presence” といった印象が、SO では作品の冒頭から強調されている点について述べたが、本章では Ruby や彼女の息子を巡る記述がこのテキストの入れ替えによって、Horace と彼らの関わりの意味合いに影響する点を考察する。また出来事の順序の観点からは、SO から SR への改稿の際に、Jefferson に逗留する Horace の寝泊まりする家が、Sartoris 家から Benbow 家に書き換えられていることを扱う。テキストの位置としては 2 章で論じた Horace が Belle との離婚の決意やヨーロッパへの脱出願望を吐露する部分と重なっているが、彼の滞在する家の書き換えは、彼と Ruby の関係において意味を持つことになるのである。

#### 1 節: Ruby の息子と newspaper gift の約束

SO においても SR においても、Ruby の息子は作中に名前を記されることがない。語り手から “the woman” と呼ばれる Ruby 本人は他の登場人物たちから名前と呼ばれているのに対し、彼女の息子は登場人物同士の会話においても、まったく名前を呼ばれることがないのである。しか

しいずれのテキストにおいても、Ruby の息子は繰り返し描写されており、特にその体調の変化が克明に捉え続けられている。SO でも SR でも彼はもともと痩せて生命力に乏しい様子で描かれているが、Goodwin が逮捕されて Jefferson にやって来てから本格的に病気になってしまうのである。この展開は Old Frenchman Place と Jefferson の環境の違いに適應できない彼の弱々しさを表すと同時に、Tommy 殺害事件によって著しく不安定になった一家の行く末を暗示していることが伺える。しかし改稿の際にテキストの再配置や描写の削減を受けたために、こうした意味をもつ Ruby の息子の描写への重きは、SO と SR において変化している。

SO は Goodwin の逮捕された後から語り起こされる構成のために、作品の冒頭から Ruby の息子が病身であることを強調される構成になっている。投獄された Goodwin を Horace が訪れる SO の 1 章において、Ruby の息子は最初、以下のように描写されている。

It [the child] lay in a sort of drugged immobility day after day, its pinched face slick with faint moisture, its hair a damp whisper of shadow across its gaunt, veined skull, a thin crescent of white showing beneath its lead-colored eyelids. (SO 4)

薬で眠ったような不活発さ、痩せた顔、汗をかいた肌や髪、血管の浮いた頭、眼の下のくま等の描写によって、Ruby の息子の不健康が強調されている。SR においてこの場面は物語の 16 章に移動するのだが (SR 120)<sup>76</sup>、SO では当初から Ruby の息子の痩せこけて汗ばんだ姿が強調されており、この後 Horace も Narcissa に対して Ruby の息子を “that child that never has been more than half alive” (SO 5; SR 121) と説明するのである。

また同じ章の後半でも、Horace が Benbow 家に匿った Ruby と彼女の息子を観察する場面において同じような描写が繰り返され、この子供の病気に対する切迫感が強調されている。

[Horace] wondered why women . . . will remove all the lamp shades . . . looking down at the child, at its bluish eyelids showing a faint crescent of bluish white against its lead-colored cheeks, the moist shadow of hair capping its skull, its hands uplifted, curl-palmed, sweating too, thinking Good God. Good God. (SO 9; SR 124-25)

また SO の 2 章、Horace が Ruby や彼女の息子に出会うより前の時点にも、Horace と Popeye が泉で対峙する場面の只中に、後に Horace が Jefferson のホテルで Ruby に会い、Temple が殺人現場に居たことを聞く際の様子が挿入されている。菊池はこの場面の突然の挿入を、「Popeye がこの女の不幸に深くかかわって行くものであること」を示すためのものと捉えているが（「手稿本 (I)」187）、ここでもやはり、Ruby の息子の病状が描き込まれていることは注目に値する。この箇所に対応する段落が SR から削除されていることを考えても、SO では時系列とは関わりなく、作品の冒頭から Ruby の息子の病身を強く示す意図があったと考えられる。

Later--much later, it was--the woman--she was sitting on the bed in the hotel, beside the child. It had been really sick this time and it lay rigid beneath the blanket, its arms spread in an attitude of utter exhaustion, its eye-lids less than half closed, breathing with a thin,

whistling sound while Horace looked down at it, marvelling at the pertinacity with which it clung to the breath which was destroying it.

(SO 22-23)

この回想が先取りしている SO の 6 章末尾の場面において、Tommy 殺害現場に Temple がいたことを告げる前、Ruby は息子のために医者をつんだことを Horace に述べる (SO 78-79)。SO はこの後 Goodwin が逮捕されるより以前の出来事である Temple の Old Frenchman Place 滞在を語り始めるため、Ruby の息子はいまだ病気にはなっていない姿で登場することになる。SR においても Ruby は同じくホテルの場面で息子に医者をつんだことを告げているが (SR 141)、SO とは異なり、その後 Memphis の Temple が語られるため、Ruby の息子の以前の状態が描写されることはない。

Ruby が Jefferson のホテルで医者をつんだ時点より後になって、Ruby の息子がふたたび登場するのは、SO でも SR でも、Goodwin の裁判が始まり、Ruby が息子を抱いて証言席に現れる場面においてである。SO の 23 章の記述は “With the child on her lap she began her testimony, repeating the story as she had told it to him in the hotel that morning the child was ill.” (SO 260-61)、これに対応する箇所 of SR の 27 章の記述は “She was sworn, the child lying on her lap. She repeated the story as she had told it to him on the day after the child was ill.” (SR 283) と大幅に異なるが、いずれも下線部のように Ruby の息子が病気であったことについては述べながら、現在の彼の体調に関する記述はまったくないことが判る。Ruby の息子の回復した姿というものは、SO と SR いずれのテキストの語りにも重視されていないのである。

このように体調の回復ではなく病身を強調する描写のため、SOにおいても SR においても、Jefferson へ来てから悪化する Ruby の息子の体調は、Goodwin の投獄という彼ら一家の一時的な危機を示唆するだけでなく、この一家の行き先の暗さまで予示するものになっている。Goodwin の一家は当初こそ Horace に気遣われて世話を受け、彼から楽観的な言葉による励ましを受けるが、裁判の後になると、Horace は彼らに再会することすらなく、Kinston に逃げ帰ってしまう。Goodwin がリンチを受けて焼死した後、Ruby と彼女の息子がどのような境遇を辿ったのか、いずれのテキストも明らかにしていない。しかし Goodwin の死によって Ruby が路頭に迷うことになる以上、その息子にもまた、厳しい未来が待っていると云わざるを得ない。Ruby の息子の病身は、彼自身の病死への近さだけでなく、Horace の失敗によって Goodwin が死ぬことになる未来、またそれに伴う Ruby と彼女の息子の将来的な破滅を示すのである。

Goodwin 一家の辿るこうした結末の一因には、Horace が彼らへの責任を放棄して Kinston へ逃げ帰ってしまうことが影響しているのだが、そのことを予示して特に強いアイロニーを生む記述は、いずれのテキストでも Goodwin が二度に渡って Horace に対し、息子に新聞配達人の仕事を与えてほしいと頼む箇所だろう。SO でも SR でも、Goodwin は Horace に対し、Jefferson の監獄で最初に彼と会った際と、裁判の一日目の夜にこのことを言っている (SO 4, 263; SR 120, 286)。ただし、SO で最初に Goodwin が Horace に “If you’ll just promise to get that kid a good newspaper grift when he’s big enough to walk and make change . . . . Ruby’ll be all right.” (SO 4) という場面は作品の冒頭 1 章に位置しているのに対し、冒頭を入れ替えられた SR において、この場面は 16 章に移動している (SR 120)。いずれの場面においても Goodwin の言葉に返事をしない

Horace は、当然この一方的な約束を履行しないまま Kinston に戻ってしまうのだが、SO では一度目の発言の位置が作品の冒頭に位置しているため、Ruby の息子の病身の記述と相まって、Horace が彼らへの責任を放棄して逃げ去ってしまうことを、作品の冒頭から強く暗示するものとして機能していることが伺える。

このように、Ruby の息子は Goodwin 一家の暗い未来だけでなく、Horace が Kinston へ逃げ帰ることによって招くことになる結果まで暗示するものになっている。ただし、SO の構成はそれを作品の冒頭から示して固定的な印象として定位することによって、物語全体に宿命的な色合いを与えているのに対し、SO に比べて時系列に即した展開に再配置された SR の構成は、Goodwin 一家が Jefferson に移動してから Ruby の息子が病気になったという事実関係を把握しやすくなっているために、彼の病身が作品に与える宿命的な印象を減じる結果となっている。SO の配置によって得られる宿命的な印象というものが、Horace の敗退を劇的に演出するものである以上、改稿によるその印象の削減は、SO から SR において語り手が Horace を対象化するという構成の変化を補強することになるのである。

## 2 節: Ruby の手と orange stick の約束

SO から SR への改稿の際にふたつのテキストの冒頭の場面が入れ替えられたことによって、Horace が Old Frenchman Place において Ruby と交わす orange stick を巡る約束の意味もまた、ふたつのテキストで変化することとなった。SO でも SR でも、この orange stick は、Old Frenchman Place を去る間際 Ruby に「なにか出来ることがあれば<sup>77</sup>」と言う Horace に対し、彼女が求めた品物として言及されるのだが、この場面は改稿の

際に修正されており、Ruby が Horace に orange stick を求める際の台詞が、SO と SR では異なっている。SO では “You might bring me an orange-stick” (SO 57) であった Ruby の台詞は、SR において “You might send me an orange stick” (SR 20) に書き換えられている。この改稿は SO と SR で orange stick が Ruby にとっては同じ意味を持ちながら、物語の上では異なるコンテクストを与えられていることと対応するように思われる。

SO でも SR でも Ruby は orange stick を求めながら、頑なに隠していた手を一瞬だけ Horace に振って見せる (SO 56-57; SR 19-20)。orange stick というものは、*Reading Faulkner* において “a pointed stick of orange wood used to manicure the nails” (Arnold and Trouard 29) と説明されるように爪を手入れする道具であるため、この Ruby の仕草は重大な意味を持つことになる。Ruby が Horace に対して手を隠し続けている描写からは、おそらく Ruby は娼婦であった時代に比べて自分の手が水仕事で荒れていることを恥じていることが伺える<sup>78</sup>。

SO においてこの orange stick の約束は、Horace にとって Ruby との結び付きを示す重要な出来事として、読者の印象に強く残るように描かれている。まず時系列的には Old Frenchman Place 滞在よりも後になる SO の 1 章という物語の冒頭の段階で、Horace が Benbow 家に匿った Ruby と相対しながら Old Frenchman Place 滞在中の出来事を思い出し、そのなかで Ruby に orange stick を渡すと約束したことが語られる (SO 9)。また Horace が Old Frenchman Place に連行され、そこから出発する場面が描かれる SO の 2 章においても、テキスト上は省略されて SO の 4 章で改めて描かれる Old Frenchman Place 滞在中の出来事を Horace が先取りして断片的に思い返しており、そのなかで Ruby に求められた orange stick について、Horace が想起していることが描かれる (SO 26)。続いて



SO の 3 章においても、orange stick は Sartoris 家で行なわれる会話のなかで、Miss Jenny の口から言及される (SO 46)。Horace の Old Frenchman Place 滞在を描く SO の 4 章の冒頭においても、駄目押しのように Old Frenchman Place を辞した後に泊まったホテルで Horace が orange stick のことを想起する描写が挟まれており (SO 47)、これら四ヶ所すべてを伏線として、ようやくこの章の末尾において、Ruby と Horace がこの orange stick の約束を交わす場面が描かれるのである (SO 57)。SO において orange stick はこの約束の場面でそれまでの伏線を回収して役割を終えてしまい、これを最後にまったく言及されなくなる。約束されることで役割が果たされるとは逆説的なようだが、SO における orange stick はこのように、Horace が Ruby との結びつきの象徴として繰り返し想起するものとして描かれている。

一方 SR では、テキストの順序が入れ替えられた結果、orange stick に関する記述は SO とまったく正反対の順序で登場することになる。また SR は Horace の内面を多く削除しているため、orange stick への言及もまた、Old Frenchman Place を出発した Horace が想起する場面、またその後ホテルで Ruby について回想する部分が削除されてしまい、二ヶ所が減ることになる。こうした変更のため SR では、orange stick について事前に言及されることなく、2 章の後半で Ruby と Horace が会話をし、まず orange stick の約束が交わされる (SR 20)。次に orange stick が登場するのは、かなり間を開けた SR の 15 章で Miss Jenny の口から言及される場面 (SR 112)、それから 16 章において、Benbow 家で Ruby と会話する Horace が Old Frenchman Place での出来事を思い出す場面である (SR 125)。そしてこれ以降は SO と同様、orange stick が物語に表れることはなくなってしまう。

SO では実際に約束の場面が描かれるまでに何度も orange stick を想起する Horace が描かれているため、Horace が orange stick を強く心に留めているような印象が生じているのだが、SR における orange stick は約束の後に二度言及され、物語から立ち消えてしまう。このため SR において orange stick の約束は、Horace が最終的に Ruby を見捨てて Kinston に帰ってしまうことと強く響き合い、Horace が彼女との約束をけっきょく履行することなく退場してしまうことを示すように機能している。

Ruby が Horace に orange stick を求める台詞において、品物と共に当人たちが再会することを示唆する “bring” から、当人たちの再会よりも品物を渡すという約束そのものに重きが置かれた “send” へと書き換えが行われたことは、orange stick が SO では Horace の意識において Ruby との結びつきを象徴するものとして機能していたのに対し、SR では Horace が Ruby との約束を履行できずに退場することになるのだと示唆することと対応しているように思われる。この改稿は、SO では Horace の Ruby への好意的な印象を強調する一方で、SR においては Horace の意識を介さずに Ruby を描こうとする態度とも一致するだろう。

また、菊池も言及するように、SO の 4 章では Ruby の手を巡る描写が繰り返されているが（「未改訂」11-12, 「手稿本 (III)」115-16）、この強調は SO において orange stick の約束が重視されていることと並行しているように思われる。SO では Horace の Old Frenchman Place 滞在を、出来事の起こった順に即した語りではなく、Horace の回想に沿って彼が強い印象を抱いている場面を基軸に行きつ戻りつする語りになっているために、Ruby に関心を抱いた Horace が彼女の手を観察していたことが、実際の機会以上に繰り返し語られる構成になっているのである。4 章の

最初の段落、Old Frenchman Place の夕食の席が描かれる場面に “Then the woman entered and he was looking at her, at her hands.” (SO 47) とあるように、Horace が Ruby の手に注目していたことが描写されているが、この出来事を SO の 4 章は繰り返し執拗に語るのである。Horace が Ruby の手に注目していたことが語られた直後、語りは突然 Old Frenchman Place を離れ、Old Frenchman Place を出発した後に泊まったホテルにおいて、Horace が Ruby をその手の印象によって想起したことが語られる。

. . . then he would be thinking of the woman again, of her hands putting platters of fried food on the table, showing him her hands in that gesture half modesty, half pride and coquetry, telling him he might bring her an orange stick when he returned. (SO 47)

Ruby は自身の手が荒れているのを恥じているのか、Horace から隠すような素振りを見せていたが、SO において Horace は彼女の手から “modesty”, “pride”, “coquetry” といったものを読み取っている。これらの性質は Horace が Ruby に感じた “femaleness” の正体である “something” の “arrogance”, “cringing” といった内実と照応しているために (SO 48)、Horace が執拗に Ruby の手を観察していたことが語られる理由は、彼が Ruby の手に女性性の集約されたものを見ているからだということが伺える。

この後、Horace が Goodwin たちと玄関前で酒を飲む箇所についても、“That was just after he noticed her hands, before she showed him the baby in the box behind the stove.” (SO 48) と Ruby の手を基軸にして語りを展開されており、さらに Horace が Old Frenchman Place での Ruby との出会い

を回想する箇所でも、“He didn’t even wonder who would be cooking the meal until she brought it in to the table and he saw her hands in the lamplight.” (SO 52) と彼女の手に対する Horace の関心が繰り返し語られる。これら Ruby の手に対する Horace の関心が強調されている箇所は、いずれも SR からは省かれている。

このように、SO において Ruby の手と orange stick は、Horace の Ruby への関心の具体的な発露として描かれ、約束が交わされたという事実そのものによって Horace の側からふたりの結びつきを強く印象付けていたのだが、改稿を経た SR では Horace と Ruby を媒介する彼女の手の描写が削減され、orange stick への言及も語りの再配置と共に削減されたために、彼の抱く Ruby への強い思い入れは表現されることがなくなり、Horace が彼女との約束を履行できなかったという結果的な事実が強調されるようになったのである。

### 3 節: Horace の滞在先と Ruby を保護する約束

本章の冒頭でも述べたように、SO と SR では Jefferson において Horace の滞在する家が異なっている。SO の Horace は Benbow 家を開けて掃除をしてからも、Ruby がホテルから追放されるまでは Sartoris 家で寝起きしているのに対し、SR の Horace は自身で掃除をした Benbow 家にそのまま寝泊まりするよう、改稿時に書き換えられているのである。このため SO と SR では Horace の行動にいくつか変化が生じ、彼と Ruby との関わり方に影響することとなった。

SO の Horace が Sartoris 家に逗留し続けることを決めたという記述は、菊池が指摘するように SO の 6 章の冒頭に書かれている（「手稿本 (IV)」63, SO 71)。しかし、ふたつのテキストにおけるこの差異の実態は、Ruby

のホテル追放まではふたつの物語における Horace の描き方の差異に関わってくるのではないため、非常に読み取りにくい。そのため、まず本節では SO と SR において Horace がそれぞれ Sartoris 家と Benbow 家に滞在しているといえる根拠を示しておきたい。

まず SO の 6 章の終盤で Horace がホテルの Ruby に呼ばれ、Temple の話を聞くことになる場面において、彼が Sartoris 家に滞在していることを裏付けるように、こう書かれている。

The next morning Sddie knocked on his door before he was up. “Miss Jenny say fer you to come to her room.” He slipped on his robe and found Miss Jenny propped in bed, a woollen shawl about her shoulders.  
(SO 78)

Sartoris 家の使用人の Sddie が “his door” をノックして Miss Jenny の呼んでいることを知らせると、Horace は “robe” を羽織って Miss Jenny の寝室を訪れている。SO の Horace はここで Ruby から電話のあったことを知らされてホテルへ出発するのだが、こうした Horace の行動の記述から、SO の Horace が Sartoris 家に滞在していることは間違いない。一方、SR の 17 章終盤において、同じく Ruby からの呼び出しが描かれる場面は、ホテルの “negro porter” が Horace を直接呼びに来る形に改稿されているが、彼が Benbow 家に滞在していることを明確にする手掛かりにはならない (SR 140)。SR の Horace が Benbow 家にひとりで滞在していることが判るのは、Ruby の呼び出し前夜の彼の行動を描いた場面である。“That night Horace built a small fire in the grate. It was not cool. He was using only one room now, taking his meals at the hotel; the rest of the house

was locked again.” (SR 140) このように SR の Horace は自身で暖炉に火を入れ、一室だけを使って他の部屋は再び閉め、ホテルで食事をしているのであり、この状況は明らかに Sartoris 家の生活でないことが判る。

また Horace がホテルで Ruby の話を聞いてから、Miss Jenny に Gowan が Old Frenchman Place で行なったことを報告する場面においても、SO の Horace は Sartoris 家に留まっており、そこから Temple の所在を求めて Oxford へ向かったことを、かろうじて読み取ることができる。SO の 12 章において、Ruby のホテルから出た Horace は Miss Jenny と少し会話をした後 (SO 142-43)、後述の “In his room again” (SO 148) という表記からすると、おそらく Sartoris 家に宛がわれた部屋で Little Belle の写真を見ながら Gowan の所業について Ruby に聞いた話を思い返し、その後 “the hall” と “the stairs” を経由して “Miss Jenny’s door” に辿り着き (SO 146)、彼女の部屋で Gowan について彼女に報告し、その後 “In his room again he stood at the window” (SO 148) という記述の後に家を出て駅へ向かう。Horace の行動を捉えた描写が断片的なので判然としないが、やはり SO の Horace は “his room” と Miss Jenny の部屋のあいだの往復に外出していないと考えるのが自然である。一方 SR の 19 章において Horace が Gowan の話をしに Miss Jenny を訪ねる箇所には、“That night Horace went out to his sister’s, in a hired car; he did not telephone.” (SR 172) と彼が車を使って “his sister’s” house へ向かったことが述べられており、Horace は Benbow 家に滞在していることが明確である。

ふたつのテクストにおけるこの差異は、Ruby がホテルから追放された後に描かれる Sartoris 家での展開に影響を与えている。そこで語られる SO と SR で異なる挿話が、Ruby に対する Horace の姿勢の描き方を、SO

と SR で大きく変えているのである。

SO において、Oxford から Jefferson から戻った Horace は Ruby の追放を知った後、そのまま滞在中の Sartoris 家に戻り、Narcissa に Ruby を泊まらせるよう説得するが断られ、その夜、寝室にやって来た Narcissa から事件を降りて Kinston に帰るよう重ねて説得される。SO にはこの時、寝室にやってきた Narcissa に対し、Horace が床のカバンに気を付けるように言う場面がある。

The door opened. He lifted his head, looking across the black footboard into the black darkness where the door had yawned, felt rather than seen or heard. His sister spoke.

“Horace.”

“Yes?” He rose to his elbow. . . . “Look out for the bag,” he said.

“I dont remember where I left it. So it’s probably where it can be stumbled over with the minimum of effort.” (SO 196-97)

Horace の長々しい言葉に対し、Narcissa は短く “I see it.” (SO 197) と答える。SO においてこのカバンを巡るやり取りは、Sartoris 家から荷物をまとめて出てゆくことに抵抗する Horace と、それを意に介さない Narcissa の姿を端的に示しており興味深い。SR ではこの時点で Horace が Benbow 家に滞在しており、この日だけ彼が Sartoris 家に泊まっていることになっているため、このカバンを巡る場面は省かれている (SR 192)。

一方で SR において、Oxford から Jefferson に戻った Horace は Ruby の追放を知った後、Benbow 家で一泊した翌日になってから Sartoris 家に赴

いて Narcissa を説得するが断られる。SO とは異なり、SR ではこの応酬の後、Narcissa が Horace に今日は Sartoris 家に泊まってゆくのかと訊ね、Horace が直接答えようとせず、言い訳を繰り返す場面が加筆されている。

She rose. "Will you stay here tonight?"

"What? No. No. I'll--I told her I'd come for her at the jail and....."

He sucked at his pipe. "Well, I dont suppose it matters. I hope it doesn't."

She was still paused, turning. "Will you stay or not?"

"I could even tell her I had a puncture," Horace said. "Time's not such a bad thing after all. Use it right, and you can stretch anything out, like a rubber band, until it busts somewhere, and there you are, with all tragedy and despair in two little knots between thumb and finger of each hand."

"Will you stay, or wont you stay, Horace?" Narcissa said.

"I think I'll stay," Horace said. (SR 191-92)

SO においてカバンについて長々しく喋る Horace の様子が、SR の言い訳ではさらに誇張されて描かれている。菊池はこの場面について、SR が Horace を Sartoris 家でなく Benbow 家に滞在させる展開にしたために付け加えられ、Ruby や Horace に対する Narcissa の冷たさを強調するものであると述べる（「手稿本 (VII)」59-60）。しかしそれだけでなく、この場面は Horace が Ruby のために本当に犠牲を払う勇気をもてずにいることを、残酷なまでに滑稽化して露呈させている。Horace は Narcissa に今日は Sartoris 家に泊まるのかと聞かれ、まるで Old Frenchman Place に見



捨てた Temple への言い訳を Narcissa への手紙に記した Gowan のように、Ruby を迎えに行けない言い訳を Narcissa の前で呟いて、Sartoris 家に泊まることを決める。しかし本来、この晩だけ Sartoris 家に泊まろうが泊まるまいが、彼の言うように車のタイヤのパンクか何かを Ruby への言い訳にして、彼女の保護を実行しないことは可能である。ましてや SO とは異なり、すでに Benbow 家にひとりで寝泊まりしている SR の Horace が、現状を Ruby の保護が必要な切迫したものと捉えているにも拘らず、この晩だけあえて Sartoris 家に宿泊しなければならない必然性は皆無であるといつてよい。SR における Horace の Sartoris 家への宿泊は、作中世界に理由があるというよりは、直後に置かれた寝室の Narcissa の場面を SR に保存するためという、作品の外からの要請の他には考えづらい。このように作中に理由が示されていないために、Horace の Sartoris 家への滞在が不自然なものとなった結果、Horace がこの晩 Sartoris 家に泊まることを選択することの意味は、かえって大きなものになっている。SR の Horace は Ruby を保護できないことを自分に納得させるために、自ら Sartoris 家に泊まることを選んでいるとでも考えるほかないからである。SO の Horace はこの段階でも Sartoris 家に滞在しているため、Ruby の保護が出来ないことに対する言い訳として、受け入れ先の住人 Narcissa の拒絶を用いることができたが、Benbow 家に滞在する SR の Horace には、自らに言い聞かせるためのそうした理由がない。Sartoris 家の保護を受けずに Jefferson に留まろうとして Benbow 家への滞在を選んだことが、Ruby の保護の必要が実際に迫ったこの時、SR の Horace には枷となるのである。

本章で確認してきたように、SO と SR いずれのテキストにおいても

Horace は Ruby の一家との約束を履行せず、彼らの力になることができずに敗走するという展開を辿るのだが、SO と SR では、これら約束された出来事に対する語りの姿勢が根本的に異なっていることが判る。SO の冒頭に Tommy 殺害事件より後の場面を置く構成は、Ruby の息子の病体に宿命的な意味を担わせ、また orange stick の約束にも Horace の Ruby への思い入れを代表させるように、SO の Horace と Ruby たちの間に約束を交わすという関係性が生じることそのものに重点を置くものになっている。一方こうした冒頭の配置を採用しなかった SR の構成は、約束を交わすことではなく、Ruby の息子に関しても orange stick に関しても、また Ruby の保護に関しても、Horace がそれらの約束を実際にはまったく履行できなかったことを厳しく捉え直すものになっている。こうした Horace と Ruby の関係の描き方の差異には、SO と SR における語りの構成の差異が原因となっているはずである。SO の語りは Horace の意識と半ば混ざり合っているために、Ruby との約束に対して Horace の抱く感傷を語りの構成が認める形を取っているのに対し、SR の語りの構成は Horace を対象化する方法をとったために、彼の感傷を反映することもなくなったのである。

## 第 5 章

### 後景化する Sartoris 家

本章では、SO から SR への改稿において大幅に削除された Sartoris 家に関する記述について検討する。Sanctuary に登場する Sartoris 家と Benbow 家の人々は、もともと 1929 年に *Sartoris* として出版された *Flags in the Dust* の中心的登場人物であった。そのため Sartoris 家と Benbow 家の記述に関して、Sanctuary は *Flags in the Dust* のその後を描いた続篇的な性格を有している。ただし、SO には Sartoris 家の過去を響かせる記述が豊富に描き込まれているのに対し、SR において、それらの記述はほとんど削除されてしまっている。Narcissa や彼女と Young Bayard の息子 Benbow Sartoris、また John Sartoris 大佐の妹 Miss Jenny (Virginia Du Pre) に関する記述は、SO においては Sartoris 家という共通の背景のもとに描かれていたのに対し、SR における彼らからは、自身の家系に対する意識が抜け落ちてしまっているのである。

同じ Sartoris 家を扱いながら、SR と *Flags in the Dust* の結びつきは、SO と *Flags in the Dust* の結びつきに比べ、極めて弱いものになっている。しかし SR において Sartoris 家から切り離された三人の人物造形は、ただ単純化されるに留まらず、特に Miss Jenny や Narcissa について、彼らと Horace の関わり方にも大きく影響するのである。本章では Sartoris 家に関する SO と SR の記述の差異を比較しながら、その検討に資する場合には、必要に応じて *Flags in the Dust* や、SO 執筆の直後の時期に書かれたとされる、Sanctuary 後の Sartoris 家を描く 1933 年 Scribner's 発表の短篇 “There Was a Queen” についても言及を行なう<sup>79</sup>。

### 1 節: Benbow Sartoris の板挟み

Narcissa と Young Bayard の息子である Benbow Sartoris は、SO から SR への改稿において、登場する場面のほとんどを削除されている。彼を巡る SO の記述のほとんどが Sartoris 家に関わるものであるため、SR では扱われなかったのである。前章では Ruby の息子の体調について扱ったが、SO において Benbow の心身の状態もまた、彼の所属する家の命運を示唆するかのよう描かれている。彼は SO において、当初こそ Narcissa や Gowan、Miss Jenny や Horace の言動に対して元気に反応する様子が描かれているものの、Gowan と共に野球観戦へ行く許可をもらえず不機嫌になる様子が描かれたのち、物語の終盤 26 章、Narcissa から Horace へ送られる手紙のなかで、突然 “Bory has been quite sick.” と病気になったことが知らされる (SO 284)。この記述は物語の流れから異様に孤立しているが、SO において Sartoris 家というものが彼に与えている影響を考えると、彼の病気は Sartoris 家全体の未来を暗示するものと読むことができる。Sartoris 家に関する内容が削除された SR では、不機嫌になる Benbow の描写が大幅に削減されると同時に、彼が病気になるという記述も削除されてしまっている。

SO でも SR でも 3 章において、Gowan と Narcissa が庭を散歩する様子が語られたのち、Benbow は Gowan の野球観戦への同行を母親 Narcissa に許可してもらえなかったことに不満を表明している (SR 28; SO 39-40)。しかし SR の当該箇所以上に、SO において Benbow はこの野球観戦に固執しており、まるで野球観戦の許可を与えてくれなかった母親 Narcissa へ仕返しをするかのように、Gowan と Narcissa の交わした会話を Miss Jenny に告げ口する様子が描かれている。SO の Benbow が見せる

野球観戦、正確に言えば Gowan に同行することへの執着は、SO の Benbow が Narcissa と結婚するかもしれない Gowan という男のことを、自分の亡き父親 Young Bayard に重ねているためだと考えられる。庭を歩く Gowan と Narcissa を見る Horace が回想する Gowan との初対面の場面において、SO の Benbow は Horace に Gowan を紹介して “Gowan went to Virginia . . . . Where my father went.” (SO 37) と言うのだが、当該箇所は SR において、“Gowan went to Virginia” (SR 26) に削減されてしまっている。SO の Miss Jenny は Horace に “And that boy will be needing a man, soon, if not already. Nobody but two fool women and a few darkies that let him walk right over them” (SO 35) と発言しているが、彼女が Benbow を Sartoris 家にふさわしい男にするための教育的観点から父親が必要だというのに対し、SO の Benbow はそうした理屈からではなく、父親を欲していることが描き込まれているのである。

父親の希求と結びついた Benbow の野球観戦への執拗は、SO の 3 章に留まらず 5 章にも描かれており、そこで深く掘り下げられている。Gowan がダンス・パーティへ去った日の Sartoris 家の夕食後を描いた場面は SR からは完全に削除されているが、そこには以下のような会話がある。

The boy said moodily: “Gowan said he’d take me, but she wouldn’t let me go.”

“Why, you wouldn’t leave your mother and me alone, without a man in the house, would you?” Miss Jenny said.

“Horace is here,” the boy said. “Who stayed with you before I was born?” (SO 41)

野球観戦へ行ってはいけない理由として Miss Jenny に「この家に男がひとりもいない状態にして母親と私を置いてゆくつもりかね」と言われた Benbow の返答は、不在の父に代わって Sartoris 家の父の役割を求められていることへの耐えがたいストレスを示しているだろう。

Narcissa の息子 Benbow と Sartoris 家の伝統との確執は、*Flags in the Dust* の時点からすでに描き込まれていた。*Flags in the Dust* の終盤、第 5 部の 3 章において、Narcissa は Miss Jenny が息子を “Johnny” と呼ぶのを聞き答めて “He isn’t John. He’s Benbow Sartoris. . . . His name is Benbow Sartoris . . . .” と訂正し、これに対して Miss Jenny も “And do you think that’ll do any good? . . . Do you think you can change one of ’em with a name? . . . Do you think . . . that because his name is Benbow, he’ll be any less a Sartoris and a scoundrel and a fool?” と反論する (369-70)。*Flags in the Dust* において、Narcissa の息子に与えられた Benbow という名は、効力の有無はともかくとして、宿命的な Sartoris 性への抵抗として描かれている。

しかし SO において、Narcissa の息子は Miss Jenny から、相変わらず Sartoris 家の伝統に則って “Johnny” と呼ばれており、Sartoris 家とその宿命を担う存在として扱われている。また、Benbow のそうした性質は彼の描写にも表れており、たとえば SO の 3 章において、Benbow の眼は “bleak, light-colored eyes” (SO 38) と書かれているが、これは *Flags in the Dust* における Young Bayard の眼を彷彿させる (76, 116, 239, 352)。また SO には *Flags in the Dust* に登場した黒人使用人 Elnora の子供たち、娘の Saddy と息子の Sundry が登場するのだが、そのうち Sundry は、SO の 3 章において Horace が仔馬に乗った Benbow と彼の面倒を見る Sundry に遭遇したことを Miss Jenny に話す場面において言及される (SO 34)。

Rousselle は Sundy を連れた Benbow の姿が従者を引き連れた中世の騎士に見立てられていると指摘しているが (121)、こうした描写もやはり、Benbow を Sartoris 家の旧南部的な精神性に繋ぎとめる役割を果たしているといえる。そして同時に、Horace が最初「一对の乗馬像<sup>80</sup>」のようだと評したこのふたりがそれぞれ“pony”と“mule”から降りようと四苦八苦し、また Benbow の腰に留められた玩具の銃が「樽板のような薄いもの<sup>81</sup>」と表現されることから、ここで Benbow の姿は中世の騎士の滑稽な模倣として描かれており、また Horace 自身もこの出来事を Miss Jenny へ語ることで、旧弊な Sartoris 家へ皮肉めかした批判を述べようとしていることが伺える。Horace の Sartoris 家に対するこうした態度は、本章 3 節において取り上げるように、彼が Narcissa を Sartoris 家の人間として眺める時にもっとも切実に表れるものだが、彼女の息子 Benbow や、また次節で述べるように Miss Jenny に対しても、SO では Horace の視点から、Sartoris 家という存在は批判的に描かれている。

このように、*Flags in the Dust* の時点で John Sartoris や Young Bayard がすでに体現していたのと同様、Benbow もやはり決定的に時代に遅れた状態で Sartoris 家の宿命を担う存在として扱われている一方で、彼は母親 Narcissa からは“Benbow”を縮めた“Bory”という名で呼ばれている。Sartoris 性への抵抗が機能していない以上、彼は Benbow Sartoris という名の通りに、ふたつの家名に引き裂かれた存在にならざるを得ない。彼は Sartoris 性とその否定のあいだに囚われ、その重圧に苦しむために、Gowan に自身の父親の代理を求めるのである。SO の終盤における Benbow の病気は、父の不在に端を発する彼の苦しみが、その苦しみを押し付ける家族たちから顧みられることもないまま悪化してゆく救いようのない状況を描き、また彼自身に Sartoris 家の父の代理を務める力が備

わっていないことも示しているといえる。“There Was a Queen”において、Miss Jenny (Virginia Du Pre) という Sartoris 家の伝統や宿命を後世に伝えてきた人物の死が描かれることを考え合わせると、Benbow の病気はさらに示唆的である。

一方 SR では、Benbow が Miss Jenny から Johnny と呼ばれることはなくなっており<sup>82</sup>、同時に彼が Gowan に自身の父親を重ねる言動もすべて削除されている。そもそも SR では、作品の後半に Benbow が登場することもなくなっている。Sartoris 家の朝食の席で Narcissa が Horace に対して Goodwin の裁判で検察側に立つ人物について訊ねる場面において、SO の 17 章には “When he went down to breakfast he carried the bag with him. She and the boy were at the table.” (SO 199) と書かれており、Benbow がその場に同席していたことが示されているのに対し、SR の 20 章からは、彼の姿が消えてしまうのである (SR 194)。Benbow が病気になるという終盤の展開も削除されているため、SR において、Benbow は Sartoris 家の問題を体現しなくなるばかりか、ほとんど物語に関与しなくなるのである。

## 2 節：自立する Miss Jenny

改稿によって Benbow Sartoris の描写が大幅に削減されると同様に、SO と SR では Miss Jenny の描かれ方もまた、大きく変貌することとなった。SO に登場した Saddy と Sundy が SR には登場しないために、SO ではこの双子に世話されていた Miss Jenny もまた、SR ではまるで別人になったかのような変貌を見せるのである。たとえば Massey は改稿の際に Miss Jenny の “domesticity” や “warmth” が削減されたことを指摘しており (204)、また諏訪部は SO から SR において物語の主題が「母探し」



から「父探し」に方向転換するために、旧南部的「母」を体現する彼女の出番は改稿によって削除されたのだと指摘する（『詩学』117-18）。こうしたことに加え、彼女の変貌は、改稿の際に Horace の家出が幾度目かの行為から初めての行為に書き換えられたことにも連動しているのである。

SO の 1 章において、Miss Jenny は「五年前に発作を起こし」、「それ以来、日々を車椅子で過ごし」、「階段の昇り降り」など諸々の移動を Saddle と Sundy に世話される 89 歳の老人として登場する<sup>83</sup>。一日じゅう窓辺におり、たまに車椅子のなかで眠ってしまうという記述からも Miss Jenny の身体的な衰弱が印象付けられるが、改稿の際に Saddle と Sundy がほとんど存在しなくなるまでに削減された結果、SR の Miss Jenny は SO と同じく車椅子に座って生活している人物として記述されいながら、自力で生活しているような印象を与える存在に変化している。SR の 3 章において登場する Miss Jenny は、ただ「車椅子で生活する 90 歳の女性<sup>84</sup>」とだけ説明されている。

SO と SR で異なる Miss Jenny の人物造形が特に表れているのは、彼女が Horace と共に窓から外を眺め、庭を散歩する Narcissa と Gowan を観察する場面である。この場面には *Sanctuary* の作中現在に当たる場面と、Horace の回想する一年前の 10 月の場面のふたつがある<sup>85</sup>。まず作中現在の場面では SO の 3 章でも SR の 3 章でも、Kinston から家出をして久しぶりに Jefferson に戻ってきた Horace は Gowan の名前を思い出せず、Miss Jenny に訊ねている。このとき SO の Miss Jenny は Horace の質問に答える前に、まず窓の方を向くため Saddle を呼んで車椅子を動かしてもらわなければならない (SO 33)。一方で Saddle の登場しない SR において、Miss Jenny は Horace の質問に即答するように描かれており、Horace

に “You ought to remember Gowan.” とさえ言うのである (SR 24)。

また SO における前年の 10 月の場面では、Miss Jenny が Gowan の名前を思い出せずに Saddle へ訊ねており、さらに彼女は Gowan より前に Narcissa と一緒にいた男の名前も思い出せず、やはり Saddle から教えてもらうのである (SO 35-36)。Horace が “It’s like a club. . . . she’s like a very mature little girl playing dolls.” と揶揄するために (SO 36)、Miss Jenny が男の名前を確認することもやはり、Narcissa の周りにいつも違う男がいることを強調するものになっていると考えられるが、同時に他人の名前が思い出せず、何度も使用人を頼る Miss Jenny の姿をも描き出すものとなっている。一方で SR における前年の 10 月の場面では、やはり Saddle が登場しないために、Miss Jenny は自ら Horace に Gowan のことを話し、その前に Narcissa と一緒にいた男についても自分で説明し、記憶力の健全さを示すことになるのである (SR 25)。

またこの 10 月の場面において、Narcissa と共に庭から屋内に入ってきた Gowan が Horace に自己紹介をする際、Benbow が “Gowan goes to Oxford a lot” と言い、彼は女の子とダンスをしに行くのだと喋ってしまうことが SO と SR 共に描かれているが、このときの Miss Jenny の態度もやはり両作では異なっている (SO 37; SR 26)。SO の Miss Jenny は Gowan が他の女に会うことを Narcissa が許していることが信じられないという様子で “Why, Gowan . . . . Narcissa, do you permit---” (SO 37) と詰問するのだが、彼女のこうした感情的な反応は、SR では削除されている (SR 26)。Benbow を Johnny と呼ばなくなったこともあり、SR の Miss Jenny は SO に比べて泰然として、ほとんど Sartoris 家というもののあるべき姿を気にしていないように見えるのである。SR におけるこうした Miss Jenny の姿は、“There Was a Queen” で Virginia Du Pre と呼称される

彼女の姿とのあいだにかなり距離があるようだが<sup>86</sup>、これには SO から SR への改稿の際に、Sartoris 家の内情がほとんど省かれてしまったことが強く影響しているだろう。 *Flags in the Dust* を引き継いで Benbow Sartoris を巡る形で SO に描き込まれていた Sartoris 家を巡る Narcissa と Miss Jenny のあいだの緊張関係は SR からは取り除かれてしまい、代わりにこの短篇に深化した別の形で結実したのだと考えられる。

また、改稿の際に大きな変化を遂げた Miss Jenny の言動には Ruby への態度が挙げられるが、これもまた SO から SR への改稿によって、Miss Jenny の人物像から Sartoris 家の影響が削減された例といえる。 Tommy 殺害事件と Goodwin の逮捕が Jefferson の町に波紋を広げる様子が描かれる SO の 6 章において、Miss Jenny は Ruby に好意的な反応を示し、彼女の息子にミルクを送ってやろうとか、彼女に会ってみたいなどと言出す (SO 77)。彼女の息子にミルクをやろうという提案や、彼女を夕食の席に呼びたいという提案は、基本的に Ruby のことを、上流階級として支援しなければならないひとりの母親として扱おうとするものを見ることができる。一方 SR において、Miss Jenny が Ruby に会いたいと発言する場面は完全に削除されている (SR 140)。Ruby へ関心を見せなくなった SR の Miss Jenny は、Sartoris 家の伝統に基づいた意識で Narcissa や Benbow を咎めることも止めているため、改稿の際に Sartoris 家を保守する人物という面をまったく取り除かれていることが判る。

改稿による Miss Jenny の脱 Sartoris 化は、SO の 3 章、Gowan がダンス・パーティへ去った日の Sartoris 家の夕食後を描いた場面における、彼女と Saddle との会話が SR から完全に削除されていることから確認できる (SO 42-43)。Rousselle によれば、この会話は Miss Jenny が Saddle に対して白人と黒人の主従関係を確認するために行なうカテキズムの間

答であり (123)、そしてそれを眺めていた Horace の “Habet, O most eminent republican” (SO 43) という言葉は、Saddie は暗記するだけで、その内容を理解してなどいないという意を込めた皮肉になっているのだという (124)。Rousselle の解釈に即して読むならば、Horace は Benbow Sartoris を中世の騎士のパロディに見立てた時と同様に、ここでもやはり、旧弊な Sartoris 性を批判していることが判る。改稿においてこの場面が削除されたために、南部旧家を保守する人物として描かれていた Miss Jenny の黒人に対する姿勢もまた SR からは読み取ることが出来なくなっており、彼女の人物像をいっそう平坦にしている。

このように、SO では黒人使用人の助けを借りてなんとか生活し、南部旧家としての Sartoris 家の問題にも敏感に反応していた Miss Jenny は、SR では衰弱した老人、Sartoris 家の伝統を保守する人物といった面を取り除かれて、Benbow と同様、改稿によって Sartoris 家の一員としての重要性が後退した人物に書き換えられているのである。

ただし Miss Jenny は SR において、物語の本筋からも後退してしまっただけではない。SO とは異なり、SR の Miss Jenny は Sartoris 家の問題とは関わりのない文脈に対して、鋭く反応するようになるのである。SO と SR いずれのテキストにおいても、朝食の席で Goodwin の裁判で検事側に立つ人物が District Attorney であると Horace から聞いた Narcissa は、Horace が去った後、今度は Miss Jenny に現在の District Attorney は誰なのかと訊ねている。District Attorney が Eustace Graham であることを告げた Miss Jenny は、SO の 22 章では Narcissa に “Dont you remember reading about it in the paper when he got elected last winter? . . . What do you think about while you are reading the paper, then?” という (SO 255-

56)。本論 3 章 1 節で論じた Narcissa の新聞音読の挿話に対応するように、Miss Jenny はここでも彼女のゴシップ趣味を当て擦り、肝心の記事を読み落としている彼女に皮肉を述べるのである。一方 SR ではこの場面は 20 章に置かれているが、そこで Miss Jenny は Narcissa に “You even elected him. Eustace Graham. What do you want to know for? Are you looking around for a substitute for Gowan Stevens?” と述べた後、“You dont wonder. You just do things and then stop until the next time to do something comes around.” (SR 195) と言う。Narcissa の新聞音読を Horace が悪趣味だと思う挿話が削除されている SR では、やはりここでも Miss Jenny が新聞について言及しなくなっていることが判る。SR ではそれに代わって、Narcissa が Goodwin の裁判に関して何か行動を起こそうとしていることを、Miss Jenny が見透かすような発言をするように書き換えられているのである。

こうした書き換えには、Narcissa が Eustace Graham について Miss Jenny に質問をする場面が描かれる位置が、改稿において移動したことも関わっているだろう。この出来事の起きる時期は、SO でも SR でも変わらず Horace が夜の寝室で Narcissa から忠告されて Sartoris 家から町の Benbow 家に戻る朝のことなのだが、SR において時系列通りに 20 章で描かれるこの場面は、SO ではこの朝食の場面が描かれる 17 章ではなく、22 章で Narcissa が Eustace Graham の事務所を訪れる直前の部分に挿入されており、まるで Narcissa の Eustace 訪問の理由を事前に説明するかのようにな構成になっている。こうした順序で語られる SO とは異なり、SR のテキスト配置には Miss Jenny と Narcissa との会話のなかで Eustace Graham への言及があってから、Narcissa が Eustace Graham の事務所を訪れるまでに間が開いているため、Eustace の登場する場面まで Narcissa の質問

を読者に印象付けておく必要があり、そのため Narcissa がなにか行動を起こそうとしていることを Miss Jenny に指摘させることで、Eustace の登場時に読者が Narcissa の行動を思い出すことができるよう、Miss Jenny の反応が書き換えられたのだと考えることができる。

また Miss Jenny にまつわる改稿のなかで、*Sanctuary* という物語の本筋にもっとも大きな影響を与えているのは、彼女の Horace の家出に対する態度の変化である。SO でも SR でも、Miss Jenny は基本的に Horace に対して Belle の元へ帰るよう諭している。いまだ Horace が Goodwin 逮捕の報を知る前の時点である SO の 3 章と、それに対応する SR の 15 章において、Narcissa が息子 Benbow を寝かせに行った後、Miss Jenny は Horace に “Go back home, Horace” と述べる (SO 45; SR 111)。また SO の 6 章、対応する SR の 17 章において、Gowan から Narcissa への手紙が示された後、Horace に Kinston へ戻るよう諭す Narcissa に同調して、Miss Jenny は “And you know what that way is” というのである (SO 74)<sup>87</sup>。

しかし Horace に Kinston へ戻るよう促す Miss Jenny の意図は、表面的には同じような言動に見えるものの、本論の 2 章で論じたように Horace の家出が初めての行為として描かれる SR と幾度目かの行為として描かれる SO において、実際には正反対のものとして描かれている。このことは SO と SR において Miss Jenny が馬の口に結ぶ馬具「端綱 (halter)」の喩え話をする場面から伺える。SR の Miss Jenny は作中現在の前年の 10 月の場面において、本論 2 章の 3 節で述べたように Horace の家出が初めての行為であることを読者へ示した後 (SR 26)、この「端綱」の喩え話をすることによって、Horace に家出などしない方が良く注意している。“Horace has been bucking at the halter for some time now. But you better not run against it too hard, Horace; it might not be fastened at the other end.”

(SR 27) Horace はいま自分に結ばれている端綱に逆らってぐいぐいと引っ張っているが、反対側がしっかりと結ばれている保証はないのだから、抵抗するのはやめた方が良く、と Miss Jenny は Horace に言い聞かせており、家出などすると取り返しのつかないことになるという忠告を行なっている。ここで Miss Jenny は直接的には、Belle の身持ちについて述べているのだろうが、この喩え話は SR において、本論 2 章の 3 節で述べたように、Horace の今度の家出が Goodwin のリンチによる焼死という取り返しのつかない結末によって閉じることとも響き合っている。

この喩え話は SO の当該場面には登場しない。ただし SO において「端綱」の喩え話は、Horace が Benbow 家へ出向く前の晩に Narcissa や Miss Jenny と行なった会話を描いた場面に登場しており、さらにその意味は SR とは正反対のものになっている。この場面において、Miss Jenny は Horace へ小言を繰り返す Narcissa に対して “Let him alone” と繰り返して言う。“He dont want to be free. None of them do. They just run out now and then to make sure the halter is really tied.” (SO 32) Horace は本当に自由になりたいわけではなく、自身の結ばれた端綱がしっかりと固定されているのを確かめるために、たびたび逃げ出すそぶりを見せてぐいぐい引っ張るだけだ、というわけである。SO の Miss Jenny は、これまでの幾度かの家出と同様、今度も Horace が Kinston に戻ってゆくということを完全に見越しているが、この喩え話もやはり、SO の Horace が繰り返す惰性的な家出に対応している。SO にも SR にも、「端綱」の喩え話はこの一ヶ所ずつしか登場しない。本論の 2 章 3 節では Miss Jenny が SO と SR において、Horace の家出に関する設定の相違を示す役割を担っていることを述べたが、それだけではなく、彼女はそうした設定の差異によって変化する SO と SR の結末まで暗示しているのである。

### 3 節：脱 Sartoris 化する Narcissa

本論の 3 章では Narcissa の Ruby に対する態度に関する差異について検討した。しかし Narcissa に関する改稿は、以上のものに留まらない。Benbow や Miss Jenny だけでなく、彼女もまた Sartoris 家との関係について改稿の影響を受けているのである。SO は *Flags in the Dust* の内容をかなり引き継いだ形で Narcissa を描いており、Young Bayard との結婚が彼女と Horace の関係に与えた変化も示唆されているため、SO における Narcissa と Horace の確執の一部には、Sartoris 家という存在が確実に影響を及ぼしている。一方 SR において Sartoris 家に関する記述が削除された結果、Narcissa と Horace の関係には Sartoris 家の介入する余地がなくなっている。SR においてふたりの対立の背景にあるものは、Narcissa が Horace に対してその代表として振るまう Jefferson の町の余所者への排他性に収斂することになるのである。

Sartoris 家の人間としての Narcissa について描かれている箇所は、SO の前半に集中しており、主に Horace の過去の回想によって語られる。そのため、SO に描かれる Narcissa の Sartoris 性は Horace の印象を通して、Narcissa を以前の彼女から変質させた原因として語られることになる。最も顕著な例は SO の 5 章にあるが、そこで Horace は自身が一時的に滞在している Sartoris 家について、Narcissa の「不可侵 (impervious)」な性質を瓦解させたものとして否定的に語っている。

He seemed to have expected her to be impervious not only to marriage, but to Sartorises as well. Yet even as the car entered the drive that led up to the square white house in its park of locusts and oaks,



entering that atmosphere with which four generations of cold-blooded men clinging violently to their outworn traditions of human behavior had imbued the very soil on which they had lived, he was saying Damn that brute. Damn that brute. (SO 59)

下線を引いたように、Horace は Sartoris 家の “atmosphere” に Narcissa が影響されることがないように願っていたのだが、やはり Young Bayard との結婚によって、Narcissa は変化してしまったのだと述べられている。続く箇所では、Horace は彼女が “enchanted” され、Miss Jenny や息子 Benbow と共に Sartoris 家の一員になってしまったことを認めている。

And later . . . he thought of his sister as a figure enchanted out of all time between a bed-ridden old woman eighty-nine years old who summed in her person the ultimate frustration of all the furious folly of that race, and a nine-year-old boy emerging full-fledged from the soft haze of childhood into a tradition that had violently slain three men in four generations while in the throes of its own rigor-mortis. (SO 59)

SO の Horace が Narcissa に幻滅した原因の少なくとも一端には、Sartoris 家という伝統的な旧家の影響が示唆されている。ただし、Narcissa が Sartoris 家の人間になったことが彼女の「不可侵性」に悪影響を与えたのだという時、*Sanctuary* に先行するテクストを参照する方法をとるのであれば、その原因は Horace 自身にもあることが判明する。*Flags in the Dust* において Horace と Narcissa は互いに “Horry”, “Narcy” と呼び合い、テ

ーブルの下で手を握り合うほどの親しさを見せており、水面に映った自身の分身を眺め続ける Narcissus のように、ほとんどふたりの間で完結した「不可侵性」のなかに耽溺しているように描かれている。Horace とそうした関係にあった Narcissa が Young Bayard との結婚に踏み切った理由に、彼女が Horace と Belle の不倫関係を知ったことが影響していることを勘案するならば、Narcissa と Horace の間で自己完結的に閉じていた「不可侵」な関係を瓦解させる契機を先にもたらしたのは Horace の方である。*Flags in the Dust* では第 3 部の 4 章において、Horace と Belle の関係を知った Narcissa が Horace に “You’ve got the smell of her all over you. Oh, Horry, she’s dirty!” (190) という様子が描かれているが、SO の 2 章では、結婚式の二日前に Narcissa が Horace へ “You’ve got the smell of her all over you. Cant you tell it?” (SO 18) と類似する言葉を繰り返す場面が描かれている。*Flags in the Dust* を参照するならば、SO や SR における Narcissa の Horace に対する距離のある態度は、*Flags in the Dust* において変質してしまったふたりの関係の延長にあるものと読めるのである。SO の Horace が *Flags in the Dust* の時とは変わってしまった SO の Narcissa に幻滅してしまったというのであれば、SO の Narcissa もまた *Flags in the Dust* での Horace への幻滅を引きずったまま彼に接しているのである。

このように *Flags in the Dust* を考慮に入れて SO と SR の Narcissa と Horace の関係を考えるとき、*Flags in the Dust* の挿話はその内容を大幅に書き換えられたうえで、SO において *Flags in the Dust* とは異なるコンテキストで再話されている箇所が重要である。SR からは省かれてしまっている箇所だが、SO と SR の差異を比較するためにも、その一部を確認しておきたい。*Flags in the Dust* にも SO にも、Horace と Narcissa が Belle

との関係を巡って仲違いした後、Horace が雨のなか雨具を持たずに Benbow 家を訪れ、Narcissa にそのことを責められる挿話が置かれている。SO の 2 章において、この挿話は Horace が回想する形で再話されているのだが、もともと *Flags in the Dust* において、この場面は屋内にいる Narcissa の側から描写されていたものであった。Horace の側に視点が変更されると同時に、この挿話のコンテクストは *Flags in the Dust* から SO において大きく変化している。

*Flags in the Dust* 第 4 部 2 章

He [Horace] flung the door open and entered . . . . “You idiot,” she said, “where’s your raincoat?”

. . . “Narcy,” he said again, hugging her, and she ceased resisting and clung to him. . . . “Narcy,” he said, still staring at her, “has that surly blackguard---“

“No, of course not,” she answered sharply. “Have you gone crazy?” Then she clung to him again, wet clothes and all, as though she would never let him go.

“Oh, Horry,” she said, “I’ve been a beast to you!” (286-87)

SO: 2 章

He saw her once before her husband died. He returned home at noon in the November rain and opened the door and they stood looking at one another.

“Narcy,” he said, “has that surly blackguard---?”

“You fool! You fool! You haven’t even an umbrella!” she said. (SO

下線を引いたように状況や言動にもいくつか違いが見出せるが<sup>88</sup>、ここで重要なのは、*Flags in the Dust* と SO では、雨具を所持していなかった Horace を責める Narcissa の態度に大きな違いがあるということである。*Flags in the Dust* において Narcissa の側から語られるこの場面は、Narcissa が Horace に以前の振るまいを謝罪しようとする場面として描かれている。一方 Horace の側から語られる SO では Narcissa の謝罪の言葉そのものが描かれておらず、代わりに Horace が雨具を持っていなかったことを Narcissa に責められた点が強調されている。SO において雨曝しになった Horace を責める Narcissa は、彼が Belle と関係したことによって兄妹間の「不可侵性」を失ってしまったことを、改めて糾弾しているようにも見える<sup>89</sup>。SO の語り手が *Flags in the Dust* で描写された出来事そのものを改竄したのか、それとも SO の Horace の意識が彼の罪悪感から事実を改竄して語ったのか定かではないが、SO における Narcissa と Horace の関係が *Flags in the Dust* での仲違いを引きずったものとして構想されていることを勘案したとき、この場面の再話において、ふたりの和解が取り消されてしまっている意味は非常に大きい。このように、SO では *Flags in the Dust* の挿話の意味を変化させながら再話することによって、Narcissa と Horace の微妙な距離感の由来を示している。

こうした挿話が SO から SR への改稿の際に削除され、SR では Horace と Narcissa のぎこちない関係について、Sartoris 家の関係する具体的な内容が描かれなくなったために、Narcissa が Horace に反発し、Goodwin や Ruby を Jefferson から追放しようとするものの意味は、ふたつのテキストで変化することとなった。SO では Narcissa が Ruby を追放しようと

するのに対し、Miss Jenny は Ruby を Sartoris 家に招こうと考えていた。Ruby の処遇に対するふたりの態度の違いは、Sartoris 家という旧家と Jefferson の町の力関係について新旧二世代のふたりが抱く印象の差異から生じていると考えることができる。SO の Miss Jenny は Sartoris 家の振るまいに Jefferson の町が悪意を向けることはないと考えているからこそ、Ruby を Sartoris 家に呼びたいと発言することによって、婉曲的に Horace に賛成する態度を表明するのにに対し、Narcissa は Sartoris 家と Jefferson の町の現状にそのような力関係を見ておらず、余所者に対する Jefferson の人々の反応を敏感に察知し、Goodwin や Ruby に対する排他性に迎合する必要を覚え、町と同調圧力に吞まれてゆくのである。このように、SO において Narcissa の態度は Miss Jenny と対比されることで Sartoris 家を軸に描かれているのに対し、SR からは Sartoris 家という背景が削除された結果、Miss Jenny が Ruby を匿おうと発言することがなくなり、また Horace と Narcissa の確執に Sartoris 家が挟まることもなくなり、そのため Narcissa が執拗に Ruby の追放を主張する理由について、Jefferson の町の排他的な同調圧力が前景化することになる。SR において Narcissa という人物は、*Flags in the Dust* における Horace や Sartoris 家との関係から切り離された結果、Goodwin や Ruby を追放しようとする Jefferson の町の排他性と、直接に結びつくことになるのである。

このように、Narcissa とその息子 Benbow、そして Miss Jenny の人物造形や相互関係は、SO から SR への改稿によって Sartoris 家という共通の背景を失い、同時に彼らと Horace の関わり方もまた、改稿を経て Horace の Sartoris 家に対する観察が削除されたために、表面的なものとなった。しかし、Miss Jenny は Horace の家出がもたらす SO と SR とでそれぞれ

)

異なる結末を、いずれのテキストでも正しく指摘してみせる人物として描かれており、SRにおいて Sartoris 家が後景化したことによって Jefferson の町が前景化した点を考えれば、こうした改稿は、一概に物語の単純化と呼べるものではなく、むしろ SO から SR への改稿の際に行なわれた、語りの視点の捉え直しのひとつとして考えるべきものであるといえる。

)

)

)

## 結 論

### *Sanctuary* 改稿の際に見出されたものと見捨てられたもの

本論は、SO と SR の優劣を論じる前の段階に踏みとどまり、これまで加筆や削除に焦点を絞られていた *Sanctuary* の改稿の研究において、顧みられることの少なかったテキストの順序の入れ替えについてふたつの方向から SO と SR を比較し、両テキストの差異を検討してきた。そのひとつは作中の出来事を語る順序の組み替えを検討することであり、またひとつは作中で語られる出来事自体の書き換えを検討することである。結論ではこれらふたつの基本的な軸に沿って本論の各章を位置づけなおしてゆき、*Sanctuary* 改稿を総合的に定位してゆきたい。

#### 1 節：テキストの順序入れ替えによる改稿

本論の 1 章や 3 章、5 章では、主に Horace を対象化し、彼の観察や認識をテキストから取り除いてゆく編集的な改稿について記述した。本論の 1 章 1 節で詳述したように、SO の語り手は Horace の回想を辿るようにして過去の出来事を語っているために、半ば Horace の意識と溶け合うような形を取っていたのだが、SR の語り手は意識的に Horace を登場人物のひとりとして対象化／相対化することによって、語りの実権を握るようになったのである。これと同時に 1 章 2 節に記したように、もともと Horace と読者の認識を同調するように叙述されていた Horace の物語と Temple の物語の配置順序は、改稿の際に再配置されたことによって、読者と Horace がもつ情報の差を広げ、読者もまた Horace を対象化して捉えることを促すような構成に書き改められた。また 1 章 3 節で述べた

ように、この順序入れ替えと同時に行なわれた加筆によって、Ruby と Temple それぞれが Horace に対して行なう Old Frenchman Place についての語りは相対化されており、単声的だった SO の構成は、SR において多声的な構成に変化することとなったのである。

また本論の 3 章 1 節 2 節では、1 章 1 節で保留していた改稿における冒頭の章の差し替えや、Horace の Old Frenchman Place 滞在の場面のテキストの順序入れ替えを起点として、Narcissa や Ruby、Tommy といった登場人物たちが、Horace の観察に基づく描写から解放されたことを扱った。本論 5 章では改稿の際に、Benbow Sartoris や Miss Jenny、Narcissa といった Sartoris 家の面々から Sartoris 的な性質が後退したことを述べたが、ここでもやはり、SO に描きこまれた彼らの Sartoris 的な性質に対して Horace が抱く批判的な観察が、SR からは取り除かれていることを論じた。このように Horace の対象化／相対化を促進した結果、SR では登場人物たちがより個々の人間として存在するようになったのだが、同時に SR の語りは本論 3 章 3 節で述べたように、特に Ruby や Popeye の呼称に関して、Horace でなく語り手の解釈が反映されたものに変貌している。このように SO から SR への改稿によって、登場人物の描写を行なう主体は、語り手と Horace の癒着した意識から、新たな語り手ひとりへと変化したのである。

従来の研究においてこうした語りの順序の入れ換えは、Horace の内面や過去に関係する描写を削除したことに付随するものと位置付けられていた。しかし本論の検証を踏まえるならば、このテキストの再配置という方法は、Horace の意識を中心的な位置に据えていた SO の語りの構成を、SR において Horace を相対化するパノラマ的視点による語りの構成へと組み換える際の、中心的な手続きであったといえる<sup>90</sup>。Horace とい



う登場人物は彼を中心とする SO においても、彼を対象化／相対化する SR においても、語り手が物語の情報を提示してゆく順序を決める際の基準点となる存在であるために、ただ Horace の観察を削除し、Horace 以外の登場人物に関する挿話を加筆するだけでは、改稿によって彼の対象化／相対化を成し遂げることは不可能だからである。実際の改稿の順序は推測することしか叶わないが、Faulkner は SO の構造の中心にいた Horace を対象化／相対化する SR の構成のために、まずテキストの順序を組み換え、この新しい構成にもっとも適合する形にテキストを調節するため、加筆や削除を行なっていたのだと考えることが、本論の検証には最も合致するのである。

一方、本論の 2 章、また 4 章や 5 章の一部では、改稿の際に作中の出来事が書き換えられたために、SR の Horace の物語は SO の Horace の物語とは異なるものに変貌したことを述べた。本論の 2 章で詳述したように、SO と SR は同じ出来事を叙述した物語ではなく、特に Horace の外的・内的経験が、両作で別々の主題を描き出すものにまで書き換えられているのである。SO は習慣的に家出を繰り返す Horace が己の惰性に抗おうとするが、結局は惰性に引き留められるまでを描いた物語だったのに対し、SR は Horace が現状からの脱出を決意して初めての家出を敢行し、決定的に失敗する物語となった。改稿において結末に Goodwin のリンチが加筆されたことで、物語に起伏が与えられたと SR を評価する批評は、その動的な結末が SR における Horace の家出が初めての行為であったことと意味的に結びついている点を見逃すべきではないだろう。家出を繰り返す Horace を惰性の円環の外側の認識に到達させない SO の物語構造においては、彼に決定的な敗北の認識を促すリンチが描かれない

ことにも必然性があるのである。

こうした Horace の外的・内的経験の変更に関連し、Horace に関する登場人物たちの描写にもまた変化が生じていることを、本論の 4 章や 5 章の一部で取り扱った。本論 5 章では特に 2 節において、Miss Jenny の喩え話が SO と SR における Horace の物語の変化に対応していることを指摘した。また本論 4 章では、Horace が Ruby との関係性を感傷的に重視する様子を示す SO の描写やテキストの配置順序が、SR からは取り除かれたことを論じた。改稿時の冒頭の章の差し替えによって、Ruby の息子を巡る約束や、彼女との orange stick を巡る約束に関する記述は、約束が交わされたことを重視する構成から、約束が履行されなかったことを重視する構成へと変化しているのである。また Jefferson で Horace の滞在する家の変化という彼の経験の書き換えからも、SO から SR への改稿の際に、Horace と Ruby の関係が厳しく捉え直されていることが伺える。

作中の出来事の順序が入れ替えられていることは、従来の研究において等閑視される傾向にあった。しかしこうした再配置が SO と SR ふたつのテキストの描く物語の差異を正確に把握するために重要であることは言うまでもない。また Horace を決定的な認識の外側に連れ出さなかったのが、Horace の意識と半ば混ざり合っていた SO の語り手であり、Horace を決定的な認識へと導くことを成し遂げたのは、Horace を対象化／相対化した SR の語り手であったことから、この出来事の再配置が、改稿の際に語り手と Horace の距離感が変化したこととも結びついていたことを推測させる。冒頭の場面の差し替えによる Horace と Ruby の関係性の捉え直しにも表れているように、Horace を登場人物のひとりとして対象化／相対化することと、Horace の物語の意味を厳しく捉え直すことは、

テキストの入れ替えという手続きのなかで、密接に絡み合っていたことが伺えるのである。

## 2 節: Horace の対象化と登場人物たちの相対化

改稿における Horace の対象化と登場人物たちの相対化は、作品の構造だけでなく、主題的な部分にも密接に結びついている。これまでの議論を踏まえ、ふたつのテキストにおいて登場人物の空間的な位置関係を説明する語句の置き換えを確認することによって、それが SO から SR への変貌の要であることを確認したい。

本論 3 章 3 節でも述べたように、改稿によって物語の冒頭に再配置された泉の場面において、Horace と Popeye の相対を語る描写は、SO ではふたりの対峙する泉の Horace 側に立つものだったのに対し、SR では Popeye 側に立つものに書き換えられた。しかし同時に、SO では Horace の側から見て泉の “beyond” に Popeye が立っていると語られていた箇所は、SR では Popeye の側から泉の “beyond” に Horace が居るという描写ではなく、“across” という語を使った表現に書き換えられている。SO で “The man was standing beyond the spring” (SO 21) だった部分が SR では “He saw, facing him across the spring” (SR 3) となり、SO で “Beyond the spring the man appeared to contemplate him with two knobs of soft black rubber.” (SO 22) であった部分が “Across the spring Popeye appeared to contemplate him with two knobs of soft black rubber.” (SR 4) と改稿されているのである。

この「あちら側 (beyond)」から「反対側 (across)」への改稿は、SO において語り手や読者と同調するようにして「こちら側」、「我」の位置にあった Horace を登場人物のひとりとして対象化し、同時に SO では 1 章

の時点で先に Old Frenchman Place を覆う “Popeye’s black presence” が物語に大きく影響することを示すことによって、Horace の理解を超越した「あちら側」の人物として描かれていた Popeye という人物を、「我」を超越する「他者」の無限性を強調した存在というより、Horace と同じように作中世界に登場人物のひとりとして存在し、ただ Horace と「反対側に」立つ存在へと変えてしまう。SR において Horace は語りの視点の抛り所でなくなって対象化されるだけでなく、このように Popeye と相対化された存在となるのであり、Sanctuary 改稿において Horace の対象化と相対化は、SO において語り手と癒着していた Horace をも、互いに相対化しあう登場人物たちのなかに投げ入れる形で密接に絡み合っている。

また SR の終盤では、Kinston に帰った Horace が Belle と会話をする場面においても、この冒頭の泉の場面と対照を成すように “across” が使われている。Horace が家に戻ってみると、Belle は全面がピンク色で染められた自室で寝台に寝そべって雑誌を読んでいる。Belle と Horace と雑誌の位置関係について、SO では Horace の手紙のなかで “she laid her magazine down and watched me from her pink nest” (SO 281) と記されているのに対し、SR では物語の語り手によって “She looked at him across the magazine.” (SR 314) と描写されている。SO において Kinston に戻った Horace が雑誌を読む Belle を見出すことは、本論 3 章 1 節で取りあげたように、Sartoris 家で Ruby 保護の必要性を説得する Horace に対し、Narcissa が雑誌を読みながら片手間に拒絶していたことと結びつき、Horace から見て、Belle の俗悪さを示すものとして機能していた。しかし SR において Narcissa が雑誌を読まなくなった結果、この場面は Narcissa よりも、むしろ冒頭の泉の場面に結びつくことになり、Horace

と Popeye が「反対側」に位置していたように、Horace と Belle もまた「反対側」に位置することを示すようになる。SR の Popeye が Horace と泉を挟んで向かい合ったように、SR の Belle もまた、Horace と雑誌を挟んで向かい合うのである。

*Sanctuary* は “logical pattern to evil” (SO 218; SR 232) を巡る物語だと言われ、Brooks の SR に対する議論を筆頭に、作中の様々な人物が “evil” の体现者として糾弾されているが (127-28, 131-32, 137-38)、いずれのテキストにおいても “evil” という言葉がほとんど Horace によって言及されるものであることを考えれば (SO 72, 144-45, 200, 202, 218, 282; SR 134, 210, 232)、それはあくまで SO の Horace が展開する問題だったのであり、SR においては、Horace の問題を作品全体の主題として論者が選択的に前景化したものである。Horace が対象化／相対化された SR において、作中で言及される “evil” というものは、Horace 個人の道德観を表明するものに留まることになる<sup>91</sup>。

田中や山下は、Old Frenchman Place が Popeye や Goodwin といった密造酒製造業者たちにとって「聖域 (sanctuary)」として機能しており、そこに別のルールに基づいて動く人間が闖入したために、この「聖域」が崩壊することで *Sanctuary* の物語が駆動することを指摘している (田中 174; 山下 49)。そのとおり 2 章 2 節で述べたように、Horace が家出によって Kinston という低地から脱出して水害の及ばぬ「丘」という「聖域」を目指したのと同様に、Popeye にも「聖域」があり、また雑誌を挟んで Horace と対峙した Belle にも、やはり「聖域」がある。彼女のピンク色の部屋は、物語冒頭の泉に対応する物語末尾の「聖域」なのである。SR で雑誌を読まなくなった Narcissa もまた、Jefferson という “sanctified streets” (SO 196; SR 191) という「聖域」での自身の生活を守るという切

実な理由から Ruby を排除しようとして行動していることは、3 章 1 節で述べた通りである。

Horace を対象化し、他の登場人物たちのなかに投げ込んで相対化したことによって、SR の語りは Horace の世界認識に基点を置いた SO の語りの外に出て、彼を含めた個々人が自らの「聖域」を保守しようとする運動同士の衝突を描く物語に変貌した。1 章 3 節で述べた Ruby と Temple による Old Frenchman Place についての矛盾しあう語り直しは、そうした各人の衝突が、小説の構成に揺さぶりをかけるまでに昇りつめた瞬間なのである。

### 3 節：SO の構成の対象化と挿話同士の相対化

*Sanctuary* 改稿の要が Horace の対象化／相対化であるということは、SO を解体して SR に再構成するという、*Sanctuary* 改稿の手続きそのものとも無関係ではない。序論で述べたように、Faulkner は 1929 年に SO を書き上げたのち、1930 年にそのゲラ稿が届くまでのあいだに *As I Lay Dying* という別の小説を執筆していた。彼は一度、完全に *Sanctuary* から離れていたのである。ML 序文の「私は *Sanctuary* のことを忘れていたと思う (vii)」という言葉がどこまで本作をわざと卑下してみせる ML 序文特有の表現なのか、定かではない<sup>92</sup>。しかし少なくとも 1930 年に SO のゲラを読み直した Faulkner が、それをテキストの各部分同士が響き合って生み出す物語総体の設計図を把握している作者の視点で読んだというよりは、その総体を完全には覚えていない読者に近い立ち位置で読んだだろうということは、推測して良いように思われる。ある設計の意図に則って配置されている各部分たちを、まったく別の設計に則って再配置できるようになるためには、まずその部分たちを、もともとの設計が求

める意味の影響から切り離されたものとして捉え直すことが必要だからである。もともとの総体の設計を忘れることが出来たとき、はじめて部分が新たな可能性を主張しはじめ、その可能性から新たな総体の設計が導かれる。ゲラ稿によって SO を読んだ Faulkner は、SO の語りの戦略を一読者が受け取るように受け取ることで、SO の設計の総体を思い出すように看取してゆくのと同時に、この働きに抵抗するかのよう、1929 年時の彼にとっては SO の設計意図を全うするための部分と見えていたテキストの各部分を、初めてそれそのものとして受け取り直し、その各部分がそれぞれ喚起する新たな意味の響き合いの可能性に導かれるようにして、SR の設計を構想しはじめたのではないだろうか。

そして 1930 年の Faulkner にとって、SO のテキストの各部分に触発されて構想した SR の設計の方が、再読によって看取した 1929 年の SO の設計に比べて、良いものだと思われたのだろう。ML 序文の言葉を 1929 年の SO 執筆期に遡及せずに解釈し、また彼が単に SO の細部を書き直すのではなく、活版を組み直すための費用を折半してまで物語の構成を全く新たなものに取り換えた理由を解釈するならば、この時の Faulkner が SR の構成の可能性に感じた興奮に根拠を置くほかない。

一度構成した SO の設計を解体して SR の設計に再構成するという、改稿時に作品テキストの外で取られた手続きは、Horace の意識と溶け合うことで物語全体を統御していた SO の語りを解体し、互いに言動を相対化しあう他の登場人物たちのなかに Horace 個人の言動を投げ入れ、彼らのあいだに生まれる対照をこそ物語総体の設計として読者に提示する SR を再構成するという、これまで確認してきた作品テキスト内で取られた手続きと、完全に同種の運動である。Sanctuary 改稿は、期間を置いた再読によって SO テキストを対象化し、その各部分を相対化することに

よって、語りの中心にいた Horace を対象化し、彼と他の登場人物を相対化することによって SR のテキストを再創造するという行為なのである。

*Sanctuary* 改稿においてこの作品外・作品内ふたつの運動がパラレルになった理由は、SO の設計が、語り手と Horace の意識を半ば混合させることで成り立つものであったからだといえる。しかもそれは、Horace と読者の状況認識を一致される推理小説的なプロットのために、Horace の意識に読者の同調を強いる形を取っていた。小説テキストにおける語り手という機能は、読者が小説テキストを読むことによって初めてそのテキストを語る主体として立ち上がるものであることを踏まえるならば、*Sanctuary* 改稿時の Faulkner は、SO を読むことによって SO の設計思想を担った語り手を現出させながら、同時に物語の各部分の可能性に触発されることによって、読者として SO の語り手と完全に同調することを拒絶しながら、SO のテキストを再読していたことになる。SR の語り手が Horace を対象化し、他の登場人物たちの中に彼を投げ込むような語りを行っていたのは、SO の Horace が SO の設計を体現する語り手と半ば入り混じった存在であり、SR の語り手が、まさにその SO の設計を拒絶しようとする 1930 年の Faulkner の意志から生じてきたものだったからに他ならない。

SO から SR への改稿において Horace が対象化され、他の登場人物たちと相対化されたことは、単に SO を不備のある作品と見做してその不備を修正するという行為である以上に、一度は保留された原稿が一年以上経ってからゲラ稿として戻ってきたために SO を読者の立場で読むことになった Faulkner が、SO を分析的に解体することによって再解釈した結果だったといえるだろう。



表A: SOとSRにおける語りの順序の異同

章	SO	SR	章
1	Hは監獄のLを訪問, HはS家でNとMsJにRuの事を話す, HはRuをB家から宿へ移す	Hは泉でPと遭遇, HはPにOFFまで案内される	1
	葡萄棚のLBの回想, HはK家でLBと口論 (結婚前のBとの会話の回想), (結婚前のNとの会話の回想)	OFF到着, [PとRuの会話] [夕食], 老人の食事, [飲酒]	
2	HはBの部屋で口紅で汚れた布を見る, HはKinstonを出発する, (Nとの会話の回想)	[Hの酔い語り(葡萄棚のLB, K家でLBと口論, Bの部屋で口紅で汚れた布を見る)]	2
	Hは泉でPと遭遇, (宿でのRuの回想), HはPにOFFまで案内される	HはRuと会話して彼女の子供を見る	
	HはTにトラックまで案内される, Hはトラックに相乗りする	HはTにトラックまで案内される, Toの犬の話, Hはトラックに相乗りする	
	(HはB家をモップ掛け), (S家到着後の回想)	HはS家でMsJと庭のNとGを眺める, Gとの初対面の回想	3
3	HはS家でMsJと庭のNとGを眺める, (BoryとSundyの乗馬の回想), Gとの初対面の回想	HはNにGがダンスへ行ったと聞く	
	HのS家到着時の回想	大学のTe, Gの泥酔, Gの自動車事故	4
	HはNにGがダンスへ行ったと聞く, (HはB家をモップ掛け), (S家の写真の回想)	TeとGはToにOFFまで案内される, Teが老人と相対	5
	HはNとMsJに家出とOFFについて語る	ToとGが納屋で飲酒, GとTeの口論, TeはLと遭遇	6
	(宿でのOFFの回想), (Ruの印象), (夕食), (Pの印象), (飲酒), (Hの酔い語り), OFF到着	TeとRuは台所で会話する	7
	(OFFの印象), (夕食), (Toの印象), Toの犬の話	夕食, 男たち飲酒, ToのTe窃視, 男たち喧嘩, 寝室の騒動, ToがPを追い回す	8
4	老人の食事, (飲酒), (Gの印象)	[Ruは暗い寝室を出入りする男たちを観察する], [Ruは寝室のTeを起こす]	9
	HはRuと会話して彼女の子供を見る	RuはTeを納屋に案内して寝かせる	
	HはS家に二日間滞在, (HのS家での行動), (HはB家をモップ掛け), (Hは母の幻を見る)	[RuはGと台所で会話], GのOFF逃走	10
5	HはB家を開ける, (B家の描写), (HはB家を掃除), HはNと会話, (夕食), (OFFの回想)	Teが起床し台所へ行き手洗いのため納屋へ行き男を見て台所に戻り再び納屋へ行く	11
	HはB家から土曜の町を見る, (LB, B, Harry Mitchelの回想), 月曜にToの遺体が届く	Ruは台所でLと口論, Ruは泉でPと会話, Pは藪でLと会話, Toが納屋からPを見る	12
	Hは監獄のLを訪問, HはS家でJe住人への不満, GのNへの手紙, (Nへの手紙の回想)	納屋でTeとToが会話, Teは納屋に隠れる, 侵入したPのTo射殺, PとTeの相対	13
6	Hは監獄のLを訪問, Hは車上でNと会話, (MsJがRuを案じる), Hは寝室で死刑囚を思う	[Ruは泉で車上のPとTeを目撃], [RuはTo殺害を通報する]	14
	(HはMsJにRuからの呼出を知らされる), Hは宿でRuからTeについて明かされる	HのS家到着時の回想	
7	大学のTe, Gの泥酔, Gの自動車事故	HはS家に二日間滞在	
8	TeとGはToにOFFまで案内される, Teが老人と相対	HはNとMsJに家出とOFFについて語る	15
	ToとGが納屋で飲酒, GとTeの口論, TeはLと遭遇	HはB家を開ける, HはNと会話	
9	TeとRuは台所で会話する	HはB家から土曜の町を見る, 月曜にToの遺体が届く	
	Ruの語り(OFFの状況, 寝室の騒動, 男たちが暗い寝室を出入りする, RuはTeを起こす)	Hは監獄のLを訪問, HはS家でNとMsJにRuの事を話す, HはRuをB家から宿へ移す	16
10	RuはTeを納屋に案内して寝かせる	Hは監獄のLを訪問, HはS家でJe住人への不満, GのNへの手紙,	
	Teが起床し台所へ行き手洗いのため納屋へ行き男を見て台所に戻り再び納屋へ行く	Hは監獄のLを訪問, Hは車上でNと会話, Hは寝室で死刑囚を思う	17
	Ruは泉でPと会話, Pは藪でLと会話, Toが納屋からPを見る	Hは宿でRuからTeについて明かされる	
	(Teは納屋でPとToの口論を聞く)	PはTeをMへ移す, Dumfriesでの騒動, MsRの娼館, 医師の診察	18
11	夕食, 男たち飲酒, ToのTe窃視, 男たち喧嘩, 寝室の騒動, ToがPを追い回す	娼館の一室でTeは十時半という時刻を考える, MsRの飼い犬, Teは食事を摂る	
	納屋でTeとToが会話, Teは納屋に隠れる, 侵入したPのTo射殺, PとTeの相対	Teの部屋にPが侵入する	
	Ruの語り(泉で車上のPとTeを目撃, LがTo殺害を通報), (死刑囚を思う), (LBの写真)	Ruの語り(OFFの状況, 寝室の騒動, 男たちが暗い寝室を出入りする, RuはTeを起こす)	19
	Ruの語り(Gと台所で会話), GのOFF逃走	HはMsJにGの消息を報告するが代わりにNがGを拒絶したことを聞く	
12	HはLBの写真を見る	HはLBの写真を見る	
	HはMsJにGの消息を報告するが代わりにNがGを拒絶したことを聞く	HはB家から列車でOxへ行きTeの不在を知ってJeに帰る途上の列車でCに会う	20
	HはS家から列車でOxへ行きTeの不在を知ってJeに帰る途上の列車でCに会う	HはJeの宿でRuが追放されたことを知って監獄でRuは無事だと聞く	
	HはJeの宿でRuが追放されたことを知って監獄でRuは無事だと聞く	HはS家でNの忠告を受けて翌朝S家を出る, NはHに検察側の担当を訊ねる	
13	PはTeをMへ移す, Dumfriesでの騒動, MsRの娼館, 医師の診察	NはEについてMsJに聞く	
14	娼館の一室でTeは十時半という時刻を考える, MsRの飼い犬, Teは食事を摂る	HはMへ行く途上のCに会う	
15	Teの部屋にPが侵入する	VとFのM滞在	21
16	VとFのM滞在	Hは廃屋でRuに再会, HはB家に電話を設置, HはSとTeの情報を取引する	22
	HはMへ行く途上のCに会う	HはMでTeの話を聞く, HはB家に戻る, LB写真, Hの嘔吐	23
17	HはS家でNの忠告を受けて翌朝S家を出る, NはHに検察側の担当を訊ねる	Teは娼館から抜け出してReに電話をする, TeはPとGrottoへ行きRedに会う	24
	Hは廃屋でRuに再会, HはB家に電話を設置, HはCと取引, (HはBに離婚の手紙を執筆)	Reの葬式	25
18	HはMでTeの話を聞く, HはB家に戻る, (Bへの手紙を見る), LB写真, Hの嘔吐	MsRの娼館でReを偲ぶ集まり	
19	Teは娼館から抜け出してReに電話をする, TeはPとGrottoへ行きRedに会う	[HはBに離婚の手紙を書く], HはBへの手紙を投函してJaへ行くCに会いNに会う	26
20	Reの葬式	NはEに裁判の勝敗について訊ねる	
21	MsRの娼館でReを偲ぶ集まり	Jaから戻ったCが床屋で文句を言う	
	HはBへの手紙を投函してCに会いNに会う	HとMsRの電話	27
	NはEについてMsJに聞く	裁判開廷	
22	NはEに裁判の勝敗について訊ねる	EがRuとLの結婚を問う, Hは監獄でRuの身上話を聞く, 裁判の二日目にTeが入場する	28
	Jaから戻ったCが床屋で文句を言う	Teの証言, Teの父が入場して彼女を連れ帰る	
	裁判開廷	[判決], [HはS家で夕食], [Hは駅前に歩いてゆき宿で休憩して広場でLのリンチを目撃]	29
	HとMsRの電話	[HはKinstonに戻って部屋のBと会話してLBに電話する]	30
23	EがRuとLの結婚を問う, Hは監獄でRuの身上話を聞く, 裁判の二日目にTeが入場する	Pの誤認逮捕, [Pの幼年期], 監獄のP, Pの処刑, LuxembourgのTe	31
	(幼年期に袋鼠の入った桶に猫を入れた顛末の回想)		
24	Teの証言, Teの父が入場して彼女を連れ帰る		
25	(Hの手紙(Kinstonへの敗走, 部屋のB, 不在のLB, Ruに別の弁護士を寄越すと伝言))		
26	(Nの手紙(Lのリンチ, Ruへの伝言を監獄に送付, Boryが病気))		
27	Pの誤認逮捕, 監獄のP, Pの処刑, LuxembourgのTe		

表B: SOとSRにおける作中の出来事の順序の異同

SO	Jefferson (Horace周辺)	Memphis (Temple周辺)
5/3 金	HはK家でLBと口論をしてKinstonを出発	
5/4 土		
5/5 日		
5/6 月		
5/7 火	Hは泉でPと遭遇, HはOFFに滞在	
5/8 水	[Hは宿に一泊], HはS家に到着, NとGが庭を歩く, [HはNとMsJにOFF滞在を話す]	
5/9 木	[Hは半醒半睡に母の幻覚を見る]	
5/10 金	HはB家を開けて掃除,	大学でダンス・パーティ, Gが酔い潰れる
5/11 土		TeとGはドライブ, TeとGはOFFに滞在
5/12 日		GはOFFを逃走, Toの殺害, Teの強姦, [Lが通報]
5/13 月	Toの遺体がJeに到着,	(Teの退学届)
5/14 火		(Jaの新聞がTeのMichigan行きを報道)
5/15 水	[Lが逮捕・投獄される, Hは監獄のLを訪問, HはS家でNとMsJにRuの事を話す, HはRuをB家から宿へ移す]	
5/16 木		
5/17 金		
5/18 土		
5/19 日	Hは監獄のGを訪ねる, HはS家でJeの排他性を嘆いてGの手紙を見る	
5/20 月		
5/21 火		-CはVとFを探しにMに滞在
5/22 水	= [X]	= [Yと連動]
5/23 木	Hは監獄のGを訪ねる, Hは車上でNと会話, [S家でMsJがRuを案じる]	
5/24 金	Hは[S家]からRuに呼ばれる, RuがHにTeの事を話す, HはMsJにGの事を話す, Hは[S家]からOxへ発つ	
5/25 土	HはOxでTe不在を知り列車でCに会いJeでRuの宿追放を知る, [S家でNが忠告], (死刑), (VとFがM到着)	
5/26 日	[NはHとMsJにEの事を聞く, HはS家を出てCに会う, CはMへ出発]	
5/27 月		
5/28 火	[HはRuを匿う家を見つける]	-VとFはMsRから昼だけ部屋を貸してほしいと頼まれる
5/29 水	[HはB家に電話を設置]	= [Xと連動]
5/30 木		
5/31 金		-CはMでTeを発見しPにマッチで脅かされる
6/1 土	= [Y]	= [Yと連動]
6/2 日	-CがJeでHに情報を売る, [Hは離婚の手紙を執筆]	
6/3 月	HはMに行きCに会ってからTeにOFFの事を聞く	
6/4 火	HはJeに戻り嘔吐, Hは手紙を投函してCに会う, [Hと話してから]NがEを訪問, CはJaに出発	
6/5 水		-VとFは学友に娼館へ連れてゆかれる
6/6 木		-PはTとRの性交を観察し始める
6/7 金		-CはMでVとFに会う
6/8 土		= [Xと連動] = [Xと連動]
6/9 日		
6/10 月	[HはMsRに一度目の電話(?)]	この日から一週間PはMsRの娼館に姿を見せない
6/11 火		
6/12 水		
6/13 木		
6/14 金		
6/15 土		
6/16 日		
6/17 月		R殺害(?), Pの誤認逮捕に繋がる警官殺害
6/18 火	JaからJeに戻ったCが床屋で文句を言う, [Hは再度MsRに二度目の電話],	R葬式(?)
6/19 水		
6/20 木	L開廷, Ru証言	
6/21 金	Te証言	
6/22 土		[HはKinstonへ帰還, LBに電話]
6/23 日	[HはKinstonからNへ手紙を書く]	[Lのランチ]
6/24 月		
6/25 火		
6/26 水		
6/27 木		
6/28 金		
6/29 土	[NはHへ手紙を書く]	
夏		Pの誤認逮捕
夏		Luxembourg公園のTe

SR	Jefferson (Horace周辺)	Memphis (Temple周辺)
5/3 金	HはK家でLBと口論をしてKinstonを出発	
5/4 土		
5/5 日		
5/6 月		
5/7 火	Hは泉でPと遭遇, HはOFFに滞在	
5/8 水	HはS家に到着, NとGが庭を歩く	
5/9 木	HはNとMsJにOFF滞在を話す	
5/10 金	HはB家を開けて掃除,	大学でダンス・パーティ, Gが酔い潰れる
5/11 土		TeとGはドライブ, TeとGはOFFに滞在
5/12 日		GはOFFを逃走, Toの殺害, Teの強姦, [Ruが通報]
5/13 月	Toの遺体がJeに到着,	(Teの退学届)
5/14 火		(Jaの新聞がTeのMichigan行きを報道)
5/15 水	[Lが逮捕・投獄される, Hは監獄のLを訪問, HはS家でNとMsJにRuの事を話す, HはRuをB家から宿へ移す]	
5/16 木		
5/17 金		
5/18 土		
5/19 日	Hは監獄のGを訪ねる, HはS家でJeの排他性を嘆いてGの手紙を見る	
5/20 月		
5/21 火		-CはVとFを探しにMに滞在
5/22 水		= [Zと連動]
5/23 木	Hは監獄のGを訪ねる, Hは車上でNと会話	
5/24 金	Hは[B家]からRuに呼ばれる, RuがHにTeの事を話す, HはMsJにGの事を話す, Hは[B家]からOxへ発つ	
5/25 土	HはOxでTe不在を知り列車でCに会いJeでRuの宿追放を知る, (死刑), (VとFがM到着)	
5/26 日	[S家でNが忠告]	
5/27 月	[NはHとMsJにEの事を聞く, HはS家を出てCに会う, CはMへ出発]	
5/28 火		VとFはMsRから昼だけ部屋を貸すよう頼まれる
5/29 水	[HはRuを匿う家を見つける]	
5/30 木	[HはB家に電話を設置]	
5/31 金		-CはMでTeを発見しPのマッチで脅かされる
6/1 土	= [Z]	= [Zと連動]
6/2 日	-CがJeでHに情報を売る	
6/3 月	HはMに行きCに会ってからTeにOFFの事を聞く	
6/4 火	HはJeに戻り嘔吐, [Hは離婚の手紙を執筆]し投函してCに会う, [Hとすれ違った]NがEを訪問, CはJaに出発	
6/5 水		-VとFは学友に娼館へ連れてゆかれる
6/6 木		-PはTとRの性交を観察し始める
6/7 金		-CはMでVとFに会う
6/8 土		
6/9 日		
6/10 月	[HはMsRに一度目の電話]	この日から一週間PはMsRの娼館に姿を見せない
6/11 火	= [Zと連動]	
6/12 水		
6/13 木		
6/14 金		
6/15 土		
6/16 日		
6/17 月		R殺害, Pの誤認逮捕に繋がる警官殺害
6/18 火	JaからJeに戻ったCが床屋で文句を言う,	R葬式(?)
6/19 水	[HはMsRに二度目の電話]	
6/20 木	L開廷, Ru証言	
6/21 金	Te証言, [HはS家で夕食], [Lのランチ]	
6/22 土		[HはKinstonへ帰還, LBに電話]
6/23 日	[HはKinstonへ帰還, LBに電話]	
6/24 月		
6/25 火		
6/26 水		
6/27 木		
6/28 金		
6/29 土		
夏		Pの誤認逮捕
夏		Luxembourg公園のTe

## 付 論

### *Sanctuary* 改稿に関する二種類の表について

SO と SR における改稿の痕跡を視覚化するため、加筆や削除を含めて語りの順序の異同を比較する「表 A」と、片方のテキストにのみ存在する挿話を含めて作中の出来事の順序の異同を比較する「表 B」を付した。

ふたつの表中において共通して使用した人名の略称の意味は以下の通りである。

B: Belle Benbow, C: Clarence Snopes, G: Gowan Stevens,

H: Horace Benbow, L: Lee Goodwin, LB: Little Belle,

MsJ: Miss Jenny, MsR: Miss Reba, N: Narcissa Sartoris,

P: Popeye, Ru: Ruby Lamer, Te: Temple Drake, To: Tommy

また同地名に関しては以下の通りである。

B 家: Jefferson の Benbow 家, Ja: Jackson, Je: Jefferson,

K 家: Kinston の Benbow 家, M: Memphis,

OFP: Old Frenchman's Place, Ox: Oxford, S 家: Sartoris 家

以下、ふたつの表について個別に言及し、特に表 B については、作成にあたって SO の時系列を表中のように並べた根拠を記す。

#### 表 A について

SO と SR における語りの順序の異同を比較する表 A は、先に Massey や Langford の作成したものよりさらに図示的なものを目指したが、紙幅

の都合もあり、語りの順序の異同のすべてを完全に捉えたものではない。改稿においてテキストの差し替えは章単位、挿話単位、文章単位で膨大かつ複雑に行なわれているため、表 A の作成にあたっては挿話単位を基本とし、そのため挿話を弁別し、ある程度の大きさをもった挿話を一単位として、それ以下は表に反映させない方針を取った。こうした改稿を扱う本論の特に 1 章や 3 章、4 章中では、表に反映されていない改稿も当然のこと視野に入れ、論旨に適うものに言及している。

表 A にのみ適用される記号の意味は以下の通りである。

〈 〉 : SO にのみ表れるテキストであることを示す

[ ] : SR にのみ表れるテキストであることを示す

表間の実線 : SO と SR の当該テキストが挿話単位で対応関係にあることを示す

表間の破線 : SO と SR の当該テキストが挿話単位で対応するが、ただし両方で語りの位相が異なることを示す

#### 表 B について

SO と SR における作中の出来事の順序の異同を比較する表 B は、SR の時系列と SO の時系列をそれぞれ表にまとめ、並列したものである。Brooks や *Reading Faulkner* は SR の時系列を整理・推論して表を作成しているが、SO の時系列を整理する研究はほとんど見られない。本論では特に 1 章や 2 章、4 章の前提とするため、SO の時系列を試作した。

SO と SR では入手できる日付の手掛かりが異なっているが、本論のふたつのテキストに対する姿勢と同様に、SO と SR を相互に参照して互いの穴を埋める方法は控えることを目指した。ただし、Millgate の述べる

)

ように Faulkner が SO のテキストを出来る限り SR でも保存しているという改稿の性質を鑑み (114)、両者の差異をいたずらに複雑化することを控えるため、基本的には SO と SR それぞれのテキストの記述から、明確に差異が認められる箇所を確実に定位することを優先している。このため特に日付の確定をしにくい SO の表について、便宜上 SR の日付に沿って出来事を配置し、ただし確実にその日付と言えるわけではないことを示すため、その出来事が起こりうる時期の振れ幅を示す方法を取った。

)

表 B 中にのみ適用される記号の意味は以下の通りである。

( ) : SO や SR の作中に直接の記述はないが、当該出来事が発生していたと考えられる箇所を示す

【 】 : SO と SR で異なる出来事が発生する箇所、また両者で時系列のずれている箇所を示す

(?): 出来事の時系列に占める位置が不確定であり、便宜上、当該箇所に置いたことを示す

} : 出来事の時系列に占める位置が不確定だが、その範囲を絞れる場合、当該出来事の発生する時期の可能性の振れ幅を示す

)

SR の時系列について Brooks と *Reading Faulkner* はいずれも、まず本文内の記述から確定的な日付を取り出し、そこから関連する出来事の時系列を推論してゆくという方法を取っている (Brooks 387-91; Arnold and Trouard 249-53)。本論の表 B も基本的にはふたつの先行研究に準じながら、同時に SO についても時系列を定位してゆく必要から、両者の議論を辿り直した。SR の時系列の再検討を含め、以下に表 B における SO の時系列の根拠を記す。

時系列の指標 (1)——5/3 (金)～5/18 (土)

SR において Popeye による Tommy 殺害と Temple 強姦の日付は 5/12 (日)であり (Brooks 389)、またこれは SO でも同様である。このことは Goodwin の裁判のなかにある Eustace の Temple に対する “Where were you on Sunday morning, May twelfth?” (SO 276; SR 301) という問いから確実である。

この日付と曜日から、SR の舞台となる年が SO の執筆された 1929 年であることが判る (Brooks 389)。SO にも同様の推論が適用できるが、SO に関しては Popeye の誤認逮捕に繋がる警官殺害の日付が “June 17, 1929” (SO 285) と明記されているので、ここからも年を確認することが出来る。

また、Horace が家出をしてから Tommy の遺体が Jefferson に届く 5/13 (月) までの日付は、ほとんどがここから推論が可能である (Brooks 389)。ただし SO に関して、Horace の Old Frenchman Place 滞在中の出来事を語る 4 章の冒頭に “Later, when he reached the hotel, he could not go to sleep, even with all the whisky he had drunk.” (SO 47) という文章があることから、Old Frenchman Place からトラックに乗せてもらった SO の Horace は、次の日 Sartoris 家に着く前に、どこかホテルに一泊していた可能性が高く、本論の SO の時系列にはこれを付記している。

*Reading Faulkner* において指摘されているように、SO と SR では Tommy 殺害を通報する人物が Goodwin から Ruby に変更されており、本論の表にはこれを記した (Arnold and Trouard 102; SO 141; SR 109)。また 5/14 (火) に Temple の Michigan 行きを報じた Jackson の新聞について記す根拠は、いずれのテキストにおいても Horace が Oxford から Jefferson に戻る列車のなかで遭遇した Clarence の台詞である (SO 157; SR 185-86)。

Brooks は SR の Horace が家出をする日を 5/3 (金) としているが、*Reading Faulkner* ではこれに加えて、Horace が Little Belle と口論した日を、その前日 5/2 (木) としている。これは先の確定日 5/12 (日) から逆算したとき、Horace の Old Frenchman Place 到着が 5/7 (火) と類推でき、また SR の Horace が酔い語りのなかで Little Belle との口論の日について "So this morning--no; that was four days ago; it was Thursday she got home from school and this is Tuesday" (SR 14-15) と述べているためであるという (24)。しかし、この台詞から Horace と Little Belle の口論を、彼女が学校から戻ってきた当日である木曜日の出来事と規定する必要はない。Horace が一度誤って "this morning" と言った "four days ago" は、直後に Little Belle との口論が語られていることから、家出のみならず Little Belle との口論があった日をも指していると考えるのが自然である。Horace が酔い語りをする火曜日の四日前は木曜日でなく金曜日であり、Horace はこの金曜日に Little Belle と口論をし、Belle の口紅付きハンカチを目撃し、金も持たずに家を出たのだと考えるほうが、突発的な家出という状況に照らし合わせて不都合もないだろう。強いて SR に適用する意図はないが、SO において Horace と Little Belle の口論から家出までは、彼女が学校から戻った次の日の朝に起こった一連の動きとして語られている (SO 14-20)。Horace と Popeye の遭遇が家出から "Four days later" (SO 20) の出来事と書かれていることから、SO においても Horace の家出は 5/3 (金) と考えることが出来る。

序盤の出来事のなかで明確に日付を特定できない部分は、Goodwin の逮捕から獄中の彼のもとを Horace が最初に訪ねるまでの流れである。SR について、Brooks は Goodwin の逮捕と Horace の監獄訪問のいずれについても通報の行なわれた 5/12 (日) もしくは Tommy の遺体が Jefferson

に運ばれた 5/13 (月) と記しており、*Reading Faulkner* も Goodwin の逮捕を 5/12 (日)、Horace の監獄訪問を 5/13 (月) としている。しかしいずれの研究も、これらの出来事が 5/12 (日) から 5/13 (月) のあいだに行なわれたとする根拠を示しておらず、また SR の本文中にその根拠は見られないように思われる。本論の表ではこれらの出来事を、単に通報のあった 5/12 (日) から、別の出来事が起こっていると推論が可能であることを後述する 5/19 (日) の前までに発生した出来事として記述する。SO においてもこれは同様である。ただし SO には “He had not noticed the veil when he first saw her in town. It was only when he returned to town on the evening of Goodwin’s arrest” (SO 5) という記述があるため、Goodwin の逮捕されたその日に Horace の監獄の訪問が行なわれたことが判る。

#### 時系列の指標 (2)——6/17 (月)～夏

SO と SR いずれのテキストにも、Goodwin の裁判の開廷する日は 6/20 (木) と明記されているため (SO 260; SR 281)、SR だけでなく (Brooks 390)、SO においてもこの日付を確定することが可能である。ここから SO と SR それぞれの終盤の出来事の日付をいくらか推論することができる。

SR において、裁判二日目の 6/21 (金) に Temple の偽証を受けた Horace は、Goodwin のリンチに遭遇してから Jefferson を出てゆく。このリンチを Brooks は 6/21 (金) 深夜の出来事とし、*Reading Faulkner* では 6/22 (土) 未明の出来事と記しているが、本論では Horace の裁判敗退からの連続性を示して SO の時系列と差異化するため、これを 6/21 (金) 当夜の出来事として記述する。

また *Reading Faulkner* は SR の Horace が Kinston へ帰還した日付について、Eustace から情報を得た Narcissa が Belle に送った手紙の “Horace



would be home on the twenty-fourth” (SR 279) という内容に合わせて 6/24 (月) と記している。しかし Goodwin の裁判は Eustace の「最長で三日掛かる<sup>93</sup>」 (SR 278) という想定以上に早く、二日で被告人の死を迎えて終結するため、Horace はより早く Kinston に戻った可能性も考えられる。*Reading Faulkner* は SR の Horace の Kinston 帰還が 6/24 (月) であることの根拠として、Horace の帰宅が Belle の帰宅と同日になったことを挙げているが (232)、先に挙げた Narcissa の手紙からは、Belle の帰宅を 6/24 (月) 当日と規定することは出来ないだろう。SR の Horace の帰還は 6/22 (土) 以降とまでしか特定することはできない。煩雑になることを防ぐため、表では 22 日から 24 日までをこの時期としたが、Kinston で Horace を家まで送った車の運転手の口ぶりからは 6/22 (土) や 6/23 (日) に妥当性があるように思われるし、また厳密を期すなら Horace が 24 日以降に帰宅した可能性も捨てることはできないはずである。

一方 SO において、裁判二日目以降の Horace の行動は、ほとんどテキストに表れない。“June 29” と日付のある Narcissa から Horace への手紙には、Goodwin のリンチは Horace が Jefferson を去った次の日に準備されていたと書かれているが (SO 284)、SO には Horace が Jefferson を出た日付が書かれていない。ただし Kinston から送られた Horace の Narcissa への手紙の日付に “June 23” と書かれているため、SO の Horace は 6/23 (日) までには帰宅していたことが判る。こうしたことから、SO において Horace が Jefferson から逃げ出したのは 6/21 (金) から 6/23 (日) のあいだ、Goodwin のリンチは 6/22 (土) から 6/24 (月) のあいだに絞られることになる。

また裁判開廷の日が確定されたことから、裁判前の出来事もいくつか時期を特定することが可能である。いずれのテキストにおいても Horace

は開廷前に二度 Miss Reba に電話しているが、その時期は SO と SR で異なっている。SO には “Twice he had telephoned Miss Reba, the second time two days before the trial opened.” (SO 260) という記述があり、一度目の時期は判然としないものの、二度目の電話が 6/18 (火) であることが特定できる。一方で SR には一度目の電話の時期を示す “A week after his Memphis visit, Horace telephoned Miss Reba.” (SR 281) という記述、また二度目の電話の時期を示す “On the night of the nineteenth he telephoned her again.” (SR 282) という記述が見られる。一度目の電話の時期は開廷の日付からは特定できないが、二度目の電話の日付は 6/19 (水) であることが確定する。

また終盤の時系列に関しては、Popeye の誤認逮捕に関わる記述からも、いくつかの出来事の時期を特定することができる。SR において、Popeye の誤認逮捕は 8 月であると記されているが (SR 317)、SO では “It had been a gray summer, a little cool.” という記述から夏の出来事であったことまでしか絞ることができない (SO 287; SR 328)。また SR において、Red の殺害された日付は 6/17 (月) であり、この日付は Popeye の誤認逮捕の原因となった警官殺害の起きた日付と同じである旨が記されている (SR 317)。一方 SO においても、舞台となる年を特定する際に示したように、警官殺害の日付は 6/17 (月) であるが、これが Red の殺害と同日であるという記述はない (SO 285)。ただし SO における Red 殺害は、6/18 (火) に行なわれた Horace と Miss Reba の二度目の電話を踏まえると、6/17(月) か、それより前の出来事であることが伺える。この会話のなかで彼女は “They aint here no more,” (SO 260) と言っており、この時すでに Temple が Popeye と共に Miss Reba の元から消えていることが判るためである。SR のように 6/17 (月) と確定はできないため、本論の表では

不確実である旨を併記した。

Red の葬式の日付については、Brooks も *Reading Faulkner* も Red 殺害の翌日である 6/18 (火) としている。テキストに確定的な根拠が見られるわけではないが、より有力な可能性も指摘できないため、本論では SO も SR もこれらに従い、ただし不確定である旨を併記した。また Goodwin の裁判開廷の二日前に当たるこの 6/18 (火) には、SO においても SR においても、Jackson から Jefferson に戻ってきた Clarence が床屋で “Memphis jew lawyer” について文句を述べていたことが書かれている。これは “Two days before it opened” (SO 259; SR 279) という記述から確実である。

また、Luxembourg Gardens に佇む Temple の場面について、*Reading Faulkner* は秋の出来事として記しているが、SO においても SR においても、この場面は投獄された Popeye の場面と照応するように “It had been a gray day, a gray summer, a gray year.” (SO 287; SR 332) と記されており、本論では夏の出来事として表記した。

### 時系列の指標 (3)——5/19 (日)～6/16 (日)

SO と SR いずれのテキストにおいても、序盤と終盤に関しては、以上のように確定的な記述から大体の時系列を推論することが可能である。しかし Goodwin の逮捕から Narcissa の Eustace 訪問に至る中盤の展開については、確定的な記述が存在しない。Brooks は SR について、Jefferson の監獄に囚われた黒人死刑囚に関する記述から、彼の処刑が 5/25 (土) に行なわれたと推論することによって、中盤の前半の出来事の時系列を導き出している (390)。ここから Horace が Miss Jenny に対して Jefferson の住人たちの排他性について嘆き、Gowan から Narcissa に宛てられた手

紙を読んだ “Sunday” (SR 132) を 5/19 (日)<sup>94</sup>、Jefferson のホテルにいる Ruby が Horace を呼んで Temple のことを語った日を 5/24 (金)、Horace が Temple の所在を求めて Oxford に向かった日を黒人死刑囚の処刑が執行された当日 5/25 (土)と推論できるのである。

黒人死刑囚の処刑の日付を巡る Brooks の推論は、SR において彼の処刑が 5 月の土曜日に行なわれるという記述を利用している (SR 136-37)。この記述が SO には存在しないため、SR の推論をそのまま SO に適応することはできない。しかし SO においても Oxford の郵便局の局員が Temple について、SR と同様に “She quit school about two weeks ago.” (SO 153) と述べていることから、Horace が Ruby から Temple のことを聞き、Oxford で彼女の所在不明を知る一連の流れ自体は、Temple が Popeye によって Memphis まで連れ去られた 5/12 (日)から二週間が経過した 5 月の最終週の周辺で起こったことが判る。またここから SO の Horace が Miss Jenny に Jefferson の排他性について嘆き、Gowan の手紙を読んだ “Sunday” (SO 71) についても、5/19 (日) であると特定することができる。なお SO においても黒人死刑囚の処刑の執行日は、Horace が Oxford へ赴く日として描かれている。SR においても SO においても、Jefferson のホテルで Ruby から Temple について話を聞く前の夜、Horace はこの死刑囚について “He’s only got two days more.” (SO 77; SR 139) と述べているためである。ただしこの日が土曜日であると指定されていないため、SO では Horace が Ruby から Temple の話を聞いて Oxford を訪れる周辺の日付を特定することはできない。この黒人死刑囚の処刑の日付が確定できないことから生じる SO の時系列の振れ幅を、表 B では「X」と記号を付している。これは後述する Memphis の出来事の一部が、この時系列の振れ幅に連動しているためである。

Oxford から戻った直後の Horace の行動には、SO と SR でいくらか相違が見られる。SO の Horace は Oxford から Jefferson に戻って Ruby が Jefferson のホテルから追放されたことを知ったその日のうちに Sartoris 家へ行き (SO 195)、Narcissa から執拗に Kinston へ帰るよう諭され、次の日の朝には Sartoris 家から Benbow 家へ戻り、Ruby の匿われている家を探しはじめる。一方で SR の Horace は Oxford から Jefferson に戻って Ruby がホテルから追放されたことを知った 5/25 (土) の翌日、5/26 (日) に Sartoris 家へ行き (SR 190)、Narcissa から執拗に Kinston へ帰るよう諭され、その翌日 5/27 (月) の朝に Sartoris 家から Benbow 家に戻り、Ruby の匿われている家を探しはじめるのである。もし仮に Horace の Oxford 行き自体がふたつのテキストにおいて同じ日付だったとしても、彼が Jefferson に戻った日から、SO と SR の時系列には一日のズレが生じることになるのである。

この後、SO でも SR でも Sartoris 家を出た Horace は三日目に Ruby の匿われている街外れの廃屋に辿り着き (SO 189; SR 209)、その次の日に Benbow 家に電話を設置していると記述されるため (SO 200; SR 211)、ふたつのテキストにおける彼の行動のズレは持ち越される。SO では黒人死刑囚の処刑の日が確定しないため、中盤における SO と SR の時系列の照応はもとより不可能であるが、ここではこうした Horace の行動の一日のズレが解消される可能性のある時点が、Horace のもとに Clarence から Temple の情報について取引の電話が掛かる日である点を指摘しておきたい。SO においても SR においてもこの日付は “a week before the opening of Court” と記されているのだが、Goodwin の裁判に関わる日付は、先に見たように SO でも SR でも共通しているためである。Brooks はこの “opening of Court” が Goodwin の裁判の開廷する 6/20 (木) を指している

とすると、Horace が Temple の情報を得てから開廷までの出来事がまったく期間内に収まらなくなるために、この“opening”は Goodwin の裁判のための陪審員の選出や起訴手続きの開始を示すものと解釈している(391)。本論の表もこの解釈に従い、Clarence の取引の電話の日付が Horace の Benbow 家への電話設置の日付ではなく Goodwin の裁判に関する日付と結び付けられていることから、一日のズレが持続していたふたつのテキストの時系列にはこの日より照応の可能性が生じるものと判断し、あまりに不透明な SO の出来事を SR の日付に並列して記し、ただしあくまでそれらが便宜上の措置であり、正確な日付は不確定である旨を、振れ幅を示す形で併記することとした。この振れ幅も後述する Memphis の出来事の一部と連動するため、便宜上「Y」と記号を付している。

SR における Horace と Clarence の電話から Horace と Miss Reba の一度目の電話までの日付については、Brooks も *Reading Faulkner* も、Horace が Memphis で Temple から Old Frenchman Place の話を聞いて Jefferson へ戻った翌日が、Horace と Popeye の遭遇から四週間後であったという記述を文字通りに取って 6/4 (火) と規定することによって推論を行なっている (Brooks 389; Arnold and Trouard 249; SR 274)。また SO と SR いずれのテキストでも Red の葬式の後の場面において、Miss Reba は Popeye が Temple と Red に性交させ、それを観察するという行為を四日続け、その後一週間、彼女の娼館に現れなかったのだと述べている (SO 252; SR 273)。*Reading Faulkner* はこの一週間が Temple と Popeye が Grotto へ行く 6/17 (月) の前日 6/16 (日) まで続いていたと仮定し、Popeye が Temple と Red の性交を観察していた四日間を 6/6 (木) から 6/9 (日) までとすることで、Popeye が Temple と Red を観察しはじめるより先に行なわれたはずの Horace の Memphis 訪問の時期が、6/4 (火) から大きく

変動しないことを確認している (199)。仮に Clarence が Horace の電話設置の次の日に取引を提案してきたと考へても、また Horace の Memphis 訪問の翌日に Popeye が Temple と Red を観察しはじめたと考へても、Horace が Temple の情報を得て Memphis を訪問して嘔吐するまでの一連の流れは、前後二日ずつしか振れ幅を持たない。そのため本論では四週間後という記述を文字通りには取らず、Popeye の静動も含め、これらの出来事の振れ幅を表に併記することとした。この振れ幅も後述する Memphis の出来事の一部と連動しているため、便宜上「Z」と記号を付した。

SO のテキストには Horace が Benbow 家に電話を設置した日時を特定する記述がないために、Horace が Temple の情報を得てから Memphis を訪問し、Jefferson に戻るまでの三日間の振れ幅「Y」について、SR のようにその最も早い時期を推論することはほとんど不可能である。しかし Miss Reba による Popeye の行動への言及は SO にも記されているため、「Y」の振れ幅の最も遅い時期は割り出すことができる。SO においても Horace は、遅くとも 6/3 (月) に Clarence から情報を買ひ、6/5 (水) には Jefferson に戻ってきていたと絞ることができるのである。

いずれのテキストにおいても Horace は手紙を投函したのち、Jefferson の街なかで Narcissa と遭遇しているが、SO において彼らは会話しているのに対し (SO 255)、SR では Horace が一方的に彼女を見かけ、後を追うが見失うという展開に書き換えられている (SR 275)。また SR において Horace の Miss Reba への一度目の電話は “A week after his Memphis visit” (SR 281) の出来事であると記されているが、SO にはこの記述が存在しないため、便宜上 SR の日付に並列して記し、不確定である旨を併記した。

#### 時系列の指標 (4)——Memphis の出来事

Miss Reba の娼館における Temple の行動や、また彼女のことを知らずに同じ娼館をホテルと勘違いして泊り込んだ Virgil と Fonzo の行動、そして Temple や Virgil と Fonzo を探して移動を繰り返す Clarence の行動と、Memphis を巡る時系列に関して、正確なところは判然としない。SO と SR にもあまり記述の差がない部分だが、先述した Horace の行動との照応によって可能な範囲を特定することまでしか出来ない部分がほとんどである。

*Reading Faulkner* は、SR における Clarence の不可解な Memphis 訪問について指摘している (249)。6/3 (月) 付近に Temple を訪ねてきた Horace に対し、Miss Reba は Clarence について “He turned up here about two weeks ago . . . . Come in looking for two boys” (SR 218) と述べているのだが、6/3 (月) の二週間前である 5/20 (月) の時点では、ふたりはまだ Memphis に来て偶然 Miss Reba の娼館に宿泊することになっていないし、Clarence がそのように嘘をついて Temple を探しに来たと考えても早すぎるのだという (172)。この記述は時系列に矛盾を生むような性質のものではないため<sup>95</sup>、多少の偶然を補って受け入れることも可能もある。本論では Horace の Memphis 訪問が前後二日に渡って振れ幅をもっているため、二週間前の Clarence の Memphis 訪問にも同様の処理をし、振れ幅「Z」に連動する旨を記した。また SO にも Miss Reba が Horace に対して Clarence が二週間前に来たのだと語る同様の記述があるため、本論の表において、この部分は振れ幅「Y」に連動するものとして記している。

SR で Clarence が Temple の所在を知って Popeye にマッチで追い払われた日について、後日 Horace と取引をする際に、Clarence 自身が



)

“Couple days ago I come onto a piece of information which will be of value to you” (SR 214) と述べていることから、Brooks は 5/30 (木) 付近とし *Reading Faulkner* は 5/31 (金) としている。本論の表では *Reading Faulkner* に準じるが、Clarence と Horace の取引の日付が前後二日ずつ振れ幅をもつことから、この振れ幅「Z」に連動するものとして記した。また SO においても、この出来事は SR と同様に取引の二日前のものだと記されているため (SO 203)、振れ幅「Y」に連動するものとして扱っている。

)

SR における Virgil と Fonzo の行動について、Brooks は彼らが Memphis へ行く途上 Holly Springs で Clarence に遭遇した 5/25 (土)、また彼らが Memphis で Clarence と遭遇した日を 6/8 (土) とする以外は、論考の中で触れていない。*Reading Faulkner* は Virgil と Fonzo が Memphis で Clarence と遭遇した日を 6/7 (金) と記している他、彼らが Memphis 到着後三日目に Miss Reba から昼間だけ部屋を貸してくれと頼まれる日を 5/28 (火) とし、十二日目に彼らが他の学生に別の娼館へ案内される日を 6/5 (水) としている。SR に関して Virgil と Fonzo の Memphis 到着を 5/25 (土) と考えるのであれば、*Reading Faulkner* が示すように三日後を 5/28 (火) とすることに異存はない。SO に関してこの日付は、Horace が Oxford へ行く日付と連動しているため、本論の表 B では、振れ幅「X」に連動する旨を示した。SR における十二日目は単純計算では 6/6 (木) となるが、Fonzo が Baptist の “prayer-meeting” に言及していることから、*Reading Faulkner* は 6/5 (水) としている (164)。本論では SR におけるこの日付を確定せず、二日間の振れ幅をもたせて記述することとした。一方 SO ではこの十二日目も振れ幅「X」に連動する。Clarence が Memphis で Virgil と Fonzo に遭遇する日付は、いずれのテキストにおいても十二日目から “two nights” (SO 192; SR 207) 経った日のことと記されているため、SR

)

では Brooks の 6/8 (土) と *Reading Faulkner* の 6/7 (金) という推論をちょうど振れ幅として記した。SO においてはこの日付も振れ幅「X」に連動するものとして記している。

表 B における SO と SR それぞれの時系列の根拠を述べる以上の記述からは、SO から SR への改稿の際に、Faulkner が時系列の把握に寄与する記述を、特に中盤の展開のなかにいくつか書き足していることが判る。具体的にいえばそれは黒人死刑囚の死刑が執行される曜日であり、また Horace が Popeye と出会ってから Temple に出会うまでの四週間という期間である。

Horace の意識を辿った回想が頻出するために時系列の把握の困難な SO にこそ、これらの記述は必要であるようにも思われるが、ともかく Faulkner は *Sanctuary* 改稿のなかで作中の出来事の順序を練り直すにあたって、作中の出来事の時系列を辿り直し、先に挙げたような記述を加筆したということが伺えるのである。

## 注

1. この言葉は 1947 年の Mississippi 大学では “Good God! We can’t print this. We would both be put in jail” という言葉で、1955 年の長野では “Good Lord, we can’t print this, we’d both be in jail!” という言葉で、また 1957 年の Virginia 大学では “Good Lord, if we print this, we’ll both be in jail” という言葉で表現されている (Faulkner, *Lion* 54, 122-23; Faulkner, *Faulkner* 91)。これらは本作の “horrific” な内容への否定的な反応とも読めるが、Faulkner の literary agent であった Ben Wasson は、本作の筋書きが手紙で送られてきた際に Smith が発した肯定的な反応として、以下のように書いている。 “Good God, I’d be thrown in jail if I published anything like that. But I’ll publish it undoubtedly. Tell him to go ahead and write it.” (98)

2. “the most horrific tale I could imagine” (vi)

3. 実際に Faulkner の第二長篇 *Mosquitoes* (1927) は猥雑文書として Boston で発禁を受けており、亀井はこの前例が 1929 年時点での *Sanctuary* 出版への躊躇に影響したことを指摘している (174-75)。また Wasson は、*Sanctuary* もまた Boston で発禁を受けたために、さらに話題となって売れたのだと記している (104)。

4. *Sanctuary* が 1929 年でなく 1931 年に出版されたことについて、1947 年の Faulkner は Mississippi 大学で “The blood and guts period hadn’t arrived yet. After the first ones began to sell, they wanted to publish *Sanctuary*.” (*Lion* 54) と語っている。たしかにハードボイルド小説の勃興と *Sanctuary* の出版に至るまでは、大枠としては時期を同じくしている (諏訪部『ノワール』3)。SR がベストセラー入りを果たしたことも、

この種の暗黒小説が読者に受け入れられる素地が出来ていたことと無関係ではなかっただろう (諏訪部『ノワール』182)。ただし SO がハードボイルド小説の勃興に先駆けていたために出版されなかったのだとする Faulkner のこの発言は、多分に後知恵的なところがあり、事情の完全に正確な説明とは言えない。Dashiell Hammett の長篇第一作 *Red Harvest* は SO が書き上げられる 1929 年 5 月の三ヶ月前、2 月には出版されており (ノーラン 104)、またこの作品が 1927 年 11 月から翌年 2 月まで連載されていた *Black Mask* 誌を筆頭とする pulp magazine は、1920 年代からこの種の物語を多く掲載し、大衆に読まれていたからである (シモンズ 203-05)。

5. “I think I had forgotten about *Sanctuary*” (vii)

6. “I saw it was terrible” (vii)

7. “It had been already set up once, so I had to pay for the privilege of rewriting it” (vii-viii)

8. こうした評については O. B. Emerson の *Faulkner's Early Literary Reputation in America* も参照 (18-19, 57, 68, 70, 73)。

9. ただし ML 序文末尾には “New York, 1932” と Modern Library 版の出版年が記されている (viii)。

10. “To me it is a cheap idea, because it was deliberately conceived to make money.” (v)

11. Cowley は序文で *Sanctuary* について、最も暴力的で最も有名な小説だが、Faulkner が序文のなかで金を得るため計画的に構成された “cheap idea” だと説明しているからといって、決して最も重要性に乏しい作品ではないと書き、Popeye の描写に旧南部を蹂躪した機械文明の象徴を読み取ることで、主に Temple の物語の意義を強調している (14-15)。

12. “something which would not shame *The Sound and the Fury* and *As I Lay Dying* too much” (viii)

13. “he waved a deprecatory hand and told how he had debased his art by writing the book for money” (198)

14. “a book that had been dashed off in an incredibly short space of time” (202)

15. Alderman 図書館への原稿の収蔵時期については『フォークナー事典』(717)を参照。また菊池(「未改訂」2)、Langford (5)も参照。

16. “I . . . wrote it in about three weeks” (vi)

17. Polk (“Afterword” 294-95, “Introduction” vii) や、Blotner (236)を参照。また菊池の「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究(I~XI)」は、SO と SR だけでなく、SO の手稿とタイプ稿のあいだに認められる推敲の痕跡を、作品全篇に渡って詳細に記録している。

18. “it was so badly written, it was cheaply approached” (Faulkner, *Lion* 123)

19. “the base and cheap one” (Faulkner, *Lion* 124)

20. “that book was basely conceived” (Faulkner, *Faulkner* 90)

21. “I saw what a base thing it was in concept, what a shabby thing it was” (Faulkner, *Faulkner* 91)

22. “Before we can satisfactorily judge whether *Sanctuary* was a careless potboiler turned into a respectable book through reworking, we need a detailed examination of the two texts.” (5)

23. また Madden は Horace と Popeye を関係づける描写においても SO に軍配をあげる (103)。

24. Moulinoux の “*Sanctuary Revisited*” は SO と SR の品詞レベルの

差異を分析して興味深い。

25. Goodwin のリンチについては Massey (204)、Beck (194-95)、小山 (52) を参照。また Popeye の来歴については Langford (23)、Beck (200-01)、Sundquist (48-49) を参照。

26. Horace の内面や過去については Massey (202-03)、Millgate (115, 117)、Langford (10-11)、Polk (“Afterword” 300, “Introduction” ix)、Beck (193)、Bleikasten (217-18)、小山 (48-49)、山下 (44-45) など、多くの比較研究が言及している。また Sartoris 家については Langford (25-28)、小山 (54-56, 59)、Bleikasten (218) を参照。

27. Polk (“Introduction” viii-ix) を参照。SR は Temple を主軸にした物語だともいわれるが (Massey 202-03, Millgate 115-16)、人物の現前の後退がその人物の重要性を高める場合があるという諏訪部の主張などを鑑みても (『詩学』111-12)、SR は Horace の物語と Temple の物語が並置されたものと見るべきであるように思われる。

28. SR の時系列については Brooks (387-91)、*Reading Faulkner* (Arnold and Trouard 249-53) を参照。

29. たとえば Massey (202-04)、Millgate (116-17)、Langford (28-29)、Polk (“Afterword” 300-01)、Beck (193)、山下 (44) を参照。

30. SO の冒頭については Polk (“Afterword” 301-02) を参照。SR の冒頭については Polk (“Afterword” 303-04) や田中 (173-74) を参照。

31. たとえば Millgate は、暴力的な場面の多い Temple の物語が削られていないのだから、Faulkner の改稿の意図が “horrible” な部分の削減にあったわけではないと述べる (115)。

32. Temple 主体の章に差異がほとんど存在しないことから、たびたび議論される Temple の偽証の背景などについて、本論では触れること

が出来ない。この議論については、たとえば Brooks (121-27)、西山 (102-07) を参照。

ただし、序論の 2 節で論じたように、1931 年に書かれた ML 序文を 1929 年時点の Faulkner の SO への姿勢と同一視しない方針をとる本論は、*Sanctuary* における Temple と “evil” の関係についても、基本的に同様の方針をとることを付言しておく。すなわち、*Sanctuary* の続篇として位置付けられる 1951 年発表の *Requiem for a Nun* において、Temple は Old Frenchman Place への闖入を発端とする自身の破滅を招いた振るまいについて “Because Temple Drake liked evil.” (135) と反省的に述べており、Brooks や西川はこの台詞を根拠として遡及的に *Sanctuary* の彼女を “evil” な人物と位置付けているのだが (Brooks 131; 西川 107)、本論はそうした姿勢をとらない。

33. Polk は Horace の意識と溶け合う SO の特異な語りに意識的であり (“Afterword” 300, “Introduction” ix, “Space” 106)、またこうした SO の語りを「和らげられた (modified)」Horace の「意識の流れ (stream-of-consciousness)」とも呼んでいる (“Afterword” 300-01)。*Sanctuary* における Horace の「意識の流れ」については山下 (44) も参照。

34. 菊池は改稿において Temple の Old Frenchman Place における経験の時系列が入れ替えられた理由について、Temple の物語を主軸に描き直すためだと述べている (「手稿本 (V)」10-11)。

35. 山下 (54-55)、菊池 (「手稿本 (VII)」51)、Moore (23) を参照。ただし Moore は *Sanctuary* が基本的には作中の登場人物でない語り手によって語られる三人称の作品であることを軽視しており、Temple を描く章が彼女の内面にほとんど触れない理由を、Temple 自身の内省や記憶力の欠如によって説明する。菊池の主張も類似している。また SO の 14 章

と、対応する SR の 18 章において、語りが Miss Reba の娼館の一室に横たわる Temple の時間について夢想する内面を捉える場面が存在することも確かである。

36. 菊池（「手稿本 (VII)」55-56）を参照。

37. Brooks も *Reading Faulkner* の記述も、Virgil と Fonzo の Memphis 滞在や Clarence の行動の時系列には保留をつけている。“... [Clarence] Snopes would have first come to Memphis around Monday, May 20 . . . before Virgil and Fonzo even arrive in Memphis . . . and before Clarence has any reason to be looking for Temple. Obviously a choice has to be made here, and not all of the events can be thoroughly explained (Brooks omits Clarence's early visits and much of Virgil and Fonzo's adventures from his Chronology). In other words, the Chronology which follows makes certain assumptions which seem best supported by our reading of the story.” (Arnold and Trouard 249-50)

38. 約二週間の出来事が描かれている Virgil と Fonzo の章を一週目と二週目のふたつに分割し、後半を SR の 26 章の途中に挟み込むなどすれば、一応は Clarence の行動を時系列の通りに描くことは可能である。

39. 登場人物と読者の状況認識に差を作る手法について、喜志は William Shakespeare の演劇を例に、Bertolt Brecht の異化効果を援用して詳細に論じている。特に 3 章を参照 (113-14)。

40. *Sanctuary* が同時代の推理小説、特にハードボイルド小説の影響を受けていることについては、Fiedler や (84-86)、Bleikasten (219) を参照。Kerr は Northrop Frye を引いて、推理小説が現行の秩序を保守する物語であるという点から、*Sanctuary* の推理小説的な構成は SO よりも SR において顕著であると述べている (82, 100-01)。この指摘は小山が SR を



SO 以上に社会的な主題を描いた物語であると論じたことと重なっており (61)、主題的な面からいえば妥当な分析である。本論の主張はこうした批評と相反するものではなく、手掛かりを探偵役の視点から積み重ねることによって探偵役の世界認識の統合を目指す推理小説のプロットの手法を踏襲しているのは SO であり、SR はこれを破棄することによって、SO とは異なるプロット構成を体現することになった点を論じている。

41. “I passed out twice, he said. *I passed out twice.*” (SO 114, SR 90)

42. 間接的には Little Belle への意識も含まれるだろう。Horace のなかで Temple と Little Belle が処女性を失う点で重なっていることについては、たとえば菊池や (「未改訂」10)、McHaney (240) を参照。

43. 序論で述べたように Massey の批難は SO の複雑な構造が意図的に構成されたものであることを前提としていない点で問題がある。また Millgate は語りの恣意性を指摘しているにも拘らず、その恣意性の目的を検討していない点に問題がある。

44. “little faint sounds, from the shucks” (SO 113)

45. “she could hear him breathing beside her” (SO 136)

46. “Touch me. Touch me! You’re a coward if you don’t. Coward! Coward!”, “You’re a coward if you don’t! You’re a coward if you don’t!” (SO 216) “Coward! Coward! Touch me, coward!” (SO 217)

47. SR に「語り直し」が多用されていることについては山下 (59-61) を参照。

48. 序論の 2 節、3 節で挙げているが、特に Millgate (117)、Langford (10-11)、Beck (193) を参照。

49. 序論の 2 節で挙げているが、特に Langford (11, 20, 23)、菊池 (「未改訂」12)、Madden (96-98) を参照。

50. Horace が Belle に離婚の決意を伝える方法に手紙を選んだことは、SO においても SR においても、直前の場面で Gowan が Narcissa に別れを告げる手紙を読んでいたことが影響していると考えられる。

51. SO の 6 章に言及しない菊池は、SO の当該場面で Horace に手紙を書かせた直接の原因を、直前に描かれた Snopes の俗物性であると説明している（「手稿本 (VIII)」6）。

52. SO では “without any hill save a few bumps of earth which Indians had built to stand on when the River overflowed” (SO15-16) また SR では “without any hill save the bumps of dirt the Indians made to stand on when the River overflowed” (SR 16)

53. この “hill” にはアメリカの理想を表現する “City upon a Hill” への含意や、*Divine Comedy* の第一歌の冒頭で Dante が目指そうとする光の射す丘 (Lyday 243-45)、また Faulkner の初期散文 “The Hill” や未発表原稿 “Nympholepsy” に表現されている現実社会に対する聖域にも似た丘に通じる意味が重ねられていると考えられ、Horace にとっての理想的な空間を象徴していることが伺える。

54. Faulkner の作品において水に濡れることの性の問題が結びついていくことについては、菊池「Sanctuary における「レインコート」と「水筒」のイメージリーについて」(63) を参照。

55. “I have injured no one save myself by my folly” (SO 73, SR 135)

56. SR のリンチを Horace の象徴的殺害として捉えるならば、Horace がリンチに巻き込まれる直前、列車を待つために案内されたホテルの「見本部屋 (Sample Room)」という場所は、31 章で死刑に処されるまで Popeye の過ごしていたような、Horace が死を待つための監獄に相当することになる (SR 309)。

57. 1章1節でも挙げたが、Polk (“Afterword” 300-01, “Introduction” ix, “Space” 106)、山下を参照 (44)。

58. 大橋は SR のテキストにも Horace の認識の残滓が「尾骶骨」として確認できることを述べ、これを重視しているが (354-59)、本論はテキストの入れ替えによって Horace が語り手から切り離され、他の登場人物たちと相対化されたことによって、物語の構成そのものが単声的な構造から多声的な構造に根本的な変化を遂げたことを重視する。

59. SO の対応する箇所は Narcissa の台詞に若干の違いがある。以下の引用の下線部を参照。“But to walk out just like a nigger . . . . And then to mix yourself up with moonshiners and street-walkers. Why do you do such things, Horace?” (SO 46)

60. “the only one of them who appeared able to meet him on any mutual human ground: that trivial contact of similar experiences which produces conversation” (SO 48-49)

61. “You can quit. I’ll take you back to Memphis Sunday. You can go to hustling again. . . . You’re getting fat here. Laying off in the country. I wont tell them on Manuel street.” (SR 9) “Sure . . . I wont tell them on Manuel street that Ruby Lamar is cooking for a dummy and a feeb too.” (SR 11)

62. 菊池は SR において Ruby の罵りが加筆されたことを、「Horace 一人に喋らせたのでは記述が平板にならざるをえず、それを避けるために、所々に Ruby の感想を挿入したという純然たる技巧上の理由による」と書き、また続けて SO の主題は「愛」であるため、SO の Ruby は Horace が「愛」について語ることを真剣に聞いていたのだとも述べる (「手稿本 (III)」110-12)。

63. “lurid accounts of arson and adultery and homicide” (SO 44)

64. *Flags in the Dust* において、新聞を読む様子が語られる人物は Miss Jenny であった (35)。世代を下った行為の反復となっているが、SO ではその行為が意味を変えて、Horace の Narcissa に対する否定的な印象を示すために用いられていることが重要である。こうした SO に対する *Flags in the Dust* の影響については、本論 5 章に詳述する。

65. *Reading Faulkner* は、この “Like Christ he looked” の主語を Tommy であるとしている (Arnold and Trouard 18)。Langford や (9)、Moulinoux (16) も同様である。

66. Tommy を殺害する Popeye は SO でも SR でも悪態をつくたびに “Jesus Christ”, “For Christ’s sake” と繰り返し、また SO では Tommy 自身によって “Preacher” (説教者／伝道者) に喩えられるため (SO 49)、SO において “Christ” を介した Tommy と Popeye の関係は SR 以上の響きを持つことになる。SO と SR 共に、Popeye が Tommy の飼い犬を撃ち殺すことが彼の Tommy 殺害の予示になっていることについては、McHaney を参照 (228)。両作において Tommy だけでなく Popeye 自身もまた犬に擬されていることは興味深い (SO 49; SR 113)。

SO には Popeye が Old Frenchman Place の周囲を出歩く際、他人に灯りを持たせて連れてゆきたがると記述されているが、SO でも SR でも、Popeye が実際に灯りを持たせようとする相手は Tommy ひとりに限定されており、結局 Popeye は Tommy に拒否され嘲笑される (SO 49, 53; SR 112)。Gowan と Van の喧嘩を止めるよう Goodwin に言われた Tommy が Popeye に殴り掛かるというコミカルな場面もふたりの確執を示しているだろう。Beck のように Tommy を “pure innocent” と規定する解釈は (196)、このようにふたりのあいだで激化していた確執や、ふたりの加害・被害に留まらない両義的な力関係を軽視しているように思われる。

67. たとえば Langford (23-25)、Beck (200)、Sundquist (48-49) を参照。

68. SO の 10 章の途中を SR の 9 章と 11 章に区切る際に “She” が “Temple” に置き換えられ (SO 114, SR 91)、SO の 11 章の途中を SR の 8 章と 13 章に区切る際に “He” が “Tommy” に置き換えられ (SO 138, SR 104)、SO の 17 章の途中を SR の 20 章と 22 章に区切る際に “he” が “Horace” に置き換えられている (SO 199, SR 209)。

69. SO の 6 章には “He” と書かれていた箇所が、対応する SR の 17 章では “Tommy” に置き換えられ (SO 75, SR 137)、SO の 12 章には “he” と書かれていた箇所が、対応する SR の 19 章では “the other passenger” に置き換えられ (SO 154, SR 181)、SO の 24 章には “He” と書かれていた箇所が SR の 28 章では “The District Attorney” に置き換えられている (SO 276, SR 301)。

70. SO にも SR にも、会話文のなかには Horace や Temple が Popeye のことを “black man” と呼ぶ箇所が存在する (SO 91; SR 43. SO 97; SR 52. SO 217; SR 231. SR 113)。

71. “like the shadow of something no larger than a match falling monstrous and portentous upon something else otherwise familiar and everyday and twenty times its size” (SO 9)

72. SO において泉の “the man” の名前を Popeye と明かす部分は、Popeye にぎこちなく自己紹介などをさせることなく、回想を用いた迂遠な方法が用いられている。SO の泉の場面の中には、それより後の出来事である Horace と Ruby のホテルでの会話が回想的に挿入されており、そこに Popeye の名前が登場するのだが、この回想の場面から泉の場面に語りに戻ると同時に、それまで “the man” と呼ばれていた Popeye は、

)

回想での表記を引き継いで Popeye と呼称されるようになるのである。 Temple が連れて来られた Memphis の娼館で Miss Reba と出会う場面においても同じ方法が取られており、この場面は SR でも保存されている。

73. たとえば Polk を参照 (“Afterword” 302-04, “Space” 118-19)。

74. たとえば Brooks (137-38)、菊池 (「未改訂」 11-12) を参照。

)

75. Popeye の不能の真偽については、Christmas に生まれていることから Popeye の書き直しだともいわれる Joe Christmas の混血が、*Light in August* の執筆当初は事実として記されていたが、Faulkner が途中からそれを無根拠の曖昧なものとして扱われるよう加筆したという経緯を考え合わせると、なお興味深い (平石, 『小説』 95-96)。

76. テクストが移動すると同時に、引用部の “day after day” が削除され、SR では代わりに “like the children which beggars on Paris streets carry” という表現が加筆されている。

)

77. SO では “Some day, perhaps……. Or maybe I can do something for you in town? Send you something by the…….” (SO 57) また SR では “Maybe I can do something for you in Jefferson. Send you something you need…….” (SR 19-20)

)

78. Rousselle (125)、菊池 (「未改訂」 11-12) を参照。菊池は SO からは Ruby の手が荒れていることが判るが、SR の記述からはこのことが読みとれないと主張している。しかし orange stick への言及の直前、SR では手を隠す描写が二度繰り返されることから、SO と同様に、彼女が自身の手を好ましく思っていないと読みとることは可能である (SR 19)。

79. Skei は “There Was a Queen” の原稿の存在を確認できる最も古い時期を 1929 年の 7 月としている (36)。

80. “a couple of equestrian statues” (SO 34)

81. “a flat thing like a barrel stave” (SO 34)

82. SR には Miss Jenny が Narcissa の息子を Benbow や Bory と呼んでいる場面も存在しない。SR においてこの問題は解消したのではなく、単に描写されなくなっていることが判る。

83. “Miss Jenny was eighty-nine. Five years ago she had had a mild stroke. Since then she had spent her days in the wheel chair beside a window which looked down into the garden, carried up and down stairs, chair and all, by two negroes. Sometimes she slept in it.” (SO 7)

84. “a woman of ninety, who lived in a wheel chair, who was known as Miss Jenny” (SR 24)

85. SR において Miss Jenny と Horace が未亡人である Narcissa の二度目の結婚について語るのは作中現在だが、もともと SO において、この会話は前年の 10 月の場面に描かれていた (SO 35; SR 24)。

86. “There Was a Queen” における Miss Jenny、すなわち Virginia Du Pre は、Narcissa の再婚する可能性について考えながら “I wouldn’t have her do as I did. Would not expect it of her. Afer all, she is not a Sartoris” と思ひ、また Narcissa が Sartoris 家の夕食に呼んだ相手が北部のユダヤ人だったと判明すると食事への同席を拒否した過去を語られることで、伝統的な旧家 Sartoris 家のあるべき姿に固執する人物として描かれている (220-21)。

87. SR ではこの台詞の後に “Go back to Belle . . . . Go back home.” と、より直接的な言葉が加筆されている (SR 136)。

88. *Flags in the Dust* で Narcissa は Horace が「レインコート」を持っていなかったことを責めているが、SO において、Narcissa は Horace が「傘」を持っていなかったことを責めている。SO 執筆時の作者が記憶に

頼って品物を取り違えた可能性もあるが、SOでもSRでも、レインコートは Temple が Old Frenchman Place で男たちから身を守ろうという意志で羽織るものであり、重要な意味を担っているために、SO執筆時の作者があえて重複を避け、「傘」に変更した可能性も考えられる。Temple がレインコートを着る意味については菊池「Sanctuaryにおける「レインコート」と「水筒」のイメージラリーについて」(64)を参照。

89. 本論 2 章 2 節でも挙げたが、Faulkner の作品において水に濡れる登場人物と彼らの性の主題が関係していることについては、菊池「Sanctuaryにおける「レインコート」と「水筒」のイメージラリーについて」(63)を参照。

90. Faulkner の作品において、パノラマ視点は執筆時期に近い *The Sound and the Fury* や *As I lay Dying* でも使用されており、また平石が『メランコリックデザイン』において初期作品の語りの構造について指摘しているように (38-39, 42, 61, 184-86)、語り手と登場人物の位相の違いを利用したこの種の語りは Faulkner の基本的な技法であり、当然 SR において初めて採用されたものではない。本論では結論 3 節において最終的に述べるように、この方法が SO のテキストから SR のテキストを再構成する際に、*Sanctuary* という物語に適用されたことを重視する。

91. 大橋は SR の語りにも残る Horace の「尾骶骨」を問題化しており (354-59)、また寺沢は Horace と Faulkner の価値観に大差がないという前提に則って本作の倫理観を批判しているが (108-09)、本論では SO から SR において語りが構造的に大きく変化したことを重視し、Horace と語り手の関係の差異からふたつのテキストを差別化する。

92. 並木は “hard-bellied”, “hard-gutted” といった造語や “mss.” といった業界用語をちりばめた ML 序文の文体は、作品のハードボイルド



的な側面を意図的に演出するものだと指摘する (263)。一時的な目的のために作って成果の出なかったもののように SO のことを忘れていたという本作への無関心を強調する言葉 (vii)、また SO を実際よりも短い三週間で書き上げたと誇張する言葉もまた、作者の本作への無造作な印象を強めており、やはり作品のハードボイルド的な側面を演出する意図が含まれているように思われる。

93. “Two days. Or three at the most, with your kind assistance.” (SO 258; SR 278)

94. Brooks はこの日を 5/18 (土) と記しているが、McHaney が指摘するようにこれは Brooks の “errors” のひとつであり (230)、本文に “Sunday” (SR 132) と明記されている以上、5/19 (日) と考えるより他ないだろう。

95. Brooks は矛盾を生むような性質の記述として、Narcissa が Eustace に三日前 Clarence から電話があったと発言する場面を挙げ、Horace が Clarence から Temple の情報を得て Memphis へ行き、Jefferson に戻ってくるまでは確実に二日間だが、Narcissa の台詞はこれと矛盾する誤記であると指摘している (Brooks 390-91; SO 258; SR 278)。

## 引用文献

- Arnold, Edwin T. and Dawn Trouard. *Reading Faulkner: Sanctuary*. U of Mississippi P, 1996.
- Beck, Warren. "Transformation of *Sanctuary*." *Faulkner: Essays*, U of Wisconsin P, 1976, pp. 191-213.
- Bleikasten, André. "The Most Horrific Tale." *The Ink of Melancholy: Faulkner's Novels from the Sound and the Fury to Light in August*, Indiana UP, 1990, pp. 213-20.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography, One-Volume Edition*. 1984. Random House, 1991.
- Brooks, Cleanth. "Discovery of Evil." *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*, Yale UP, 1963, pp. 116-40.
- Cowley, Malcolm. Introduction. *The Portable Faulkner*, by William Faulkner, Viking Press, 1946, pp. 1-24.
- Emerson, O. B. *Faulkner's Early Literary Reputation in America*. UMI Research Press, 1984.
- Faulkner, William. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. Edited by Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, U of Virginia P, 1959.
- . *Flags in the Dust*. Edited by Douglas Day, Random House, 1973.
- . Introduction. *Sanctuary*, Modern Library ed., Random House, 1932, pp. v-viii.
- . *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962*. Edited by James B. Meriwether and Michael Millgate, Random House, 1968.

- . *Requiem for a Nun*. Random House, 1951.
- . *Sanctuary*. 1931. Random House, 1987.
- . *Sanctuary: The Original Text*. Edited by Noel Polk, Random House, 1981.
- . "There was a Queen." *Selected Short Stories of William Faulkner*, Random House, 1961, pp. 210-29.

Fiedler, Leslie. "Pop Goes the Faulkner: In Quest of *Sanctuary*." *Faulkner and Popular Culture*, edited by Doreen Fowler and Ann J. Abadie, U of Mississippi P, 1990, pp. 75-92.

Hamblin, Robert W. *Myself and the World: A Biography of William Faulkner*. U of Mississippi P, 2016.

平石貴樹『メランコリックデザイン——フォークナー初期作品の構想』南雲堂. 1993.

---.『小説における作者のふるまい——フォークナー的方法の研究』松柏社, 2003.

亀井俊介『ピューリタンの末裔たち——アメリカ文化と性』研究社, 1987.

Kerr, Elizabeth M. "Sanctuary: The Persecuted Maiden, or, Vice Triumphant." *Modern Critical Interpretations: William Faulkner's Sanctuary*, edited by Harold Bloom, 1988, pp. 81-101.

菊池昭「未改訂 *Sanctuary* における Horace Benbow の incestuous な感情をめぐる問題」『ウィリアム・フォークナー』1巻1号, 南雲堂, 1978, 1-22頁.

---.「*Sanctuary* における「レインコート」と「水筒」のイメージリーについて」『小樽商科大学人文研究』56号, 1978, 53-68頁.

---.「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (I)」『小樽商科大学人文研究』59号, 1979, 167-96頁.

- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (II)」『小樽商科大学人文研究』60号, 1980, 73-90頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (III)」『小樽商科大学人文研究』61号, 1980, 101-20頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (IV)」『小樽商科大学人文研究』63号, 1982, 51-70頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (V)」『小樽商科大学人文研究』64号, 1982, 1-19頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (VI)」『小樽商科大学人文研究』67号, 1984, 1-18頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (VII)」『小樽商科大学人文研究』70号, 1985, 41-61頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (VIII)」『小樽商科大学人文研究』71号, 1986, 1-20頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (IX)」『小樽商科大学人文研究』73号, 1987, 75-100頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (X)」『小樽商科大学人文研究』75号, 1988, 1-22頁.
- . 「手稿本によるオリジナル版 *Sanctuary* の研究 (XI)」『小樽商科大学人文研究』77号, 1989, 1-27頁.

喜志哲雄『シェイクスピアのたくらみ』岩波書店, 2008.

小山敏夫「フォークナーの *Sanctuary* 改作をめぐって」『外国語・外国文化研究』2号, 1975, 47-65頁.

Langford, Gerald. Introduction. *Faulkner's Revision of Sanctuary: A Collation of the Unrevised Galleys and the Published Book*, U of Texas

- P, 1972, pp. 3-33.
- Lyday, Lance. "Sanctuary: Faulkner's *Inferno*." *The Mississippi Quarterly* 35.3, 1982, pp. 242-53.
- Madden, David. "Photographs in the 1929 Version of *Sanctuary*." *Faulkner and Popular Culture*, edited by Doreen Fowler and Ann J. Abadie, U of Mississippi P, 1990, pp. 93-109.
- Massey, Linton. "Notes on the Unrevised Galleys of Faulkner's *Sanctuary*." *Studies in Bibliography* 8, 1956, pp. 195-208.
- Matthews, John T. "The Elliptical Nature of *Sanctuary*." *Novel: A Forum on Fiction* 17.3, 1984, pp. 246-65.
- McHaney, Thomas L. "*Sanctuary* and Frazier's *Slain Kings*." *The Mississippi Quarterly* 24.3, 1971, pp. 223-45.
- Meriwether, James B. "The Manuscript of Faulkner's Introduction to *Sanctuary*." *The Mississippi Quarterly* 36.3, 1983, pp. 475-81.
- Millgate, Michael. "*Sanctuary*." *The Achievement of William Faulkner*, Random House, 1966, pp. 113-23.
- Moore, Gene M. "The Narrative Surface of *Sanctuary*." *Etudes Faulkneriennes I: Sanctuary*, edited by Michel Gresset, Presses universitaires de Rennes, 1996, pp. 21-25.
- Morell, Giliane. "The Last Scene of *Sanctuary*." *The Mississippi Quarterly* 25.3, 1972, pp. 351-55.
- Moulinoux, Nicole. "*Sanctuary* Revisited." *Etudes Faulkneriennes I: Sanctuary*, edited by Michel Gresset, Presses universitaires de Rennes, 1996, pp. 13-20.
- 並木信明 「フオークナーの *Sanctuary* と *The Sound and the Fury* の序文に

- について」『専修人文論集』99号, 2016, pp. 261-85.
- 日本ウィリアム・フォークナー協会 編『フォークナー事典』松柏社, 2008.
- 西山保「『サンクチュアリー』——悪のパターン」『ヨクナパトーフア物語——私のフォークナー』古川書房, 1986, 93-112頁.
- ノーラン, ウィリアム・F『ダシール・ハメット伝』小鷹信光 訳, 晶文社, 1988.
- 大橋健三郎「現実の深淵——『聖域』」『フォークナー研究2——「物語」の解体と構築』1979.『ウィリアム・フォークナー研究』南雲堂, 1996, 353-83頁.
- Polk, Noel. Afterword. *Sanctuary: The Original Text*, Random House, 1981, pp. 293-306.
- . "Faulkner in the Luxembourg Gardens." *Etudes Faulkneriennes I: Sanctuary*, edited by Michel Gresset, Presses universitaires de Rennes, 1996, pp. 27-34.
- . Introduction. *Sanctuary: Vol. 1, The Holograph Manuscript and Miscellaneous Pages*, edited by Polk, Garland Publishing, 1987, pp. vii-xi. *William Faulkner Manuscripts* 8.
- . "The Space between *Sanctuary*." *Modern Critical Interpretations: William Faulkner's Sanctuary*, edited by Harold Bloom, 1988, pp. 103-19.
- Rousselle, Melinda McLeod. *Annotations to William Faulkner's Sanctuary*. Garland, 1989.
- シモンズ, ジュリアン『ブラッディ・マダー ——探偵小説から犯罪小説への歴史』宇野利泰 訳, 新潮社, 2003.
- Skei, Hans H. *William Faulkner: The Short Story Career*. Universitetsforlaget,

1981.

Sundquist, Eric J. "Sanctuary: An American Gothic." *Faulkner: The House Divided*, Johns Hopkins UP, 1983, pp. 44-66.

諏訪部浩一「「母」から「父」へ——『サンクチュアリ』『ウィリアム・フォークナーの詩学 1930 - 1936』松柏社, 2008, 109-84 頁.

---. 『ノワール文学講義』研究社, 2014.

田中久男「巨大な麻痺と倒錯現象——『サンクチュアリ』『ウィリアム・フォークナーの世界——自己増殖のタペストリー』南雲堂, 1997, 171-90 頁.

寺沢みづほ「瀕死の花、瀕死の秩序、瀕死の「男」——『サンクチュアリ』考」『民族強姦と処女膜幻想——日本近代・アメリカ南部・フォークナー』御茶の水書房, 1992, 105-52 頁.

Wasson, Ben. *Count No'Count: Flakback to Faulkner*. U of Mississippi P, 1983.

山下昇「最も暗い小説の対照法——『サンクチュアリ』『1930年代のフォークナー——時代の認識と小説の構造』大阪教育図書, 1997, 43-65 頁.

## 参考文献

- Faulkner, William. "The Hill." *William Faulkner: Early Prose and Poetry*, edited by Carvel Collins, Little Brown, 1962, pp. 90-92.
- . "Nympholepsy." *A Faulkner Miscellany*, edited by James B. Meriwether, U of Mississippi P, 1974, pp. 149-55.
- . *The Sound and the Fury*. 1929. Penguin, 1970.
- フォークナー, ウィリアム 『八月の光』 上下巻, 諏訪部浩一 訳, 岩波書店, 2016.
- . 『駒さばき』 山本晶 訳, 富山房, 1978.
- . 『サートリス』 斎藤忠利 訳, 富山房, 1978.
- . 『死の床に横たわりて』 佐伯彰一 訳, 講談社, 2000.
- ハメット, ダシール 『マルタの鷹』 小鷹信光 訳, 早川書房, 2012.
- 石原千秋 『読者はどこにいるのか——書物の中の私たち』 河出書房新社, 2009.
- ラフリー, ジョン 『別名 S・S・ヴァン・ダイン——ファイロ・ヴァンスを創造した男』 清野泉 訳, 国書刊行会, 2011.
- 日本ウィリアム・フォークナー協会 編 『フォークナー 第13号——特集: フォークナーとミステリー』 松柏社, 2011.
- 野崎六助 『北米探偵小説論』 1991. インスクリプト, 1998.
- 諏訪部浩一 『『マルタの鷹』 講義』 研究社, 2012.
- Ullén, Magnus. "'This Fearful Sympathy: Hawthorne's Allegory of the Fortunate Fall.'" *The Half-Vanished Structure: Hawthorne's Allegorical Dialectics*, Peter Lang, 2004, pp. 61-88.